

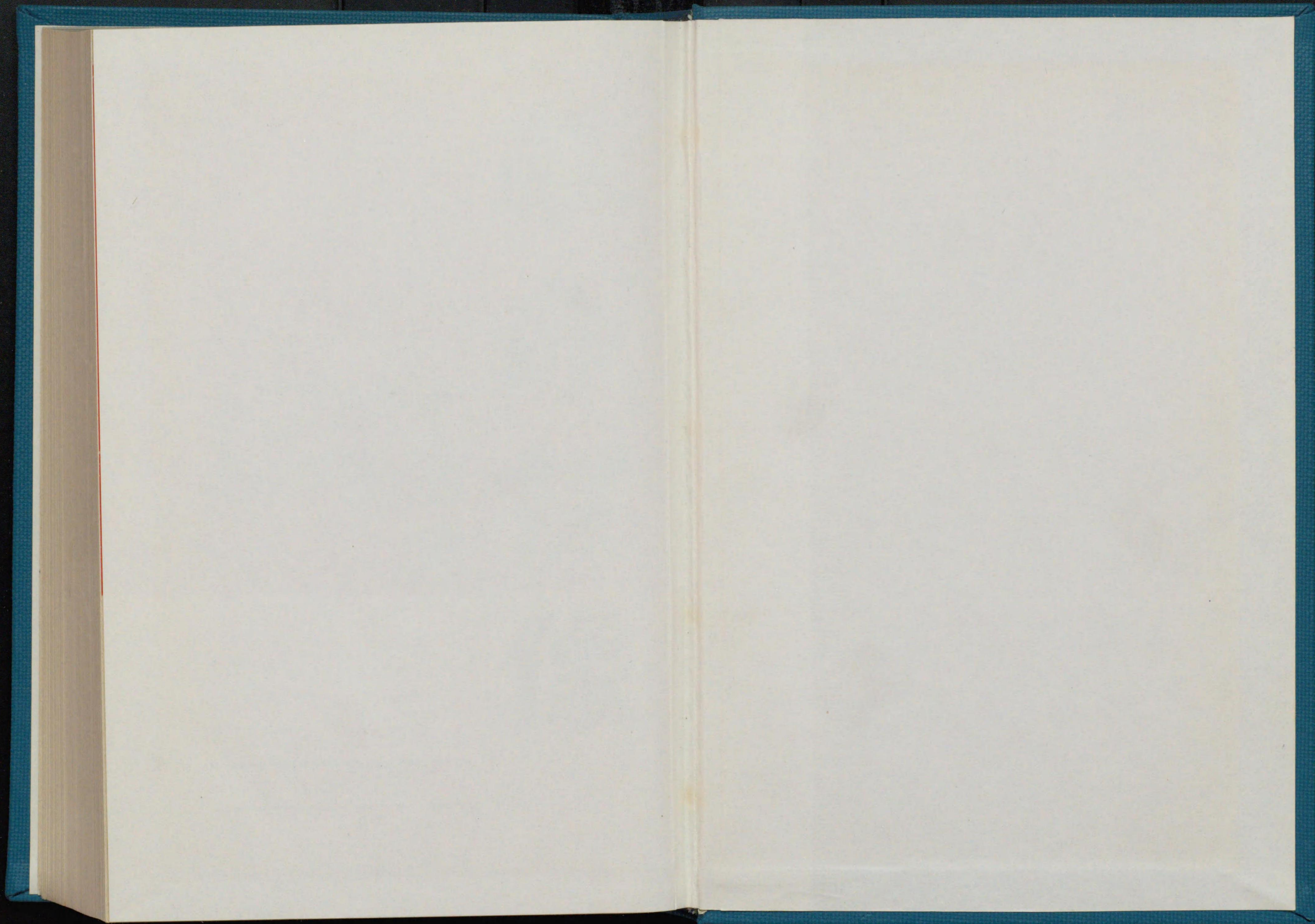
582-308



1200501522843

582
08





34956

トロツキイ
わが生活
2

革命
裸
像

1931

青野季吉



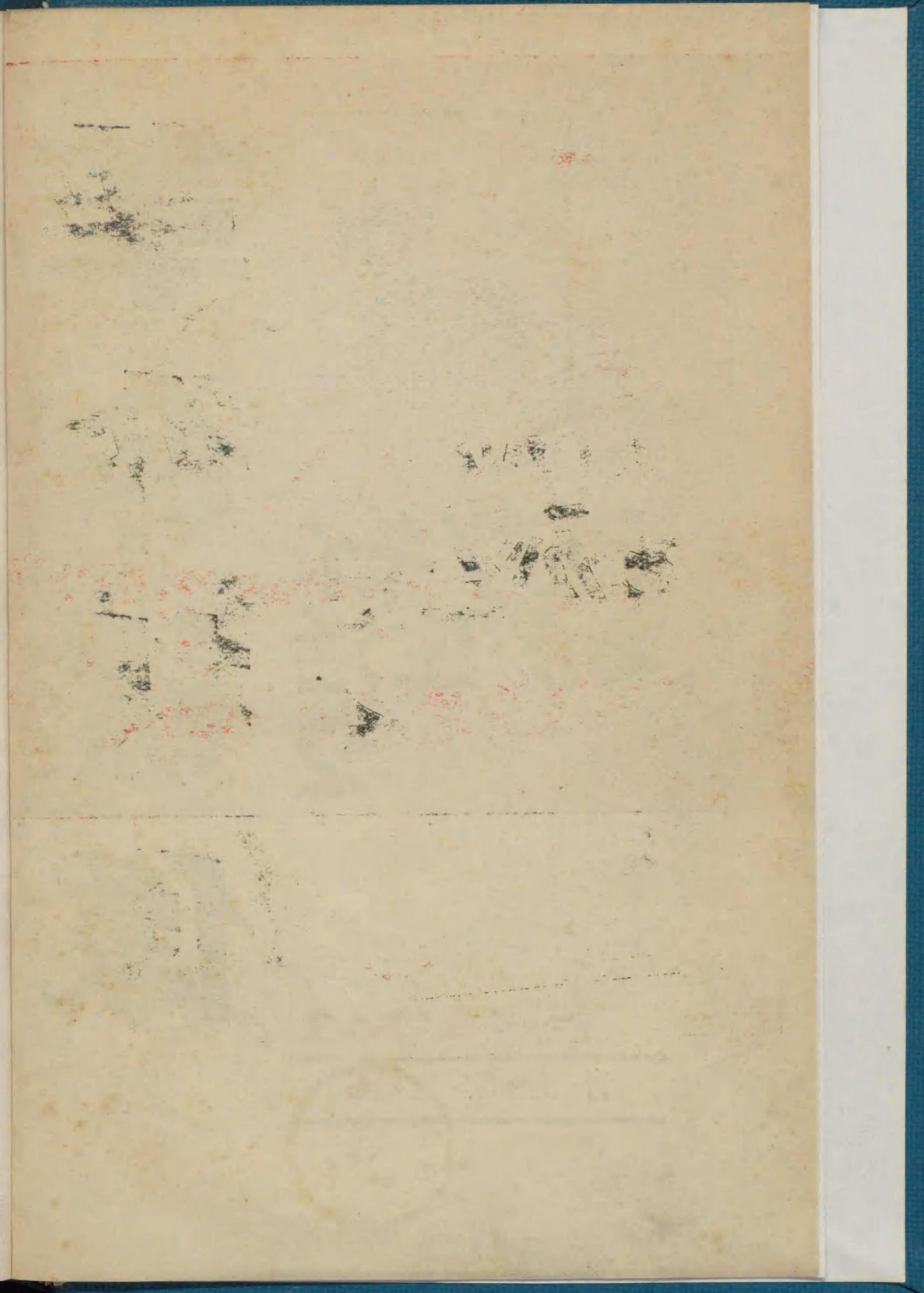
革命
裸
像



(向つて右より) トロツキイ、レーニン、カメネフ。



(正面) リューコフ (向つて右より) レーニン、セレブリヤコフ、ブレオブラツエ
ンスキー、カメネフ、ラシエウイツチ、トムスキイ、ブハーリン、カニーリン (ブ
ハーリンの背後) クレスチンスキイ。



HP2-308

譯者小序

(一) 我々は一九一七年の革命、それについてロシヤ・プロレタリアートの當面した重要な出來事、ブレスト・リトウスク媾和、内亂、新經濟政策、黨内鬭争、社會主義的建設等について、これまであふれるほどの文獻を示されて來た。だが、我々はいまだ、それらの大きな革命的實踐に、身をもつて參加して來た人の、内面からの伴らざる告白や、自己暴露に接したことはない。この書は、まさにプロレタリア革命といふ人類の空前の大事業を、素裸にむき出して、その鋼鐵のやうな骨格と、且つそのアキレス腱とを世界プロレタリアートの肉眼のまへにおいたものだ。

この書の前編をなす『自己暴露』が、革命生長の生理學だとすれば、この書は實に、革命展開の物理學であると言つてよい。しかもそれは理論的・政治的の闡明と、感覺的・藝術的の握把をもつて描き上げられた物理學だ。

(二) レーニンは、革命の道はネブスキーの坦道ではない、と言つた。これは今日、誰でも知つてゐる有名な言葉だ。だが、この言葉の眞の意義を理解してゐるもの、理解しようと欲してすらゐるもの

が、今日、我々のまはりに果してどれだけ存在するだらうか？ 犠牲の尊い屍を重ねてさへ行けば、その尖端が革命に到達するのではない。『理論』の敷石を丹念にならべてさへ行けば、その道が革命につづくのではない。一本の旗を憧憬する正直な、浪漫的な無数の頭腦の算術的集塊から、革命のミネルバ神が飛び出すのではない。しかもなほ時代のテンポと、個人の激情とに刺戟されて、かゝるものとして革命が取扱はれてゐるといふのが、我々のまはりの實状ではないだらうか？

不用意に革命の道を昭和通りのやうな坦道だと思ひ込んでゐる人々の眼には、この書に彫刻されてゐる革命の道が、あまりにも嶮岨で、迂曲し、高低し、打ち開けてゐると見る間に、たちまち深さも知らぬ荆棘に覆はれて行くのに接して、愕然たらざるを得ないであらう。しかもこれが、實踐された××なのだ。

(三) この書は、革命そのものを素裸にむいて、世界のプロレタリアートの前に示すと同時に、革命の『指導者』、『大衆』すらを素裸にむいて、萬人のまへに投出してゐる。しかもそれが飽まで、革命の精神に基いて！

トロツキイは、この書のなかで、革命にとつて最も恐しいことは、大衆に虚偽を與へることだ、いかなる時にも大衆に冷厳な現實を與へよ、と叫んでゐる。赤軍の勝利の祕密は、つねに戦線の伴らざる現實を大衆に知らせ、敗北・裏切りの場合にも、正直にそれを大衆のまへにおいたからだ、と事實に立つて證明してゐる。

スターリン、カメネフ、ジノヴィエフ、ブハーリン、リューコフ、その無数の我々に親しい名前の指導者達が、單にその名によつては呼ばれないで、その行動——理論と實踐——によつて呼ばれてゐる。而して、偉大なるレーニンを、微塵も誤りを犯さない自動計算器の如きものとする坊主主義、英雄崇拜主義にたいする徹底的の闘争が、この書に展開されてゐる。

我々はこれを單なる暴露と考へてはならぬ。革命と、その指導者達、その大衆においてすら、これまでさまざまの衣裳が他から投げかけられてゐる。その衣裳の重さに窒息しさうにすらなつてゐる。トロツキイのこの仕事は、その衣裳を一枚一枚と剝ぎ取つて、全體としての革命の強靱な肉體を顯さうとする仕事なのだ。

(四) 私は、さきに『自己暴露』の小序で、その譯出の仕事の途次、『ペンを離し、眼を外らすことすら欲しないほどの「面白さ」を覺えた』ことを告白した。この書において、特に一九一七年の革命の日の光景、プレスト嬢和の折衝の曲折、内亂のさまざまのストライキングな場面、レーニンの死の前後の隠れた事實、天山々脈を望むアルマ・アタへのトロツキイの流刑のシーン、英國の總同盟罷業

と蔣介石のクーデターの際のモスコウ、『物柔かい外貌の下に、不變の意志を隠した』ヨツフェの悲劇、コンスタンチノープルへの追放の有様——等々に接した時、私は『面白い』といふのか、息苦しいといふのか、實際、どう表現してよいか分らない、巨大なものに引摺られ、驅立てられ、導かれ——或は打ちのめされてゐる自分を見出したことを、告白しておかなければならない。そして一度仕事を終へて、最後の筆を投じた時、その『巨大なもの』こそ、他の何ものでもなく、大衆運動としての××そのもの、生ける實體であることを知つたのだ。

(五) だが、我々は革命の理論と實踐との一介の研究生に過ぎない。トロツキイの革命の臨床描寫や解剖が、いかに我々の心を打たうとも、それは研究の一つの手がかりでしかない。それはなほ、ロシアの現在の指導群の公の『レポート』が、我々にとつて同じくその一つの手がかりに過ぎないのと、少しも變らない。

私は、恰もこの書を譯出してゐた時、アメリカの小説家テオドル・ドライサアのロシア觀察記を読む機會をもつた。彼は、一九二七年の末——トロツキイ等の反對派が猛烈な鬭争してゐた時——ロシアから招かれて、その現實を觀察して廻つたのだ。その一節に次のやうな文字があつた。『……共產黨に指導されてゐる政府は、資本家トラストのやると全く同じやうに、労働を雇用してゐる。それ

は、能率を要求するばかりでなく、精神的忠誠と、從順を要求してをり、それが得られない以上、面倒が起る。何人でも何等かの仕方では不忠誠を示せば、彼は仕事を失つてしまふ。彼等が、一度共產黨中央委員會の現在の権力者と協調することが出来なかつた時、トロツキイ、ラデツク、ラコウスキイその他に何が起つたか？ 彼等は追放され、それも全く手つ取り早く追放されたのだ。この破門や沈黙強制の過程が進行してゐたその時に、私はロシアに——モスコウに——居て、ラデツク及びラコウスキイとばかりでなく、トロツキイと會見しようと企てゝゐた。たゞ、トロツキイの場合にだけは、私は、そんなことは不可能だ、私がそんな會見を求めたゞけでも、そのことは私自身ばかりでなく、トロツキイに害を及ぼすだらうと言はれた。すでに彼は、監視されてをり、彼の述べざるを得なかつたどんなことでも、妨害され、檢閲され、又は破棄された。そんなわけで、私が彼から何ごとかを得るところが出来たとしても、それも亦、取調べられ、檢閲に附せられたであらう。』

かういふことの行はれるのには、もちろんそれ自身の論理があるであらう。だが、我々は、かういふ事情の下で、××の實體の研究には、たゞ一つのチャンネルと、たゞ一つの咽喉を通じては、致命的に不十分なのを痛感せざるを得ないのだ。

(六) この書はトロツキイの『わが生活』中の後半の譯書であつて、曩に公にした譯書『自己暴露』

と合せて、『わが生活』の全體を完成するものである。したがつてこの書の第一章は原著（英譯書）の第二十六章に當るものであることを附記しておく。

約一年に亙つた私のこの仕事は、××の研究と理解に、何等か實質的に貢献し得れば、それで私は満足する。またその希望は、この書の持つ不拔な力によつて、必ずや達せられるであらうと信ずる。

一九三〇年・十二月・十八日

代々木西原の假寓で

青野季吉

目次

第一章	七月から十月まで	三
第二章	審判の夜	一九
第三章	一九一七年の「トロキイズム」	三三
第四章	權力を握る	四三
第五章	モスコウで	六七
第六章	ブレスト・リトウスクの商議	九〇
第七章	媾和	一一八
第八章	スウイヤーツースクの一箇月	一四五
第九章	列車	一七〇
第十章	ペトログラードの防衛	一九〇
第十一章	軍事反對派	二一〇
第十二章	戦略についての意見の相違	二二六
第十三章	新經濟政策への移渡、及びレーニンと私との關係	二五三

革命裸像

2

第十四章	レーニンの病氣……………	二六七
第十五章	亞流共の隱謀……………	三〇〇
第十六章	レーニンの死と權力の移轉……………	三三三
第十七章	黨内鬭争の最後の時期……………	三五〇
第十八章	流刑……………	三八五
第十九章	國外追放……………	四一八
第二十章	査證のない地球……………	四三四

第一章

七月から十月まで

ケレンスキーは戦線で攻撃準備をしてゐたので、それに関して私の發した七月四日の宣言は、ソヴェット大會においてポリシエヴィキ分派によつて朗讀された。この攻撃は正に、軍隊の存在そのものを脅かすものだ、と我々は指摘した。だが、臨時政府は、自分の口から出る堂々たる演説に、自分で夢中になつてゐた。閣僚達は、兵士大衆は革命によつて骨の髄まで動かされてしまつて、思ひのままにどうにでもこね上げられる、ひどく柔かい粘土のやうになつてゐると思つてゐた。ケレンスキーは戦線を巡歴し、諸軍隊をすかしたり、おどかしたりし、大地に跪いて、接吻し——一口に言ふと、ありとあらゆる仕方で道化た眞似をしたが、一方彼は、兵士達を悩ましてゐる當面の問題には、何一つ答へることが出来なかつた。彼は、安直な効果だけですつかり自己を欺いて、ソヴェット大會の支持を確信し、攻撃を命じたのだ。ところで曩にポリシエヴィキが警告した災禍がいよいよやつて來た時には、ポリシエヴィキは犠牲の羊とされた。彼等は狂暴に驅り立てられた。立憲民主黨が後楯となつてゐた反動勢力は、あらゆる方面からのしかゝつて來て、我々の首級を要求した。

臨時政府にたいする大衆の信頼は、絶望的に覆へされた。革命のこの第二段階で、ペトログラード

は再び餘りにも先走つた先陣に立つた。七月の騷擾中に、この前衛隊は、ケレンスキー政府と公然に衝突した。だがそれはまだ蜂起ではなくて、深くさぐつて行つた偵察に過ぎなかつたのだ。しかし七月の出会いによつて既に次のことが明白になつた。ケレンスキーは背後に全然『民主的』な軍隊を持つてゐないこと、我々に敵對して彼を支持する勢力は、反動革命の勢力であること、これだ。

七月三日、冬宮で會議が開かれてゐる時に、機關砲隊が示威運動を開始し、他の諸軍隊や、工場労働者にアピールしてゐるといふことを、私は知つた。この報知は私には寢耳に水だつたのだ。その示威運動は、大衆自身の發議で、自然發生的に行はれたものだが、翌日には更に擴大し、こんどは我々の黨派もそれに参加した。冬宮へは民衆が洪水のやうに押し寄せた。彼等はたゞ一つのスローガンしか持つてゐなかつた——『ソヴィエツトへ權力を渡せ！』

冬宮の前面で、群衆から離れて立つてゐた迂散臭さうな一團の人間が、農務大臣のチエルノフを掴まへて、自動車のなかへ押し込んだ。群衆は、それを無關心に見守つてゐた。とにかく群衆はチエルノフに少しも同情を持つてゐなかつたのだ。チエルノフが捕へられ、その身に危険が迫つてゐるといふ報知が冬宮に達した。人民黨員は、その首領を救ひ出すために機關砲車を使用することに決した。彼等は人氣が衰退したので神経質になつて居り、こゝで斷乎たる態度を示したいと思つたのだ。私はチエルノフと一緒にその自動車で群衆から遠ざかつて見ようと決意し、さうすれば後になつて彼を救

ひ出せようと思つた。しかしポリシエヴィキのラスコルニコフ——彼はバルチック海軍の中尉で、クロンスタットの水兵等を率えて示威運動に参加させたのだ——は、興奮して、即時にチエルノフを釋放せよと言ひ張つた。と言ふのは、チエルノフを捕へたのはクロンスタットの人間だと言はれるのを防がうがためだつたのだ。私は、ラスコルニコフの希望を實現させてやらうと決心した。彼自身に説明させよう。

『同志トロツキイの干渉がなかつたら、大衆の騷擾はどれだけつよくか、知れたものではなかつた。』と、この直情的な中尉は、彼の回想録で言つてゐる。『トロツキイはその自動車の前へ飛び乗つて、一刻も待つて居れない人のやうに、精力的に手を打ち振つて、静まれとの合圖を與へた。その瞬間、すべてのものが静まり返り、死のやうな靜謐があつた。高い、明晰な、リン／＼響くやうな聲で、レウ・ダヴィドヴィツチは、短い演説をなし「チエルノフに暴行を加へることに賛成のものは手を舉げよ！」と結んだ。誰も口を開くものさへ無かつた。』ラスコルニコフは猶ほ続ける。『反對の言葉を發するものは唯の一人もなかつた。「市民チエルノフ、君は釋放された。」とトロツキイは言つて、嚴肅に農務大臣の方へ體を向け、手を波打たせて、彼に自動車を離れるやうにと合圖した。チエルノフは半死半生だつた。私は、彼を助けて自動車から下してやつた。彼は、疲れ切つた、無表情な眼をして、まご／＼した、危つかしい足つきで、石段を上り、冬宮の玄關に消えて行つた。レウ・ダヴィド

ドイツは、勝利に満足して、彼と一緒に歩いて行つた。』

この記述の不必要な感傷的な調子を割引すれば、その場の光景は、正確に描かれてゐる。だが、それは敵意を持つ新聞が、私が私刑をするつもりでチエルノフを捕へたと確言することを妨げはしなかつた。チエルノフは、氣恥しげに沈黙を守つた。考へて見れば、『人民』の大臣たるものが、自分の名聲のお蔭でなくて、一ポリシエヴィキの干渉のお蔭で、生命の安全を保つたと、どの面下げて告白することが出来よう？

委員は後から後からと押しかけ、示威運動の大衆の名において、執行委員会が権力を執らんことを要求した。チハイゼ、ツエレテリ、ダン、及びゴツツは、彫像のやうにプレシヂユームに坐つてゐた。彼等は委員達には一言も答へず、ぼんやりと空間を見やつたり、當惑した、隠密の目なざしを交してゐた。ポリシエヴィキは、代る代る言葉を發して、労働者と兵士の委員を支持した。プレシヂユームの人々は沈黙してゐた。彼等は待つてゐた——だが、何を？　こんな風で數時間が経つた。ところが、眞夜中に、冬宮の廣間々に不意に、勝ち誇つたやうな嚙唳たるラツパの響きが鳴り渡つた。プレシヂユームの人々は、恰も電流に打たれたやうに甦つた。或る者が嚴肅に、ヴォリン聯隊が中央執行委員會の命のまゝに行動するために戦線から到着した、と報告した。ペトログラード守備隊のうちには、どこを捜したつて、『民主主義』政府が頼りになる兵隊は、たゞの一隊も無かつたのだ。そこ

で、武装軍が戦線から到着するまで待たざるを得なかつたのだ。

今や、凡てががらりと變化した。委員達は追ひ出され、ポリシエヴィキは演説することを許されなかつた。民主主義の指導者達は、大衆から與へられた恐怖にたいする復讐を我々の上に加へた。執行委員會のプラットフォームの演説は、武装一揆は遂に革命の正規軍によつて鎮壓されたと報告した。ポリシエヴィキは反革命黨だと宣言された。實にその一ヴォリン聯隊の到着が、これらをすつかりやつたのだ。しかもその時から三箇月半の後、その同じ聯隊は、ケレンスキー政府の顛覆に誠心誠意共力したのだ。

五日の朝、私はレーニンに會つた。大衆の方からの攻撃は打ちめされてゐた。『此度は彼奴等は一人々々、我々を射殺すだらう。』とレーニンが言つた。『いまが彼奴等にとつて丁度いゝ時だ。』だがレーニンは、反對黨を過重評價してゐた——彼等の害毒でなく、彼等の行動の勇氣と能力を過重評價してゐた。彼等は、それと餘り變らぬことをやるにはやつたが、一人々々我々を射殺しはしなかつた。ポリシエヴィキは、街路で打ちめされ、殺害された。士官學校の生徒は、クセシンスカヤ宮殿及び『プラウダ』の印刷工場を掠奪した。その工場前の通りには、一杯に原稿や手記が撒き散され、その破毀された手記の中には、私の小冊子『讒謗者に與ふ』が混つてゐた。七月の突込んだ偵察は、一方だけの戦闘に變型した。敵は容易に勝利を博した、と言ふのは、我々は戦はなかつたからだ。黨

はそれについて高價な犠牲を支拂つた。レーニンとジノヴィエフは隠れてゐた。打撃について、一般的の逮捕——これが當時の日程であつた。コサツク兵と士官學校生徒とは、これは『ドイツの金だ。』と言ふ口實で、逮捕されたものゝ貨幣を收奪した。我々の同感者及び半ば友達だつた者達の多くは、我々に背を向けた。冬宮では、我々は反革命者と宣告され、實際上、法律の保護の外におかれたのだ。

黨の指導部分の状態は悪るかつた。レーニンは遠くにをり、カメネフの一翼が頭を擡げてゐた。多くのもの——而してその中にはスターリンも含まれてゐた——は、たと事件の自ら進行するまゝに委せてゐるだけで、彼等の智慧を示すのは、後になつてからだと言つた調子だつた。中央執行委員會内のポリシエヴィキ分派は、冬宮のうちに孤立を感じてゐた。當時私はまだ黨員ではなかつたが、ポリシエヴィキ分派は私に委員を送つて、目下の形勢に就て教へて欲しいと求めた。——黨への私の正式参加は、やがて開かれる黨大會まで延期されてゐたのだ。勿論私は承知した。ポリシエヴィキ分派と私との談合は、敵の重い重い彈壓の下でのみきたへ上げられる種類の精神的結盟をつくり上げた。その時私は言つた。この危機の後で、我々は急激な上向を期待しなければならぬ。大衆は、事實に依つて我々の宣言の眞理であることを確認した場合、以前に二倍して強く我々に附着して来るであらう。さう言ふ瞬間には、人々は誤らない秤皿で測られるものだから、革命的な動向は何一つ見のがさない

やうに嚴重に見張つてゐる必要があると。いまでも私は、彼等と分れた時、彼等が私に示してくれた熱情と感謝を想ひ出して、うれしくなるのだ。ムラロウは言つた。『レーニンは遠くに行つてゐる。他の人達のうちでは、トロツキイだけが平然自若としてゐた。』

若し私が、別箇の事情の下で——尤も事情が變つてゐたら、回想録などは全然書かなかつたであらうが——この回想を書いたのなら、この書の中で述べてゐることの多くをその中に含めるのに二の足を踏んだであらう。だが今、私は、過去のことについて手廣く仕組まれた、かの虚偽——それが亞流共の主なる活動の一つだ——を忘れることは出来ないのだ。私の僚友達は、或は牢獄にあり、或は流刑になつてゐる。私は、他の事情の下では決してやらなかつたやうな仕方、私自身について語らざるを得ないのだ。私にとつては、それは歴史的眞實の問題であるばかりでなく、また同時に、いま猶進行しつゝある政治的闘争の問題なのだ。

私とムラロウとの斷えることない戦鬪上の友情及び政治上の友情は、その時に始まつた。私はこゝで、この人について尠くとも數言を費さなければならぬ。ムラロウはモスコウで一九〇五年の革命を通つて來た古いポリシエヴィキだ。一九〇六年、セルブコウで、彼は黒百人團のユデヤ人虐殺團の手に捕へられ——お定りのやうに、警官隊の保護の下で、運び去られた。ムラロウは體軀の偉大な巨人で、親切であると同時に大膽無比な男だ。彼は他の二三の人達と一緒に、敵——自治官廳の建物

を包圍してゐた——に取巻かれてゐるのを發見した。ムラロウは拳銃を手にして、その建物から出て来て、平然と群衆の方へ歩み寄つて行つた。群衆は少し後へすさつた。しかし黒百人團の選抜團が彼の途に立ちふさがり、御者達は彼に罵聲を浴せかけた。巨人は、拳銃をもつた手を舉げて、少しも前進をゆるめることなく『途を開け！』と命令した。ばら／＼と數人の人間が彼につかみ掛つた。彼はその中の一人を射ち仆し、他の者に手傷を負はせた。群衆は再び後へすさつた。ムラロウは、同じ平然たる足取りで、碎氷機のやうに群衆の中に途を拓いて、モスコウの方へ歩みつゞけて行つた。

その後彼の裁判は、二箇年つゞいた。當時反動革命が氣狂ひのやうに全國にみなぎつてゐたに拘らず、彼は放免された。ムラロウは、熟達した農業の専門家で、帝國主義戦争の間には自動車隊の兵士をつとめ、モスコウの十月戦闘にはその指導者となり、勝利を得た後には、モスコウ軍團の最初の司令官となつた。彼は、革命戦争の大膽無比の大將で、いつもしつかりしてゐて、單純で、ものに動じなかつた。戦闘に際しては、彼は、疲れを知らない生氣潑刺たる標本であり、また彼は農業上の助言を與へたり、自分で穀物の刈入れをやつたりし、手の空いてゐる時には、人間にも牛にも醫術上の處置を施した。極めて困難な情勢の下では、彼は平靜と、温かさ、自信とを發散した。戦争が終つて後、ムラロウと私とは、いつも一緒に我々の暇な時を送つた。我々はまた二人共狩獵が好きであつたので、それでも仲よくなつた。我々は、熊や狼をたづねて、或はまた雉や鴉を求めて、北部や南部を

かけめぐつた。ところで現在、ムラロウは、流刑にされた反對派として、シベリヤで狩獵をやつてゐる。

一九一七年の七月事件中でも、ムラロウはいつものやうに、平然自若として、多くの他の人々を鼓舞してゐた。その時期には、冬宮の廊下や廣間を頭を下げないで濶歩するには、我々は誰も彼も多分の自制が必要だつた。と云ふのは我々はそこで狂暴な眼差の笞刑に會ひ、毒氣のあるさゝやきを浴せられ、齒軋りをされ、『見ろ！ 見ろ！』と言つたやうな示威的な肘つき合ひを見せつけられたからだ。およそ憤怒のうちで、下らない驕つた『革命的』俗物共が、突然彼を頂上へせり上げた革命がほとんど彼の一時的の光輝を正に脅かしてゐると認め始めた時に抱く憤怒ほど、大きなものはないのだ。この頃、執行委員會の酒保へ行く道は、小さなゴルゴタであつた。そこで茶が分配され、黒パンのサンドウィッチ及びチーズ又は赤カピヤが分配されたが、後者はスモルニー館に、後にはクレムリン宮にどつさりあつた。夕食の獻立は、肉塊のまぢつた植物性のスープであつた。その酒保はグラフィウといふ兵士の擔任になつてゐた。ポリシエヴィキの食事が最も悪いとき、即ちレーニンがドイツのスパイだと宣言されて、小屋に隠れなければならなかつたときのこと、そのグラフィウが温い茶をそつと私の方へ迂して寄越したり、他のよりよいサンドウィッチをそつとくれたりして、その間に私を正視しないやうに努めてゐるのを認めた。彼は明かにポリシエヴィキに共鳴してゐたのだが、それ

を上役に秘密にしておかざるを得なかつたのだ。私はこれまでよりも注意して周囲を眺め始めた。グラフォウばかりではない。スモルニー館の下級者の全部——門番、使者、監守達——がまぎれもなくポリシエヴィキに共鳴してゐた。その時私は、我々の仕事は半ば勝利を得たと感じた。だが、それは半ばに過ぎなかつたのだ。

諸新聞紙は、ポリシエヴィキにたいして竝ならぬ毒氣のある、破廉恥な闘争を行つてゐた——この點でその闘争を凌駕したものは、數年後に反対派に向つてスターリンの行つた闘争くらゐのものであつた。七月に、ルナチャルスキーは若干曖昧な聲明を發したが、諸新聞紙は自然その聲明をもつてポリシエヴィズムの廢棄だと解釋した。或る新聞紙は、私に對しても同じ言説を加へた。七月十日に私は、臨時政府へ一書を提出し、その中で私がレーニンと完全に一致してゐる旨を聲明し、次の言葉でその書簡を結んだ。『諸君はレーニン、ジノヴィエフ、及びカメネフを逮捕すべき布告を出したが、その布告の實行から私を除外すべき何等の理由も、諸君は持ち得ないのだ。即ち私が上に述べた同志等と同様に、臨時政府の一般政策に徹底徹尾反對してゐることを疑ふ可き何等の理由も、諸君は持ち得ないのだ。』閣僚各位は、この書簡から當然の結論を引出して、ドイツの手先だといふ名目で、私を逮捕した。

五月のこと、ツエレテリーが水兵達を追つ拂ひ、機關砲隊の武装解除をやつてゐた時、私は彼に警告して、君はいまそんなことをやつてゐるが、革命を絞め殺さうとして絞首繩をみがいてゐる將軍を向ふに廻して、水兵達の助力を求めないではをれぬやうな時が、恐らくさう遠くはないだらう、と言つた。八月になつて、さういふ將軍がコルニロフといふ人物の姿をとつて現れて來たのだ。ツエレテリーはクロンスタットの青チャケツ達の援助を求め、彼等はそれを拒まなかつた。巡洋艦オロラはネバ河の水を分けて入つて來た。かくも速かに私の豫言が適中したのを見た時、私はすでにクレスチーの牢獄に在つた。水兵達はオロラから特別委員をその牢獄に寄來して、私の助言を求め、冬宮を防禦すべきか、それとも強襲して占領すべきか？ と訊ねた。私は彼等に、コルニロフをやつつけてしまふまで、ケレンスキーとの取引の結着をつけるのを延ばすやうにと勸告した。『我々のものは、やはり我々から逃げはしないだらう。』

『逃げないか？』
『逃げない。』

牢獄にゐた間に、私の妻と小供達は、私に會ひに來た。小供達はその時まで、彼等自身で若干の政治的經驗を獲得してゐた。彼等は夏の間を、或る退役大佐の家族の田舎の家で暮してゐた。訪問者がよくその家へ來たが、その多くは士官で、ウオツカで力がつくと、彼等はポリシエヴィキを罵倒するのが僻だつた。七月の日の間は、その罵倒が頂點に達した。(これらの士官の或る者等は、その後

間もなく南部へ赴き、そこでは既に未來の『白衛』軍が集められてゐた。食事の時のこと、或る若い愛國者がレーニン及びトロツキイをドイツのスパイだと呼んだ。すると私の上の子供は椅子をもつて、下の子供は食卓ナイフをつかんで、その男に向つて襲ひかゝつた。大人が引離したので、子供達はヒステリックにすゝり泣きをしながら、自分達の部屋に閉ぢ籠つた。彼等は、そこでポリシエヴィキにどんなことが起つてゐるか、それを見極めるために、徒歩でペトログラードに行かうと、祕密に計畫をめぐらしてゐた。が、幸にも母がやつて来て、彼等をなだめて、連れ去つた。しかしペトログラードの市中でも、状態はよくは見えなかつた。諸新聞紙はポリシエヴィキを攻撃してをり、父は牢獄にあり——革命は飽までも絶望的だつた。しかしそのことは牢獄の面會室で、妻が金綱越しにそつと小形ナイフを私に渡すのを彼等が見守つてうれしがるのを妨げはしなかつた。本當の革命はこれから来るんだぞ、と言つて私は彼等を慰めつゝけた。

私の娘達は、それよりもつと積極的に政治生活に引入られてゐた。彼女達は、モダーン・サーカス館の集會に参加し、示威運動に加はつた。七月の日の間に、彼女達は二人とも、群衆におしくられて、一人は眼鏡を失くし、二人とも帽子を失くした。彼女達は、地平線に姿を現したばかりの父を見失ひはしまいかと惧れてゐた。

コルニロフがペトログラードへ前進してゐる時期の間、牢獄の統治は危機に瀕してゐた。若しコル

ニロフが市中へ入つて来れば、彼は即刻、ケレンスキーによつて逮捕されたポリシエヴィキの全部を殺戮するに相違ないと、誰も彼も信じてゐた。中央執行委員會はまた、諸牢獄が首都の白衛軍的要素によつて侵入されるだらうと惧れてゐた。そこで大部隊の軍隊がクレスチー監獄を護衛するために割當てられた。勿論、その軍隊は『民主主義』政府の味方ではなく、ポリシエヴィキの味方であり、いつでも我々を釋放しようとしてゐた。だが、さういふ行動は、即時蜂起の合圖となつたであらうが、蜂起の時はまだ来てゐなかつた。その間に、政府自身が我々を釋放し始めた。その理由は、曩に冬宮を護衛するためにポリシエヴィキの水兵を招いたと同じものであつたのだ。私はクレスチー監獄から真直に、革命防衛のために新たに組織された委員會に赴き、其處で、曩に私をホーヘンツォーレルン家の手先だとして投獄し、まだその告發を撤去してゐない當の紳士達と席を同うしたのだ。私は率直に告白しなければならぬが、人民派やメンシエヴィキ達のその顔付を見てゐると、コルニロフが彼等の頸根つこを引捉へて、空中で振り廻してやればいゝと思はしめるものがあつた。だがこの願ひは、非禮であるばかりでなく、反政治的であつた。ポリシエヴィキは身を固めて立上り、いづこにおいても防衛の第一線に在つた。コルニロフ叛亂の經驗は、七月の事件の經驗を完成したもので、こゝで、繰返して、ケレンスキーとその一黨は、彼を擁護する彼等自身の勢力を何等持つてゐないといふ事實を暴露したのだ。コルニロフに反抗して立上つた軍隊は、十月革命の準備された軍隊であつたのだ。我

我はこの危機を利用して、労働者を××させたが、その労働者たちこそ、曩にツエレテリーが汗みどろになつてその武装解除につとめたものなのだ。

この數日間、首都はヒツソリしてゐた。コルニロフの入都は、或るものは希望をもつて、他の者は恐怖をもつて、これを待つてゐた。私の子供達は、誰か『明日はやつて来るよ。』と言つたのを聞いて、翌朝、衣物を着ない中に、窓から外をのぞき見してコルニロフが到着したかどうかを窺つた。しかしコルニロフは到着しなかつた。大衆の革命的上向力がいかにも強力だったので、彼の叛亂は譯もなくちり／＼ばら／＼に、退散してしまつたのだ。だが痕跡も残さない譯ではなかつた。と言ふのはその叛亂はことごとくポリシエヴィキの仕事に利益を與へたからだ。

『應報の來るのは遅いものではない。』と私はコルニロフ事件の當時に書いた。『追ひまкруられ、迫害され、誹謗されながら、我々の黨はこれまで現在ほど急速に成長しつゝあることはなかつた。而してこの過程は首都から地方へ、地方から農村及び軍隊へ……擴がつて行くであらう。我々の黨は、プロレタリアートの階級組織であることを一瞬たりとも止めないで、迫害の熱火のなかで、一切の抑壓され、踏みにじられ、欺かれ、追ひ立てられた大衆の眞の指導者に轉化するであらう。』

我々は上向力と辛うじて歩調を保つことが出来た。ペトログラード・ソヴィエツト内のポリシエヴィキ黨員は、日に日にその數を増して行つた。我々はソヴィエツト成員の約半數を代表してゐたが、

それでもまだプレシヂユームに一人のポリシエヴィキもゐなかつた。そこで我々は、ソヴィエツト・プレシヂユームの改選問題を提議した。我々は、メンシエヴィキ及び人民派との聯立プレシヂユームを形成しようと申し出た。後になつて分つたことだが、レーニンは當時それを悦ばなかつた、と言ふのは、そのことによつて我々の側に妥協的傾向が生じやしないかと惧れたからだ。しかし何等の妥協も行はれなかつた。對コルニロフの鬭争で、我々はいそその前に共同鬭争をやつたに拘らず、ツエレテリーは聯立プレシヂユームの形成を拒否したのだ。

我々はそれを望んでゐた。黨の方向に沿つた候補者の名簿にたいする投票のみが、現在の問題を解決することが出来るのだ。私は、我々の反對派の名簿にケレンスキーが含まれてゐるかどうかを訊ねて見た。彼は、ソヴィエツトに参加しなかつたが、形式上は、プレシヂユームの一員であり、あらゆる仕方でそれに對する無視的態度を示してゐた。この改選問題はプレシヂユームをびつくりさせた。ケレンスキーは好かれてゐなければ、尊敬されてゐなかつたが、かりにも首相たるものを否認することは不可能だつた。プレシヂユームの成員達は、お互ひに協議したあとで、『勿論、彼はその中に加へられてゐる。』と答へた。我々はそれ以上は何も望まなかつた。こゝに議事録からの抜萃がある。『ケレンスキーは最早プレシヂユームに居ないものと我々は信じてゐた。(騒然たる喝采。)が、今、我々の誤つてゐたことを知つたのだ。ケレンスキーの影は、チハイゼとザヴェヂエの間には

いてゐる。そこで諸君が、プレシヂエームの政治的整理者の承認を求められる場合には、諸君はかくして實にケレンスキーの政策の承認を求められてゐるのだ、これを記憶しなければならぬ。(騒然たる喝采。)」このことによつて、これまで動搖してゐた委員の更に他の百名内外が、我々の側に投じて來たのであつた。

ソヴェットの會員數は、一千名をはるかに越えてゐた。投票は、扉の外に出て行く方法で行はれた。そこには恐しい興奮があつた。と言ふのは、當面の問題はプレシヂエームでなくて、革命だつたからだ。私は、仲間たちと、控室をあちこちと歩いてゐた。我々は、我々の得票は半數に百票足らないだらうと計算し、それでも成功だと考へてゐた。ところが俄然我々は、社會革命黨とメンシユヴィキの聯合體よりも、百票多くの投票を得たのだ。我々は勝利者だつた。私は議長席についた。ツエレテリーは、議長席を離れながら、諸君は、我々が革命を指導してゐた期間の尠くとも半分だけ、ソヴェットにとよまつてゐて欲しいと述べた。言葉を換へて言ふと、我々の反對派は、三箇月以上は我々に信用賣りをしなかつたのだ。

彼等は大きな誤算をやつた。我々は途を踏み迷はず、眞直に權力への行進をつゞけてゐたのだ。

第二章 審判の夜

革命の第十二時間目は近づいてゐた。スモルニー館は要塞に轉形しつゝあつた。望樓には舊執行委員會からの遺産の若干の機關砲があつた。スモルニー館の司令官グレコウ大尉は、まぎれもない敵であつた。他方、機關砲隊の隊長は、私のところへやつて來て、彼の隊員はみんなボリシエヴィキの味方だと告げた。私は誰か——多分マルキンだつたらう——に指令して、機關砲を檢閲させた。機關砲はどれもこれも、長くうつちやらかしておいたので、役に立たない状態になつてゐることが分つた——兵士達は、ケレンスキーを防衛する意嚮がなかつたので、すつかり弛緩してゐたのだ。私は、新たな、もつと手頼りになる機關砲隊をスモルニー館に呼び寄せた。

十月二十四日* 灰色の朝、早朝。私は建物のうちをそちこちと徘徊した。一つには運動のため、一つには萬事が甘く行つてゐるかを確かめ、必要な人員を鼓舞するためだつた。スモルニー館のはてしのない、まだほの暗い廊下の石壘にそつて、兵士達が、心からの掛け聲をかけ、高い足音をさせて機關砲を曳きすつてゐた——これが曩に私の呼び寄せた機關砲隊であつたのだ。まだスモルニー館にとどまつてゐた若干の社會革命黨員とメンシユヴィキとは、おびえたやうな顔を我々から外向けて、眠

むさうにそこらをぶらついてゐるのが見られた。機關砲の音楽は、彼等の耳には兎兆だつたのだ。彼等は次々と取急いで、スモルニー館を去つて行つた。我々は今や、その建物を完全に支配したのであり、そしてその建物は、この都市及び全國の上に、ポリシエヴィキ的頭角を高くもたげる準備をしてゐたのであつた。

*これは當時まだロシアで公の曆であつた舊曆によつたものだ。ヨーロッパで普通に用ひられてゐる曆では十一月六日だ。この革命が、或は十月革命と呼ばれ、或は十一月革命と呼ばれるのは、これがためだ——
エル・デイ・トロツキイ——。

その朝早く、男と女の二人の労働者が、黨の印刷所から驅けて来て、ハツ／＼と呼吸を切らしながら、階段のところで私に衝き當つた。政府が、黨の中央機關紙とペトログラード・ソヴィエツトの新聞を閉鎖してしまつたのだ。政府の代表者等が兵學生を伴つてやつて来て、印刷工場へ封印をしまつたのだ。一瞬間、この報知は我々をビツクリさせた。かういふ遣り方が、合法的手續でもつて、精神の上に加へられる権力なのだ。

『封印を破つてもよいでせか？』 とその女が訊ねた。

『破つちまへ。』と私は答へた。『それから君達の安全のために、信用の出来る護衛をつけてやらう。』
『私達の次の室に工兵大隊が居ります。水兵達が私達を保護してくれることは、たしかです。』とそ

の女の印刷工は、自信をもつて言つた。

軍事革命委員會は即刻命令を發した。『一、革命的諸新聞紙の印刷工場は作業を開始すべし。二、編輯局員及び記者を召集して新聞紙の發行を繼續すべし。三、反革命の攻撃から革命的印刷所を防衛する名譽ある義務は、これをリトウスキー聯隊及び第六工兵豫備大隊の勇敢なる兵士に委任す。』而してこの時以來、印刷工場は中斷なく作業し、兩新聞紙は發行を繼續した。

二十四日に、電話交換局に故障が起つた。兵學生がそこを塹壕で圍んでしまひ、彼等の保護の下で電話交換手がソヴィエツトの反對派側に加擔し、我々の方の電話の交換を拒んだのだ。これが最初の任意なサポターヂュであつた。軍事革命委員會は、水兵の一部隊を電話交換局に派遣し、その部隊は交換局の入口の前に二門の小砲を据ゑた。電話のサーヴィスは回復された。かくて行政機關の××が始まつたのだ。

スモルニー館の三階の小さな隅つこの部屋に、軍事革命委員會はひつ切り無しに會議をひらいてゐた。軍隊の動靜、兵士及び労働者の態度、諸兵營内でのアデテーション、ユデヤ人虐殺の組織者の企圖、ブルジョア政治家や外國大使達の隱謀、冬宮での出來事——これら一切に關する報道がこの中心に向つて集まり、諸黨派の會議の報道は、正式にソヴィエツトに達した。報告者はあらゆる方面からやつて來た——労働者、兵士、官吏、門番、社會主義的兵學生、奴僕、薄給官吏の細君。彼等の多く

は全くやくざなことしか報告しなかつたが、中には重要な、極めて価値のある報道を供給したものがあつた。

その一週間、私はスモルニー館から殆ど一步も出なかつた。毎夜々々、着物を脱がないで革の寝臺に横たはり、時々思ひ出したやうに眠りを攝り、そして絶えず早打や、斥候や、オートバイ使者や、電話手や、引切りなしにやつて来る電話の呼出しで、呼び覺された。決定的の瞬間は目睫の間に迫つてゐた。もうかうなつては後戻りなどのあり得ないことは、明々白々であつた。

二十四日の夜、革命委員會の委員達は、さまざまな方面へ出向いて行つて、私だけが獨り残つた。しばらくすると、カメネフがやつて來た。彼は蜂起には反對だつたが、この決定的な夜を我々と一緒に送るためにやつて來たので、我々は相携へて三階の例の小さな隅つこの部屋に居つた。そこは丁度革命のこの決定的な夜の司令塔のやうであつた。

我々に隣つた大きなガランとした部屋に電話室があつて、重大な事柄やつまらないことで、ベルがとめどもなく鳴る。ベルが鳴る度に、沈黙の警戒が高まる。灯がほの暗く、海から來る秋風の吹きまくるペトログラードの荒涼たる街路、おじけて寢床にもぐり込み、この危険で奇怪な街路に何が起つてゐるかを推知しようとしてゐるブルジョアや官吏達、兵舎の深い眠りで靜まりかへつてゐる労働者

街——この光景は誰でも容易に心に描き出せるだらう。政府側の諸黨の委員會や協議會は、ツア一の諸宮殿の中で、疲れ切つてすつかり無能力になつて居り、そこではデモクラシーのこの生きた亡靈達と、まだその邊にうろついてゐる王政の亡靈達とが、肩をこすり合はせてゐる。時々、廣間々々の絹飾や鍍金飾類が、闇黒の中に沈んでしまふ——石炭の供給が不足になつたのだ。諸々の地區では、労働者、兵士及び水兵の諸部隊が、絶えず警戒してゐる。若いプロレタリアは、小銃や機關銃の負皮を肩にかけてゐる。街路の見張番は、街々で火をたいて體を温めてゐる。この秋の夜、一つの時代から次の時代へと頭を突込んでゐる首都の生命は、一塊りの電話機のまはりに集中されてゐるのだ。

あらゆる地區、郊外、首都の近接地からの報道は、三階の部屋を焦點に集まつてゐる。あらゆることが予見されてゐたやうだ。指導者は各々部署についてゐる。連絡は確立されてゐる。忘れたことは何も無いやうだ。

もう一度、それを心に想ひ起し、繰返して見よう。この夜が萬事を決するのだ。ついこの夕方のことだ、私はソヴェエツトの第二回大會の委員へ送つた報告のなかで、自信をもつてかう言つた。『諸君が若し頑張れば、内亂はなく、我々の敵は直ぐに降伏するだらう。而して諸君は、當然諸君に屬する地位を占めるだらう。』勝利をうることについて、何等疑ひはあり得ない。この場合およそ蜂起の勝利が確實であると同様に、それは確實だ。しかしまだこの數時間は緊張し、危険に満ちてゐる。と

言ふのはこの夜が萬事を決するのだから。政府は、昨日士官候補生を動員すると同時に、巡洋艦オロラにネバ河を退去せよと命じた。彼等は、去る八月にスコベレフが頭を下げて、コルニコフの攻撃から冬宮を防衛して欲しいと頼んだその同じポリシエヴィキ水兵であつた。その水兵達は、軍事革命委員会に訓令を求め、その結果、オロラ號は昨日投錨してゐた場所に、今夜も同じく投錨してゐる。ハヴロウスクから私にかゝつた電話の報知によると、政府は、同地から砲兵一隊、ツァールスコエ・セロから選抜兵一大隊、ピーターホーフ兵學校から學生士官を招致しつゝあると言ふ。ケレンスキーは冬宮のなかへ、兵學生、士官及び婦人選抜軍を引入れてゐる。私は委員達に對して、ペトログラードへの近接地一帯に、信頼するに足る軍事的防衛を配備し、政府の招致した諸部隊にはアデテーターを送るやうにと命令する。我々の訓令や報道はことごとく電話で送られ、政府の手先共はそれを妨害する地位にある。だが、彼等は我々の通信を左右することが出来るか？

『彼等を言葉で止めることが出来なかつたら、××を使へ。諸君は生命にかけて、その責任を持つたらう。』

私はこの句を時々繰返す。だが私はまだ、私の命令の力を信じてないのだ。この革命はまだ餘りに信賴的で、餘りに寛大で、樂天的で、氣樂なのだ。それは、實際に武器を使用するといふよりも、寧ろ武器で脅かすことを選んでゐる。この革命はなほまだ、一切の問題が言葉で解決され得ることを期待

してをり、且つその限りで、これまで成功をおさめてもゐるのだ——敵對的要素は革命の熱い呼吸の前に、消散してゐる。その日(二十四日)の朝早く、××を使用し、もし街上でユヂヤ人虐殺の兆候があつたら、何ものにも屈するなどの命令が發せられた。だが我々の敵は、街路のことを敢て考へることすらせず、隠れ家へ逃込んでしまつてゐる。街路といふ街路は我々のものだ。我々の委員達はペトログラードへの近接地全部を警戒してゐる。士官學校と砲手とは、政府の召集に應じなかつた。ただオラニエンバウムの兵學生の一隊が、我々の防禦を通りぬけて、行進することに成功した。けれど私は、電話を通じて、彼等の行動を見守つてゐた。彼等は結局、スモルニー館へ使者を送つてよこした。政府は援助を求めたが無駄だつた。彼等の脚下で大地は迂りつゝあつたのだ。

スモルニー館の外部防衛は、新しい一機關砲枝隊の増援を受けた。守備隊のあらゆる部分との連絡は、妨害されることはない。服務隊は、聯隊といふ聯隊で警戒に従事してゐる。委員はその部署についてゐる。各守備隊からの委員は、スモルニー館に屯して、軍事革命委員会の指揮の下に在り、一朝守備隊との連絡が切斷された場合には、直ちに使用されることになつてゐる。諸地區からの武装枝隊は、諸街路にそつて行進し、門のベルを鳴らし、又はそれを鳴らさないで門を開き、一施設から他施設へと次々に占領する。殆どいたるところでこれらの枝隊は、しびれを切らして彼等を待つてゐた友達に迎へられる。鐵道の諸終點では、特別に任命された委員が、上り下りの列車を警戒して居り、特

に軍隊の動靜を警戒してゐる。そこからは何一つ混亂のニュースは來ない。市内の最も重要な地點は全部、殆ど無抵抗、無戦闘、事故無しに、我々の手に引渡された。電話だけが我々に報告する『我々はこのにある!』と。

萬事うまく行つてゐる。これ以上うまくは行き得なかつたらう。さあもう私は電話を離れてもよからう。私は寢臺に坐る。緊張した神経がゆるんで來る。だるい疲労の感じが襲つて來る。

『煙草をくれないか。』と私はカメネフに言ふ。(その頃は私はまだ煙草をすつてゐたが、それも思ひ出したやうに時々吸ふだけだつた。) 私は一二度プーと煙を吹く。だが、突然、『これだけが不足だつたんだ!』といふ言葉と共に、私は失神する。(私は母からの遺傳で、肉體上の苦痛とか病氣とかで悩むときは、一種失神の魅力を感じる性質をもつてゐる。或るアメリカの醫師は、私を癲癇病者だと言つたが、それはこれがためだ。) 意識を回復すると、私は、カメネフがおびえたやうな顔をして、私の上にかゞんでゐるのを見る。

『藥を持つて來ようかね?』と彼は訊ねる。

『何か食べものを持つて來てくれたら、その方がすつといふんだがなア。』と私は一寸考へたあとで答へる。私は、このまへ食べものを攝つたのは何時だつたか、想ひ出さうと努める。だが、想ひ出せない。とにかく、それは昨日のことではなかつたのだ。

翌朝、私はブルジョア、メンシユヴィキ、人民派の諸新聞紙を掴み取つた。彼等は蜂起のことは一言すら言つてゐない。諸新聞紙は曩に、やがて行はれる武装兵士の行動や、掠奪のことや、河のやうな流血の避けがたいことや、暴動のことについて、恐しくわめき立てゝゐたので、いま、實際に蜂起が起つたときに、それを蜂起と認める能力がなかつたに過ぎないのだ。諸新聞紙は、參謀總長と我々の商議を額面通りに受取つて、我々の術策的聲明をもつて、態度動搖の兆だとしてゐた。その間に一方では、スモルニー館から發せられた命令にしたがつて、混雜もなく、市街戦もなく、殆ど發砲も流血もなく、一つの施設は他の施設に次いでつきつと、兵士、水兵の諸枝隊及び赤衛軍によつて占領されてゐた。

ペトログラードの市民は、新しい統治の下で、恐怖した眼を擦つた。ポリシエヴィキが政權を掌握するなんて、そんなことが實際あり得ることだつたか? 市會からの委員が私に會見を求め、二三のとても眞似の出來ない質問をした。『あなたは軍事行動を提議されますか? もしされるとすれば、何で、何時?』 その場合市會は『二十四時間以内に』それを知らして貰はねばならない。ソヴィエツトは安寧秩序を保證するためにどう云ふ手段を講じたか? それからつまりさう言つた類のこと。

私は、革命についての辨證的見解を説明して、彼等に答へ、市會から軍事革命委員會へ委員を送つ

て、その事業に参加するやうにと勸告した。この勸告は、蜂起そのものよりも以上に、彼等を驚愕させた。私は、いつものやうに、武装的自衛の精神をもつて言葉を結んだ。『もし政府が鐵を使用すれば、鋼鐵をもつてそれに答へるでせう。』

『あなたは、ソヴィエツトへの政權移讓に反対してゐるといふ廉で、市會を解散する意嚮がありますか？』

私は答へた。『いまの市會は昨日を代表してゐるものです。もし紛議が起れば、我々は市民に對して、權力問題について、新しい市會を選出せんことを提議します。』委員は來たときと同じで歸つて行つたが、その去つたあとには、我々の勝利は確立されたといふ感情が残つた。その夜の間に或るものが變化してゐた。三週間前、我々はペトログラード・ソヴィエツトで過半数を獲得した。我々は一本の旗より以上のものは殆ど持つてゐなかつた——印刷工場もなく、資金もなく、支部もなかつた。政府が軍事革命委員會の逮捕を命じ、我々の居所を夢中で搜索してゐたのは、すぐ前の夜のことだ。今日は、市會の委員が、市會の運命について尋ねるために、その『逮捕された』軍事革命委員會へやつて來たのだ。

政府はまだ冬宮で閣議を開いてゐたが、それは最早一箇の影に過ぎなかつた。政治的には、それは存在をやめてしまつたのだ。二十五日は終日、冬宮はあらゆる方面から我々の軍隊によつて包圍され

てゐた。午後の一時、私はペトログラード・ソヴィエツトで情勢報告をやつた。新聞の報道はかうであつた。『軍事革命委員會の功によつて、臨時政府は最早存在しなくなつたことを、こゝに私は宣言する。(喝采) 數人の大臣は既に逮捕された。(ブラボー)』他の大臣達は數日中乃至數時間中に逮捕されるであらう。(喝采) 軍事革命委員會の手配の下になる革命守備隊は、憲法議會を解散させた。(大喝采) 我々はこゝで終夜警戒してゐた。而して革命的な労働者、兵士の守備隊の諸枝隊は、黙々として各自の仕事に従事してゐたので、我々は電話で彼等の行動を知つた。市民達は、一つから他への權力の移動も知らずに、平和に眠つてゐた。停車場、郵便局、電話局、ペトログラード電話本局、國立銀行は占領された。(大喝采) 冬宮はまだ占領されないが、その運命は次の數分間に定まるであらう。(喝采)』

この露骨な記述は、その集會の氣分について、誤つた印象を與へるかも知れない。私の回想はその特殊點を補ふ。私はその夜中に行はれた權力の變移を報告した時に、そこには數分間、緊張した沈黙があつた。次いで喝采が始まつたが、それは嵐のやうに激しいものでなく、寧ろ考へ深い喝采であつた。大會は緊張し、待つてゐた。労働階級は鬭争のために準備してゐた間は、名狀すべからざる熱心によつて擱まれてゐたが、我々が一度權力獲取の闘に立つた時、この無思慮の熱心は、困惑した考へ深さに道をゆづつた。確固たる歴史的本能がこゝに自らを顯現したのだ。我々の前途には恐らく、舊

世界からの最大の抵抗があり、そこには闘争と、饑餓と、寒冷と、破壊と、流血と、死とがあるだろう。『我々はこの凡てに打勝つだらうか？』と多くの人々は自問した。數分間、困惑したやうに反省したのはそのためだつた。『我々はそれに打勝つだらう！』我々は誰も彼もかう答へた。新しい危険は遙か遠方にブーツと見えてゐた。しかし今は、我々は大きな勝利の感覺を味ひ、それが我々の血の中で歌つてゐた。而してそれは、レーニンに與へられた騒然たる歓迎となつて現れた。彼は、四箇月の間姿を消してゐた後で、その集會に始めて姿を現したので。

その夕方遅く、ソヴィエツト大會の開會を待つてゐる間、レーニンと私とは會場に隣つた部屋に休んでゐた。それは椅子の外には何も無いガラソとした部屋であつた。誰か私達のために床に毛布を敷いてくれ、他の誰か——多分レーニンの妹だつたと思ふが——私達に枕を持つて來てくれた。私達は竝んで横になつたが、肉體と精神とは、張り過ぎた絲のやうにゆるんでゐた。丁度よい休息だつた。我々は眠ることが出来なかつたので、低い聲で話し合つた。今始めてレーニンは、蜂起を延期したことについて妥協した。彼の危惧は驅逐された。彼の聲には稀に見る眞摯さがあつた。彼は、いたるところに屯してゐた赤衛軍と、水兵と、兵士との混合見張隊のことについて、一切を知ることに興味を傾けてゐた。『なんと云ふ驚異的な光景だ。労働者がXをもつて、兵士とならんで、街路の火の前に立つてゐるとは！』彼は深い感情をもつて、さう繰返した。たうとう、兵士と労働者とは結合されたのだ！

それから彼は不意に起立して、『そして冬宮はどうかね？ 彼處はまだ占領されてゐない。彼處には危険はないかね？』と訊ねた。私は起上つてその行動の進行の模様を電話で訊ねようとした。だが彼は私をとめた。『横になつてゐ給へ。誰かをやつて見させよう。』しかし我々は長く休んでゐることは出来なかつた。ソヴィエツトの會議は次のホールで開かれてゐた。レーニンの妹ウリヤノヴァは我々をつれに走つて來た。

『ダンが演説してゐますよ。聽集はあなた方を求めてゐます。』

ダンは、繰返し斷續する聲で謀反人達を罵倒し、この蜂起の崩壊は不可避だと豫言してゐた。彼は、我々に社會革命黨及びメンシユヴィキと聯立政府を形成せよと要求した。つい前日まで權力を掌握してゐて、我々を驅り立て、牢獄に投じた諸黨派は、今や我々が彼等を轉覆したので、こんどは我々に彼等と協調するやうにと要求しつゝあつたのだ。

私は、ダンと彼を通じて、革命の昨日に答へた。『現に今起つてゐることは蜂起であつて、謀反ではない。民衆の大衆の蜂起は辯明を要しない。我々は労働者及び兵士の革命的勢力を強力にしつゝあつたのだ。我々は公然と大衆の意志を蜂起に向つて鍛へつゝあつたのだ。我々の蜂起は勝利を得た。然るに今、我々は我々の勝利を放棄して、協調せんことを求められてゐる。いつたい誰と？ 汝等は

荒廢した、結合のない個人だ。汝等は破産者だ。汝等の役目は終つたのだ。汝等は今から汝等に相應の場所へ行け——歴史の穢いゴミ箱へ！』

これが、四月三日、レーニンがペトログラードに到着した日とその時間に始まつた、かの長い對話の最後の返答であつたのだ。

第三章 一九一七年の『トロツキイズム』

一九〇四年以來、私は社會民主主義の二分派の何れからも離れて立つてゐた。私は一九〇五年——一九〇七年の革命を通じては、ボリシエヴィキと手に手を携へて進んだ。反動の時期には、私はメンシウヴィキに反對して、國際マルクシスト諸刊行物の中で、革命的方法を防衛した。だが私は、メンシウヴィキはもつと左翼へ移動すると期待し、党内で合同を實現しようとする様々な企てを試みたのであつた。私がメンシウヴィキに全然望みがないことを決定的に確信したのは、やうやく大戦が勃發してからであつた。一九一七年三月の初頭、ニュー・ヨークで私は、ロシア革命の階級勢力關係及び諸展望を取扱つた一聯の論文を書いた。恰もその時、レーニンは、ゼネバにあつて、彼の『遠方からの手紙』をペトログラードへ送つてゐた。而して我々二人は、世界の異つた部分で論文を書いてゐたのであり、大洋によつて隔てられてゐたのであつたが、それにも拘らず同一の分析と同一の展望を與へたのであつた。農民に對する態度、ブルジョアジー、臨時政府、戦争、及び世界革命に對する態度のやうな、主要な問題の凡てにおいて、我々の見解は完全に同一であつた。この場合正に、『トロツキイズム』とレーニイズムとの間の關係の試験が、歴史の當の試金石の上で爲されたのだ。しかもそれが

一つの化學的に純粹な實驗の行はれ得る條件の下で遂行されたのだ。その時、私はレーニンの立場については何等知るところがなく、私は私自身の前提と、私自身の革命的經驗を基礎として、論議してゐた。そして私はレーニンと同一の展望を抽出し、レーニンと同一の戰略の方向を示唆したのだ。

しかしその時、問題は凡てのものに全く明白で、且つその解決も一般に承認されてゐたか？ 否、一九一七年四月——即ちレーニンが始めて、ペトログラードの舞臺にその姿を現した時——より以前の時期のレーニンの立場は、全く彼自身の個人的もので、他の何人もそれを分け持つてはゐなかつたのだ。ロシアに在つた黨指導者中の何人も、プロレタリアートの獨裁——社會革命——を自分の政策の直接の目的としようなどいふ意嚮は、全然抱いてゐなかつた。レーニンの到着するすぐ前に開會され、その參集者中に約三十名のボリシエヴィキを包含してゐた黨協議會は、彼等の中の何人も民主主義以上のことは何等想像してもゐなかつたことを示してゐた。その協議會の速記録が今日猶祕密に附されてゐるのは決して不思議ではない！ スターリンはグチコフ及びミリューコフの臨時政府の支持、ボリシエヴィキとメンシユヴィキとの合同に賛成してゐた。それと同一の立場、若くはそれよりもつと日和見主義的の立場すらが、リューコフ、カメネフ、モロトフ、トムスキー、カリニン、及び今日の指導者及び半指導者の残りの凡ての人々によつて、執られてゐたのだ。二月革命中、ヤロスラウスキー、オルゾオニキイヅ、ウクライナ執行委員會議長ペトロウスキー及びその他は、ヤク

ツクでメンシユヴィキと一緒に『社會民主主義』と題する新聞紙を發行してゐて、その中で、彼等は極めて、俗流的な地方的な種類の日和見主義を吐露してゐた。ヤロスラウスキー編輯のヤクーツク『社會民主主義』中のそれらの論文が、もし今日新めて印刷に附されたならば、恐らく政治的思想家としての彼を殺すであらう——もし彼にとつてさういふ死が可能とすればだが。さういつたのが『レーニズム』の現在の防衛者達なのだ。

勿論私は、彼等がその生活のさまざまな時期に、レーニンの言葉を繰返し、レーニンの身振を眞似したのをよく知つてゐる。しかし一九一七年の初頭には、彼等は彼等自身の考へでやらなければならなかつたのだ。政治的情勢は困難であつた。彼等がレーニンの學校で學んだこと、レーニン無しで爲し得ることを示す機會は、正にこの時だつたのだ。彼等のうち一人でも、ゼネバのレーニンと、ニューヨークの私によつて、同一の結論に達した位置に、獨りで達した者があつたら、その名を言つて見よ。彼等は唯の一人の名もあげることが出来ない。レーニンが到着するまでスターリンとカメネフによつて編輯されてゐたペトログラードの『プラウダ』は、狭小な理解と、盲目と、日和見主義の文獻として、長く残るであらう。だがしかし、黨員大衆は、全體としての勞働階級と同様に、權力のための戰鬪の方へ、自然發生的に動きつゝあつたのだ。

反動の時期には、永久革命の展望に確固として立つてゐるためには、理論的予見が必要であつた。



思ふに、一九一七年三月に権力にたいする闘争のスコーガンを掲げるには、政治的感覚さへあれば足りることで、それ以上のものは必要でなかつた。ところが現在の指導者中の唯の一人も、さういふ予見も示さなければ、さういふ官覺も示さなかつたのだ。彼等の中の何人も、一九一七年三月には、左翼小ブルジョア民主主義の見地以上には出なかつた。彼等の中の何人も歴史の試験に堪へたものはなかつたのだ。

私はレーニンより一箇月あとにペトログラードに着いた——そのおくれた一箇月は、正確に私がロイド・ジョーヂによつてカナダに抑留されてゐた間なのだ。その時までには党内の事情は本質的に變化してゐた。レーニンは大衆のつまらぬ指導者達に反對して、大衆そのものに訴へた。彼は『古いポリシエヴィキ』に對して組織的闘争を開始したが、當時彼は『古いポリシエヴィキは、新しい、生き生きした現實の眞の性質を研究することをしないで、生つ嚼りの公式を繰返すことによつて、我黨の歴史のうちに一度ならず悲しむ可き役割を演じた。』と書いた。カメネフとリュコフとはレーニンに抵抗しようと努めた。スターリンは黙々として隅つこに引込んだ。その時期に書かれた彼の論文のうちで、スターリンが實際彼のこれまでの政策を評價し、レーニンの立場へ努力して進んで行かうとする何等かの企てを爲したといふことを示すものはたゞの一つもないのだ。彼はたゞ沈黙を保つた。と言ふのは、彼は革命の最初の一箇月の間の彼の不幸な指導によつて、あまりにも惱まされてゐたから

だ。彼は後方へ引込む方法を選んだ。彼は、公の舞臺に現れてレーニンの見解を防禦することは決してせず、單に後方に立つて、待つてゐた。蜂起のために理論的、政治的に準備してゐた最も責任ある數箇月の間つと、スターリンは、政治的意味では、單に存在しなかつたのだ。

私が到着した時に、國內には多くの社會民主主義團體があり、ポリシエヴィキとメンシユヴィキの雙方もそれに含まれてゐた。これは、スターリン竝にカメネフその他が革命の最初の段階においてのみでなく、戰爭中に執つた立場からの自然の結果であつた——尤も、戰爭中のスターリンの建前は何人にも知られてゐないことは承認しなければならない、この重要な問題にたいして、彼は會つて一行でも書いたことはなかつたのだ。今日、全世界に互つてコンミニュニスト・インターナショナルの教科書——スカンデナヴィアの共產黨青年及びオーストリアのピオニールの間——は、トロツキイは一九一二年にポリシエヴィキとメンシユヴィキとの合同を齎らさうと企てた、と盛んに説き立てゝゐる。しかし彼等は、一九一七年三月にスターリンがツエレリー黨との合同に賛成してゐたといふ事實、レーニンが黨をその沼地——黨の一時的な指導者達即ち今日の亞流共がその中へ黨を驅りやつたのだ——から引摺り出すことの出來たのは漸く一九一七年の中期であつたといふ事實に就ては、會つて一度も述べてはゐない。トロツキイズムの異端が、革命の意義と動向を革命の日以前に理解するばかりでなく、同じくその日の後にそれを豫見するに足る大膽さをもつてゐたのに對照して、彼等の何人も

その端初にそれを理解しなかつたといふ事實は、今日一つの特別に深奥な辨證的現象となつてゐる。

私がペトログラードに着いて、カメネフに向つて、黨の新行程を決定したレーニンの有名な『四月テーゼ』と私の見解との間には何等相違がない、と語つた時に、カメネフはたゞ『私はさうでないとは言はない。』と言つた切りであつた。正式に黨に参加する前に、私は最も重要なボリシエヴィキ文書の起草に参加した。亞流共による革命の衰微の時期に何千回となく、カシヤン派やテールマン派やその他十月革命の居候共によつて私に求められたやうに、『トロツキイズム』の拋棄を私に求めるなどと云ふことは、當時會つて何人の頭にも入らなかつた。當時トロツキイズムとレーニニズムの對置の聞かれたのは、ただ黨の指導者仲間のうちだけで、そこでは指導者達は、四月の月の間レーニンをトロツキイズムだといふ廉で非難してゐたのだ。カメネフはこれを公然とやり、非常に執拗にやつた。他の人々は舞臺の後で、一層用心深くそれをやつた。多くの『古いボリシエヴィキ』は、私がロシアへ着いた後で私に言つた。『いま君の街がお祭りだよ。』そこで私は、レーニンは私の見解に移つて來たのでなく、彼自身の見解を發展させたのであり、情勢の推移は、代數の代りに算術をおくことによつて、我々の見解が本質的に同一であることを啓示したのだと、抗議しなければならなかつた。而してこれが當時實際に起つたことなのだ。

我々が始めて會つたその當時、及び七月の日の後には猶更、レーニンは靜かな、『散文的』な單純性

を見せた表面の下に、恐しい内部的の集中力を人に感じさせた。當時、ケレンスキーに體現を見出した運動は、全能に見えてゐた。ボリシエヴィズムは一つの『つまらない』小集團以上の何ものでもないやうに見え、また公然と、さういふものとして取扱はれてゐた。黨そのものも將來その持つ可き勢力を理解してゐなかつた。だがレーニンは、黨を指導して、斷然それをその最大の仕事の方へ導いてゐた。私は私自身をしつかりと仕事に密着させ、彼を助けた。

十月革命の二箇月前、私は書いた。『我々にとつては、インターナショナルイズムは、都合のいゝ機會さへあればそれを裏切るためにのみ存在してゐる一つの抽象的觀念ではないのであつて、一つの眞に指導的な、全く實踐的な原理だ。ヨーロッパの革命なしには、我々には、一つの永續的な、決定的な成功は認められないのだ。』その時、私はまだツエレリイ及びチエルノフの名と併置して、『一國における社會主義』の哲學者スターリンの名を置くことが出来なかつた。私は次の言葉で私の論文を結んだ。『永久革命對永久殺戮、人間の未來の運命は、この闘争にかゝつてゐるのだ。』この論文は九月七日の黨の中央機關紙に掲載され、その後一冊のパンフレットとして發刊された。私の現在の非難者等は何故に、私の永久革命の異端的スローガンについて、その時沈黙してゐたか？ 彼等はいつた何處にあつたか？ 或る者は、スターリンのやうに、用心深く待つてゐて、彼等のまはりを窺つてゐた。他の者は、デノヴィエフのやうに、テーブルの下に身を隠してゐた。しかしもつと重要な問題

は、レーニンが私の異端的宣傳をどうして黙つて堪へてゐることが出来たか？ だ。理論上の諸問題では、彼は無關心とか放縱とか言つたものを認めなかつた。なのにどうして彼が、黨の中央機關紙で『トロツキイズム』の説教を許すやうなことをしたか？

一九一七年十一月一日、ペトログラード委員會の會合（この歴史的な集會——あらゆる意味で歴史的な——の速記録は、今日まだ祕密に附されてゐる。）の席上で、レーニンは言つた。トロツキイがメンシユヴィキとの合同の不可能を確信するやうになつてから以來と言ふものは、『彼より優れたボリシエヴィキは無い。』と。而してこの言葉の中に、彼は、我々を隔てゝゐたものが永久革命の理論でなくて、メンシユヴィイズムにたいする態度上の、非常に重要ではあるが、より狭い問題であることを極めてはつきりと證明した——これが始めてではないが——のだ。

革命の二年後、レーニンは過去を顧みて、『權力を掌握し、ソヴィエツト共和國を創設した時に、ボリシエヴィイズムは、社會主義思想の諸思潮のうちで、自身に最も近い最良の諸要素の全部を、自分の方へ引寄せた』と書いた。彼が『ボリシエヴィイズムに最も接近した諸思潮』の最良の代表者について、かくも周到に語つた時、その心の最前面に、現在『歴史的トロツキイズム』と呼ばれてゐるものを持つてゐたと言ふことに關して、疑ひの影だに投ずる餘地があり得るであらうか？ 私が代表してゐた思潮より以上に、それに接近してゐた何ものがあつたか？ 且つ私以外に誰をレーニンはその心

に描くことが出来たか？ 恐らくマルセル・カシヤンか？ それともテールマンか？ 全體としての黨の過去の發展を通觀したときに、レーニンにとつては、トロツキイズムは決して社會主義思想の敵對的思潮でなく、反對に、ボリシエヴィイズムに最も接近した思潮であつたのだ。

黨の思想發展の實際の行程は、我々が見得るやうに、亞流共が、レーニンの死と反動の潮流を利用して、でつち上げた虚偽の戲畫とは、全く似てもつかないものであつたのだ。

第四章 權力を握る

一國の生活において、及び個人の生活において、それは異常な時期であつた。社會的情熱において、竝に個人的勢力において、緊張は最頂點に達した。大衆は一つの時代を創りつゝあり、その指導者達は、歴史の足取りと自分の足取りとが融け合つて行くのを感じた。一つの全き歴史的時期の運命が、その當時に爲された諸決定、與へられた諸命令の上に懸つてゐた。それらの決定や命令が適當に評量され考慮されたものとは、私は敢て言ふことは出来ない。これらは殆どその瞬間に即席でつくられたのだ。しかしそれだからと言つて、それらは決して悪いものではなかつた。情勢の壓力は恐しい力をもつて迫り、爲さる可き仕事は我々のまへに極めて明白だつたので、最も重要な決定が自明のこととして自然的にやつて來て、同一の精神で受取られたのだ。途は豫め定られてあつた。必要なことは仕事を明示するだけであつたのだ。議論の必要は全然無く、訴へ掛けも殆ど必要でなかつた。躊躇もなく、または疑惑もなく、大衆は、情勢の性質が彼等に示唆したものを掴み上げた。緊張した情勢の下で、大衆の『指導者』達は、民衆の要求と歴史の要求に答へるものを表式化するより以上のことは何等しなかつたのだ。

マルキシズムは、自身をもつて無意識的な歴史的過程の意識的な表現だと思惟してゐる。しかし心理的な意味でなく、歴史に哲學的な意味におけるその『無意識的な』過程は、その最頂點即ち大衆が、眞の原始的な壓力によつて、社會的習慣を突破し、歴史的発展の最深奥の要求にたいして勝利的の表現を與へる時においてのみ、その意識的表現と合致する。而してさういふ瞬間には、時代の最高の理論的意識と、理論からは最も縁の遠い抑壓された大衆の直接行動とが、融合するのだ。無意識的のものと意識的のものととの創造的結合は、通常人が呼んで『靈感』となすものだ。革命は歴史の靈感を與へられた氣狂なのだ。

眞の著述家は誰でも、彼自身より強いなにか彼の手を導きつゝある創造的の瞬間を知つてをり、眞の雄辯家は誰でも、彼の日常的存在の自我よりも強い或るものが彼を通じて語る瞬間を経験してゐる。これが、『靈感』だ。それは或るものゝ一切の力の最高の創造的努力から、生れ出て來るのだ。無意識的なものはその深い泉源から生起して、意識的な心をその意志の下に従へ、それと融合して、或るより大きな綜合へと轉化するのだ。

極度の精神的勇敢は同様に時々には、大衆の運動と結びつけられた一切の個人的活動を呑み盡すものだ。このことは、十月革命の指導者において當つてゐた。有機體の隠れた力、その最も深く根を下した本能、動物的祖先から遺傳された嗅覺力——これらの一切が起き上り、日常の心理的慣習を突破

し、革命に奉仕する高い歴史的、哲學的抽象と力を合せるのだ。個人と大衆に動きかけるこれら二つの過程は、意識的なものと無意識なものとの同盟、本能——意志の源泉——と思想上の高い理論との同盟をその基礎としてゐた。

外面的に見れば、それは非常に堂々たるものには見えなかつた。人々は、疲れ切つて、餓ゑて、體がよごれて、眼に血がういて、髯は生え放題であつた。而して後になつては、彼等の何人も、それらの最も重大な數日間や各時間のことについて、多くを想ひ出すことは出来なかつた。

こゝに、私の妻がずつと後になつて書きとめたノートからの抜萃がある。

『十月革命のための準備の最後の數日間は、私達は冬宮街に滞留してゐた。レウ・ダヴィドヴィツチは、まる數日間スモルニー館で生活してゐた。私は引きつゞき、ポリシエヴィキが指導してゐた木材労働組合で仕事をしてゐたが、雰囲気は張りつめてゐた。労働時間は全部、蜂起についての話で費されてゐた。組合長は、『レーニン・トロツキイの見解』（當時はさう呼ばれてゐたから）を支持し、我は一緒になつてアジテーションを行つた。蜂起の問題は、いたるところで、街頭でも、食事に集まつた時でも、スモルニーでの臨時の集會でも、論議された。私達は、殆ど食はず、殆ど眠らず、そして一日大抵は二十四時間仕事をしつゞけた。私達は大抵の時を子供達から離れてをり、十月の日の間私は子供達のことを心配してゐた。リョーヴァとセリョーザとは、もう一人の、彼等が『同情者』と呼んでゐた少年を除いては、彼等の學校で唯一の『ポリシエヴィキ』であつた。彼等と對抗して、學校には支配的民主主義黨——立憲民主黨と社會革命黨——の末流が固いグループをつくつてゐた。そしていつもそんな場合に起るやうに、批評に次いで實際上の闘争が行はれた。一度ならず、校長は、「民主主義者」が束になつて彼等にのしかゝつて打擲してゐる下から、彼等を救ひ出さねばならなかつた。子供達は、つまり、その親達の眞似をしてゐるに過ぎなかつたのだ。その校長は立憲民主黨派で、さういふ争闘の後には定つて、私の子供達を罰して、「帽子をもつて、サツサと家へ歸れ。」と命じた。革命後には子供達はその學校に残つてゐることはとても出来なかつたので、ある「庶民學校」へ轉校した。そこでは凡てのものが、前より遙かに單純で、荒削りであつたが、前よりも自由に呼吸することが出来た。

『トロツキイと私とは、家にゐることは稀れであつた。子供達はいつも、學校から歸つて來て、私達の留守なのを知ると、彼等も家の壁に閉されてゐる必要はないと思つた。當時の示威運動、衝突、射撃の數日中、私達は子供達のことを心配してゐた。と言ふのは彼等もその時ひどく革命的な氣分になつてゐたからだ——私達がちよつと一緒になると子供達は大歡びでよく私達に言ひ言ひしたものだ。『今日ね、僕達、電車の中でコサツク兵と乗合したらね、そのコサツクはお父さんの『同胞コサツクに與ふ！』を讀んでゐたよ。』

『「本當？」』

『「本當、讀んでゐてね、仲間の方へ廻してゐたよ。素敵だな。」』

『「素敵？」』

『「素敵だ。」』

『トロツキイの知合ひの技師ケーは、年齢のさまざまな澤山な子供のある大家族を擁し、保母とかさう言つたものをつかつてゐたが、彼の家庭へ私達の子供を引取つてやらう、さうすれば誰かゞ世話するだらう、と申し出てくれた。私は、渡りに舟の思ひで、この申し出でに躍り上つて悦んだ。私は、トロツキイのためにいろ／＼な用向を果すために、日に約五回はスモルニー館を訪ねなければならなかつた。我々はいつても、夜更けてから冬宮街へ歸り、翌朝はまた分れて、トロツキイはスモルニー館へ、私は組合へ行つた。情勢の最高潮に達した時には、私達はスモルニー館を殆ど離れなかつた。ぶつ通しに幾日間も、眠りにすらも、トロツキイは冬宮街へ歸つて來ないことがよくあつた。私もまた屢々、スモルニーにとまり込んだ。私達は、着物をぬがないで、安樂椅子や長椅子の上で眠つた。氣温は確かに温かではなく、時は秋で、日中は乾燥して、曇りがちで、切るやうな冷い烈風が吹いてゐた。主要街はいづれも静まり返つて、荒涼としてゐた。そしてこの静寂のなかで、張り切つた危険が感ぜられた。スモルニー館は泡立ち、たぎつてゐた。巨大なホールは、どえらいシャンゼリヤからの

數千の灯で輝き渡り、晝となく夜となく、そこには人々が満ちあふれてゐた。製造場や工場での生活は緊張してゐたが、諸街路はひつそりと静まりかへつてゐた。その静けさと言ふものは、恰も市が恐怖して、肩の中へ首をちぢ込めたかのやうであつた。

47 『峰起後の二日目か三日目に、私が突然スモルニー館の一室へ入つて行つたら、そこにウラヂミル・イリイツチ（レーニン）とトロツキイとを見出したのを記憶してゐる。彼等のほかに、私の記憶に間違ひがなければ、ヂエルヂンスキー、ヨッフエ及び他の群衆がそこにゐた。その人達の顔色は、睡眠不足から、灰緑色になつてをり、眼には血が浮き、カラーはくたく／＼になり、その部屋には煙草の煙が濛々としてゐた。……誰かゞテーブルに向つて掛け、そのまはりには人々が押し寄せて、命令を待つてゐた。レーニンとトロツキイもまた、さうして待つてゐる群衆の眞中にゐた。その場の光景を見ると、恰も眠つてゐる人によつて命令が下されてゐるかのやうに、私には思はれた。彼等が話したり動いたりする仕方には、夢遊病者のやうな氣味があつたのだ。その瞬間に私は、一切が私の夢ではないかと感じ、もし「彼等」がいゝ眠りを撮り、さつぱりしたカラーに取替へなければ、革命は失はれてしまふ危険にある、その夢はこの人達の穢いカラーに密着してゐるのだ、と感じた。翌日、レーニンの妹のマルヤ・イリイツチに會つた時、ウラヂミル・イリイツチには綺麗なカラーが入用ですよ、と急いで言つたことを記憶してゐる。「えゝ、さうですよ、全く」と、彼女は笑ひながら答へた。然

しこの時までには、さつぱりしたカラーに就ての事柄は、私に對する夢魔的の意味を失つてゐた。』

権力は掌握されてゐる、尠くともペトログラードで。それでもまだレーニンはカラーを取替へる暇がない。しかし、彼の顔付はいかにも疲勞して見えるが、眼は大きく見開いて、はつきり醒めてゐる。彼は、不器用な羞恥——それは彼の内心での親しさを示すものだ——をうかべて、もの靜かに私を見る。『ねえ君』と彼はためらひながら言ふ。『迫害と地下の生活から、こんな突然、権力を握るなどといふのは……』そこで彼は、適當な言葉を求めて一寸沈黙する。『Es schwindelt.』(眩暈がしうだ)と彼は、急にドイツ語に變へて、頭のまはりに手をくるく／＼させて、言葉を結ぶ。我々は顔を見合して、かすかに笑ふ。この凡てはほんの一分間か二分間のことで、それからすぐあつさり、『次の仕事に向ふ』のだ。

政府を樹立しなければならぬ。我々の間には、中央執行委員會のメンバーは僅かしかゐない。その部屋の隅で、取急いで委員會を開く。

『政府を何と呼んだらいいだらう?』とレーニンは、考へながら、聲高に訊ねる。『内閣と言ふのでなくそれ以外にね——内閣と言ふのは、いかにも下劣な、月竝な言葉だ。』

『委員會と呼んだがいいだらう。』と私は示唆する。『だが、いま現に、あんまり澤山の委員會があ

るね。『最高委員會』はどうかね? いや／＼「最高」は何としてもいゝ氣持がしない。『人民委員會』はどうかね?』

『人民委員會?』さうだ、それがいゝと僕は思ふ。』とレーニンが同意する。『それで全體としての政府は?』

『ソヴィエツトさ、勿論……人民委員ソヴィエツト、どうだね?』

『人民委員ソヴィエツト?』とレーニンはそれを取上げて、『そりや素晴らしい。恐しく革命の匂ひがする!』

レーニンは、革命の美學の方へ、又はその『浪漫的な性質』の方へは、性來あまり心に向けてゐなかつた。しかし更にもつともつと深く、彼は全體としての革命を感じて居り、更にもつともつと正確に、革命の『匂ひ』を嗅ぎわけてゐた。

その始めの頃にウラヂミル・イリイチは全く突然に、私に訊ねた。『もし白衛軍が君と僕を殺したら、どうだね?』スヴェルドロフとブハーリンでやつて行けるだらうか?』

『おそらく奴等は我々を殺さうとはしないだらう。』と私は、笑ひながら應酬した。

『奴等が何をやるか、分つたものか。』とこんどはレーニンが、笑ひながら言つた。

一九二四年に、レーニンについての私の回想のなかで、私は始めてこの出来事を記述した。後で聞いたことだが、當時『三幅對』^{トリツキ}だった人々——スターリン、ジノヴィエフ及びカメネフ——は、公然とこれに反対はしなかつたが、これに恐しく氣を悪くしたとのことだ。しかしレーニンがスヴェルドロフとブハーリンの名しか言はなかつた事實は、依然としてそのままだ。彼は他の人達のことは考へてゐなかつたのだ。

レーニンは、その間に短い合間があつただけで、二回外國に亡命し、十五年間そちらで暮してゐたので、ロシアに生活してゐた黨の主要人物を、彼等との文通を通じてか、又は外國での彼等との若干の集會からしか、知つてゐなかつた。彼が彼等を極く間近かに觀、實際仕事をしてゐる彼等を見ることの出来たのは、革命後始めてであつた。したがつてその結果、彼は、間接の報告に基いた舊い見解を修正するか、又は全く新しい見解を樹てざるを得なかつた。レーニンは、大きな道徳的熱情の持主だつたので、人々にたいする無關心と言つたやうなことは、想像することも出来なかつた。思想家、觀察者、戰略家たるレーニンは、人々にたいする熱心の激情にとらへられた。クルプスカヤも彼女の回想録のなかに、彼のこの舉動のことを述べてゐる。レーニンは、或る人に臨む場合、その人について平均的の評價を下して、一目でその人を測定することは、決してやらなかつた。彼の眼は檢微鏡のやうだつた。或る特別の瞬間に視覺の領域に入つて來た他人の舉動をいつも數倍に廓大した。彼はと

きどき、言葉の全き意味で、或る人と戀に落ちた。さういふ場合、私はよく彼をからかつたものだ。『知つてる、知つてる。君はいま新しいロマンスを持つてゐるね。』レーニンは彼のこの特性を知つてゐて、よく笑つてそれに答へ、少しまごついたが、少しも怒つたりはしなかつた。

私にたいするレーニンの態度は、一九一七年中に、幾度も變化した。彼が始めて私に逢つた時は、多少隔てをおいて、用心してゐた。七月時代が、全く突然に、我々を極めて接近せしめた。ポリシエヴィキ指導者の大多數に反對して、私が憲法議會のボイコツトを提議した時、レーニンは『ブレーヴオ、同志トロツキイ！』と彼の隠れ家から書いてよこした。その後、或る偶發的の全く誤つた諸指示から判斷して、彼は、私が武装蜂起の仕事について餘りに手ぬるいと結論した。この疑惑は、十月中旬の彼の書翰の多くのものに反映されてゐた。それと對照して見て、革命の日に、ほの暗い、ガランとした部屋に我々が休んでゐた時、彼の私に示した態度は、その温情と、友誼において、更に一層誤りないものとなつたのだ。翌日、黨の中央執行委員會の會合で、私を人民委員ソヴィエツトの議長に選舉するやうにと、彼は提議した。私は飛上つて、反對した——その提議は私には全く豫期しないことで、妥當を缺いたことに思はれたのだ。『何故いけない？』とレーニンは言ひ張つた。『權力を獲取したペトログラード・ソヴィエツトの首腦にあつたのは、君だ。』私はそれに抗辯しないで、彼の提議を拒否する動議を出した。動議は可決された。十一月一日、ペトログラード黨委員會の集會で、興

奮した討議の行はれてゐる時にレーニンが叫んだ。『トロツキイより優れたポリシエヴィキはない。』彼の口から出て來たので、その言葉は非常に大きな意味をもつた。この言葉の發せられたその會合の速記録が、今日なほ一般から隠されてゐるのは、決して不思議なことではないのだ。

權力の征服は、政府での私の仕事の問題を齎して來た。不思議なことだが、私は曾つてそれを考へたことすらなかつたのだ。一九〇五年の経験があつたにも拘らず、私が私の未來の問題と權力の問題とを結びつけた機會は曾つてなかつたのだ。青年時代から、もしくはもつと正確に言へば、少年時代から私は、著述家にならうと夢みてゐた。その後私は、一切の他のことと同様に、私の文學上の仕事を革命に従屬させた。數限りも知らず、私は革命政府のプログラムについて書き、語つたが、征服後における私の個人的な仕事の問題は、曾つて私の心に入らなかつた。そしてそれが、不意に私を捉へたのだ。

權力を獲取して後、私は、政府の外部にとゞまつてゐようと試み、新聞を指導しようと申し出た。勝利の後の神經的反動が、これに何等か作用してゐたことは確かにあり得ることだつた。それに先立つ數箇月は、革命に對する準備的な仕事と餘りにも密接に結びつけられてゐたからだ。私の全存在の纖維といふ纖維は、極限にまで張りつめてゐた。當時、ルナチャルスキーはどこかで新聞に書いてゐた。トロツキイは一つの電池のやうにそこらを歩いてゐた。彼と接觸するたびに、そこから電流が放

射されたと。十月の二十五日は、弛緩を齎した。私は、困難な、危険な手術を終つたばかりの外科醫のやうに感じた——私は手を洗ひ清め、手術衣を外し、休息しなければならぬ。

レーニンは私とは異つた立場にあつた。彼は、三箇月半實際的な指導から切離されてそこで暮した後、彼の隠れ家から丁度到着したばかりであつた。一つのことか他の事と一致したので、この事情がしばらくの間舞臺の後へ引退し度いといふ私の希望に加はつたのだ。が、レーニンはそれに耳をかさなかつた。彼は、現在の瞬間の最も重要な仕事は、反動革命を撃退するにあると言つて、私に内務人民委員の職を引受けよと主張した。私はそれに反對し、他の諸々の反對理由のうち、就中民族性の問題を持出した。私の祖先がユデヤ人であると言ふやうな、敵にとつて附加的な武器を、我々の敵の手に渡す要があつたか？

レーニンは殆ど腹を立てんばかりであつた。『我々は、一つの大きな國際的革命に従事してゐるのだ。そんなつまらぬことが何故重大だ？』

好感的な爭論が始まつた。『それあ疑ひもなく、革命は大きい。だが、まだ馬鹿者がどつさり残つてゐる。』

『しかしそれなら我々は馬鹿者と歩調を合せるのか？』

『さうぢやない。しかし或る場合には、馬鹿に若干の斟酌をしなければならぬ。何故、手始めに餘計

な混雑をつくるのか？』

私は既に、民族性の問題は、ロシアの生活にとつては非常に重大なものだが、私にとつては何等個人的意味をもつてゐないといふことを觀察する機會があつた。青年時代の早期にすら、民族的偏執と民族的偏見とは、或る場合に私の内部に輕蔑と道德的嫌惡以外の何ものも呼起さず、その限りで私の理性を混迷させたに過ぎなかつた。私のマルクシスト的教育は、この感情を深め、私の態度を變化して、積極的インターナショナリズムの態度を持たしめた。非常に多くの國々での私の生活、非常に多くの異つた國語、政治制度及び文化との私の親炙は、そのインターナショナリズムを私の當の肉と血の中へ溶し込むことに役立つたに過ぎなかつたのだ。一九一七年及びその後、私が時々或る任命にたいする反對理由として、私がユダヤ人系統であることを指摘したとすれば、それは單に政治的考慮からに過ぎなかつたのだ。

スヴェルドロフ及び中央委員會の他の委員達は、私の方へ加擔した。レーニンは少數であつた。彼は肩をゆすぶり、溜息をつき、不満さうに頭を振り、結局、我々は政府のどんな部門に屬してゐようと、いづれにしても一致して反動革命と戦はなければならぬといふ考へで、彼自身をなだめた。しかし私が新聞へ行くといふことには、スヴェルドロフが斷乎として反對し、ブハーリンがその適任者だと言つた。『レウ・ダヴィドウィツチはヨーロツパに對抗して置かる可きだ。彼に外務を委任したが

よす。』

『いま我々にどんな外務があるかね？』とレーニンが訊ねた。しかし澁々、レーニンも結局それに同意し、私も、やはり澁々ながら、承諾した。かくて、スヴェルドロフの提議で、私は四分の一年間、ソヴィエツト外交の首腦者となつたのだ。

外務人民委員たることは、實際上、政府部門の仕事から自由になることを意味してゐた。私に援助を申し出でた同志達に對しては、私は殆ど一樣に、彼のエネルギーにとつてもつと満足すべき分野を求めらるやうにと提議した。彼等の一人はその後、彼の回想録のなかで、ソヴィエツト政府が樹立されてすぐ後で、彼が私と交した對話についての公平な興味津々たる報告を與へた。『我々にどういふ外交的な仕事をするのが出来るのですか？』彼の報告によると、彼は私にさう言つた。『私は世界の人民に向つて若干の革命的宣言を發するつもりだ。それから店を閉ぢてしまふ。』私のその質問者は私の外交的意識の缺乏によつて、正直に傷けられた。私は勿論意識して、私の見解を誇張したので、實は、その時の重力の中心は外交にはないといふ事を強調したかつたのだ。

主要な仕事は、十月革命を更に發展させ、それを全國に擴大し、ケレンスキーやクラスノフ大將によるペトログラードの逆襲を打ちのめし、反動革命と戦ふことであつた。我々はこれらの問題を諸官省の外部で解決しつゝあつた。そしてレーニンと私との共力は、常に極めて親密で繼續的であつた。

スモルニ館のレーニンの部屋は、私の部屋から言へば、その建物の反対の端にあつた。我々の部屋を結びつける、若くは寧ろ隔てゝゐる廊下は非常に長かつたので、レーニンは戯談半分に、自轉車で連絡をつけようと提議したほどであつた。我々は電話で連絡してゐたが、日に何度となく、蟻塚のやうに見えた際限のない廊下を歩いて、協議のためにレーニンの部屋へ行つたものだ。レーニンの秘書として知られてゐた若い水兵は、絶えず我々の間を走つて行き來して、私にレーニンのノートを持つて來た。そのノートは二三の正確に表現された文章から成つてゐて、一番重要な言葉の下には、二重三重に下線を引き、當の最後の質問はむき出しにそこに記されてゐた。時々そのノートには、即刻批評を求める布告の草案が添へられてあつた。人民委員ソヴィエットの達成は、その時期の非常に多くの文獻を残してゐるが、その或るものはレーニンが書き、その或るものは私が書いたもので——レーニンの原案に私が修正を加へ、又は私の提議にレーニンが補足したのであつた。

第一の時期——大ざつばに言へば、一九一八年八月まで——中、私は人民委員ソヴィエットの一般的な仕事に活動してゐた。スモルニ館にゐた時期には、レーニンは經濟的、政治的、行政的、文化的生活の一切の問題に布告によつて答へようと、熱心に待ちかまへてゐた。この仕事では彼は、官僚的な方法をとらうとする何等かの熱望によつて導かれてゐたのではなく、寧ろ、黨の綱領を権力の言葉で展開しようとの欲求によつて導かれてゐたのであつた。彼は、革命的布告といふものは部分的にし

か遂行されないものだといふことを知つてゐた。それらの手段の完全な實施と管理を確立するがためには、適當に機能する機關と、竝に時間と經驗とが必要であつたのだ。ところでどれだけの時間を我が思ひのまゝに持ち得るものか、それは何人にも豫想することは出来なかつた。この最初の時期の間は、諸布告は實際には、行政上の實際の手段といふよりも、むしろプロパガンダであつた。レーニンは、新しい権力とはいつたい何か、それは何を求めてゐるものか、その目的をどうして達成しようとしてゐるものか、それを民衆に語ることに忙しかつた。彼は、偉大な辛抱強さで、問題から問題へと移つて行き、小さな協議會を召集し、専門家に委任して調査を行ひ、彼自身また書物を穿鑿した。そして私は彼を助けた。

レーニンは、彼が當時やつてゐた仕事は持續するものと極めて強く自信してゐた。一箇の大きな革命家として、彼は歴史的傳統の意味を理解してゐた。我々が權力を掌握しつゞけて行けるか、それとも轉覆されるかは、前以つて言ふことは不可能であつた。そんな譯だから、どんなことが起らうと、我々の革命的經驗を出来るだけ萬人の眼に明かにしておくことが、必要であつた。他の人々がやつて來て、我々が輪廓づけ、着手したものを助けとして、更に一步前進するやうなことになるかも知れない。それが最初の時期中の立法的仕事の意味であつた。レーニンが、社會主義及び唯物論の古典を出来るだけ早くロシア語に翻譯して公刊することを頑強に主張したのも、このためであつた。レーニン

は、それがたとひ極く単純なものでもよいから、胸像や記念額のやうな革命的記念物を出來るだけ澤山に、凡ての都市や、もし都合がつけば村落にも設置し度いと熱求してゐた。それと言ふのは、さうして實際に起つたところのことを、民衆の想像にしつかり固着させ、出來るだけ深く記憶に刻み込んでおかうがためだつたのだ。

人民委員ソヴイェット*は最初はよく委員を變更したが、その集會はいつも、無限の即時的立法の光景を示した。あらゆることが端緒から行はれなければならなかつた。もともとこれまでの歴史が何等提示してくれるものを持つてゐなかつたのだから、そこには『先行物』といふものが無かつたのだ。レーニンは、五六時間ぶつ通しで、疲れを見せないでそのソヴイェットを主宰し、人民委員の集會は毎日開かれた。原則として、諸々の事柄は前以つて準備もなく、殆どいつも差迫つた仕事として、審議に提出された。會議の開かれる前に、討議される問題の實質が、ソヴイェットの委員にも、議長にも知られてゐない場合がしばしばあつた。それを公に報告するまでに僅か十分位しか許された餘裕がないので、討論はいつも短縮された。それにも拘らず、レーニンはいつも必要な行程を感で知つてゐた。時間をはぶくために、彼はよく彼此の主題に報告を求めた極く短いノートを出席委員に送つたものだ。そのノートは、レーニンの主宰してゐた人民委員ソヴイェットの立法的技術のなかに、大きな、非常に興味のある書翰的要素のあつたことを展示するものでもあらう。だが不幸にして、その大部分は消滅してしまつた、と言ふのは多くの場合それにないする回答が、その用紙の反対の側に書き込まれ、そのノートは、議長によつて直ちに破棄されるのが常だつたからだ。いつも適當な瞬間に、レーニンはつねに緊張した鋭さをもつて、彼の決定を聲明し、その後で討論は止んでしまふか、または實際上の提議に移るのであつた。結局、レーニンの『見解』^{ポイソット}が、いつも定つて、布告の基礎として採用された。

* 人民委員ソヴイェットは、U.S.S.R.の中央執行委員會の執行・指導の機關で、中央執行委員會はソヴイェット大會の開期と開期との間の立法機關として行動するものである。その中央執行委員會は、よく全國中央執行委員會(All-Union Central Executive Committee)と呼ばれるが、これとこの書によく出て來る『中央執行委員會』とを混同してはいけない。この後者はロシア共産黨のそれなのだ。——英譯者

他の諸々の性質の外に、一つの大きな創造的想像力^{クリエイティブ・イマジネーション}が、この仕事を指導する上に必要であつた。さういふ想像力の最も尊い力の一つは、たとひ何人も決してそれを見てゐないにしても、現實ありのままに民衆や、對象や、出來事をありありと心に描き浮べる能力だ。活動の最中に捉へられた切れ切れの小さな閃きをつなぎ合せ、符合、類似の定式化されない法則によつてそれらを補足し、かくしてすべてを生活の經驗と理論の基礎に置いて、人間生活の一定領域を飽まで具體的な現實の姿に再創造すること——これが、特に革命の時期に立法者、行政者、指導者たるものが持つてゐなければならぬ

想像力だ。レーニンの實力は主としてこの現實的想像力であつたのだ。

この熱病的な創造的立法中に、多くの失錯と矛盾のあつたことは殆ど言ふ必要はない。だが、全體として見れば、スモルニー時代即ち革命の最も嵐のやうな、混沌たる時代のレーニンの諸布告は、新世界の宣言として、永久に歴史のうちに保存されるであらう。社會學者、歴史家ばかりでなく、同じく未來の立法家がこの資源から繰返し繰返し材料を引出すであらう。

その間に實踐的問題——特に内亂、食料供給及び運輸の問題——が、層一層と差迫つたものとなつて來た。これらの新しい問題を初めて處理するために、また、問題の起つた當初絶望的な状態にあつた彼此の官省を活動させるために、いろ／＼な臨時特別委員會が設けられた。私は、これらの委員會の多くを主宰しなければならなかつたが、その中には食料供給委員會——初めて政府の仕事に組入れられたチュルパがその一委員であつた——や、運輸委員會や、出版委員會その他があつた。

外務省の仕事は、ブレスト・リトウスクの講和會議のときを除いては、私の時間を割くことは殆どなかつた。だが、その仕事は、私が豫期してゐたよりもいさゝか複雑したものであることが分つた。その仕事に取りかゝつた正に最初の頃にすら、私は豫期だにもせず、エツフェル塔と平和協議を行つてゐる自分を發見したので！ 蜂起の間、我々は餘りに多忙だつたので、外國のラヂオに注意を拂ふことをしなかつた。しかし今は、外務人民委員として私は革命にたいする資本主義世界の反響を

監視しなければならなかつた。どこからも我々のところへ挨拶などが來なかつたことは、言ふも愚かだ。ベルリン政府は、すでにポリシエヴィキを嘲弄しようと待構へてゐたが、ツアルスコエ・セロ・（ラヂオ——譯者）ステーションがケレンスキーの軍隊にたいする我軍の勝利について、私の聲明を放送してゐた時に、そのナウエン・ステーションから電波を交錯させた。ところでベルリンとウキンナ（ドイツ政府とオーストリー・ハンガリー政府のこと——譯者）は、なほ革命にたいする敵意と、有利な平和締結の期待との間を彷徨してゐたが、世界の殘餘の部分——戦争參加國ばかりでなく、同じく中立國も——は、それ／＼の國の言葉で、既に轉覆されて舊ロシアの支配階級の感情を反映してゐた。この合唱のなかにあつて、エツフェル塔は正にその激怒に味方してゐた。當時、それは（エツフェル塔ステーション）明かにロシア民衆の心に直接に訴へかけようと圖つてロシア語ですら放送したので。私はパリのラヂオの報告を読んでゐる時、時としてクレマンソー自身がエツフェル塔の頂上に坐り込んでゐるに相違ないと思つたことがあつた。私は一箇のジャーナリストとしての彼を十分によく知つてゐたので、彼のスタイルは認めなかつたが、彼の精神は認めてゐた。そのラヂオの中での嫌惡は殆どそれ自身の害毒で呼吸づまるほどで、惡意は極限に達してゐた。恰もエツフェル塔のラヂオの蠍サソリが、自分の尻尾で自分の頭を刺してゐるのではないかと思はれることがよくあつた。

我々はツアルスコエ・セロ・ステーションを支配してゐたので、我々に沈黙を強ひる何ものもなか

つた。数日の間、私はクレマンソーの罵詈にたいする返答を口授した。私はフランスの政治史をよく知つてゐるから、その主要な人物劇の特性を——決して實際よりは善く描くのでなしに——描くことが出来た。私に、パナマ事件から始めて、フランスの過去の歴史中の或る忘れられた諸事件を彼等に想起させた。数日間、パリとツアルスコエ・セロ・ステーションとの間に、緊張した決闘が荒れ狂つた。中立的代行者たるエーテルは、雙方の論點を意識的に通達した。そして何が起つたか？ 私でさへさう急に結果が来ようとは豫期してゐなかつたのだ。パリは突然放送の調子を變更し、それから後は、依然として敵意は持つてゐたが、禮儀をもつて自己を表して來たのだ。その後屢々私は、私の外交的活動がエツフェル塔に禮儀を教へることから着手されたといふ事實を想起して、愉快に感ずるのだ。

十一月十八日、アメリカ使節の首班ジユドソン大將が突然スモルニー館に私を訪問した。彼は、まだ正式にアメリカ政府の名において語ることは出来ないが、凡てが『甘く』^{オールド・ライト}行かんことを希望すると私に述べた。ソヴィエツト政府は、聯合國と共力して、戦争終結に向つて努力する意嚮を持つてゐるか？ それに對して私は答へた、來るべき商議の内容は完全に公表されるのだから、聯合國はその商議の進行を見守ることが出来るし、その上でどんな段階でもそれに参加することが出来るだらうと。結論として、この平和愛好の大將は言つた。『もしさういふ時があるものとすれば、今こそ正に、

ソヴィエツト權力に對する抗議と威嚇との時は、終つてしまつた。』しかし我々が知つてゐるやうに、たとひそれが大將の位階をもつてゐようと、一羽の燕は夏をつくり出しはしないのだ。

フランス大使ノーレンと私との、最初で最後の會合は、十二月の初めに行はれた。フランス共和国はツアー政府との友好を保つために、公然の王政派で、その名前よりも一層ビザンチン人風のパレオローギユをロシアに送つてゐたが、その人の代りに曩に二月革命と友交的關係を結ぶために、急進派の前代議士のノーレンをロシアへ送つて來てゐたのだ。他の誰かゞ選任されないで、何故ノーレンが選ばれたのか、私は知らない。しかし彼は、人類の運命の支配者についての私の見解を高めはしなかつた。彼の發議で取定められた協議は、何等の結果もたらさなかつた。それからしばらく動搖したあとで、クレマンソーは結局、有刺鐵條網の支配へと移つて行つたのだ。

私は、フランス使節の首腦ニイツセル大將とは、スモルニー館の私のオフィースで友誼的な會見をしなかつた。彼はこれまで背後の活動で、彼の侵略をつゞけてゐたのだ。ケレンスキーの下で、彼は他に命令することに慣れてゐたので、この悪い慣習を念頭から拂拭することを欲しなかつた。會見するとすぐ私は彼に、スモルニー館を出て行つて欲しいと求めざるを得なかつた。やがて、フランス使節との關係が更に一層困難なものとなつた。その使節に附屬する通報局は、革命に對する極度に嫌惡すべきあてこすりの製造工場となつた。敵意のある新聞紙の全部に、『ストツクホルム』發電の報道が

日々現れ始めたが、それらの報道はお互ひに空想的な捏造と、悪意と、單なる愚鈍とを競つてゐた。『ストックホルム』電報の出所はどこかと質問されると、それらの新聞の編輯者はフランスの軍事使節だと言つた。私はニイツセル大將に向つて正式の説明を求めた。それにたいして十二月二十二日附で、眞に素晴らしい文書で答へて來た。

『さまざまの意見をもつた無数の新聞記者が』と大將は書いた。『發表を求めに、軍事使節を訪問する。私は、西部戦線での軍事的出來事に關し、サロニヤ、アジヤに關し、フランスの情勢に關して、彼等に發表を與へる權能を附與されてゐる。これらの會見インタビューの一つ(?)で、若い士官の一人(?)が、市内(?)に流布されてをり、そのもとはストックホルムだとされてゐた風説を傳へた。……』そこで結論で、大將は『將來かゝる手ぬかりを防ぐやうに手段を講ずる。』と曖昧な約束をした。

これは餘りにひどかつた。我々が曩にパリのラヂオ・ステーションへ禮儀の何物なるかを教授したのは、なにもニイツセル大將をして、虚偽を放送する補助塔をモスコウに建設させるためではなかつた。同じ日に、私はニイツセルに書き送つた。

『一、フランス軍事使節の間で「通報局」と呼ばれてゐる宣傳局が、公衆の心に混亂と動搖を擴げる目的で、故意に虚偽の風説を流布する本據として行動したのは事實であるから、この事實に鑑みて、

この事務局は即刻閉鎖すべきこと。

二、虚偽の報道を製造したその「若い士官」に即刻ロシアの領土から撤退せんことを要求する。猶ほ私は貴下に、遅滯することなく、その士官の名前を當方へ通達せんことを求める。

三、ラヂオ電報の受信設備は、使節のもとからこれを撤去すべきこと。

四、内亂地帯にあるフランスの士官は、新聞紙に命令を公表して、即時にこれをペトログラードへ召喚すべきこと。

五、この書翰に關して使節の執つた一切の手段については、私にまですべて報告せんことを要求する。

外務人民委員エル・トロツキイ

その『若い士官』は、匿名を顯され、身代りの羊としてロシアを去つた。ラヂオ受信設備は撤去された。その通報局は閉鎖された。士官達は中央へ召喚された。しかしこれはほんのちよつとした、前線での小競合にすぎなかつたのだ。私が軍事人民委員に移つた後では、それに次いで短かい、あぶなつかしい休戦状態がやつて來た。餘りに直截なニイツセル大將は罷免されて、あてこすりに巧みなラヴァーヌ大將がそれに代つた。だが休戦状態は長くはつどかなかつた。フランス軍事使節は、フランス外交と同様に、間もなくソヴィエツト權力にたいするあらゆる隠謀と武裝的攻撃の中心となつた。

しかしこの事は、プレスト・リトウスクの後、一九一八年の春及び夏のモスコウ時代までは、公然と發展はしなかつたのだ。

第五章 モスコウで

プレスト・リトウスク平和條約の調印は、外務人民委員の職を私が退くことから、一切の政治的意義を奪つてしまつた。その間に、チチェリンが私の後を襲ふためにロンドンから到着してゐた。私は久しい以前からチチェリンを知つてゐた。第一革命の時期に、彼は外交官としての地位をすて、社會民主黨に移つて來た。それから一箇のメンシユヴィキとして、外國に在る黨の『援助團』の仕事に、積極的に參加した。戦争の勃發當時、彼は頑固な愛國的立場をとつて、ロンドンから澤山の書翰を送つて、その立場の擁護にとめた。さうした書翰の一二通は、私のところにも舞込んだ。だが間もなく、彼はインターナショナルの方へ次第に近づいて來て、パリで私の編輯してゐた『ナシエ・スロヴォ』のために、活動的な通信員となつた。そして結局彼は、イギリスの牢獄に投ぜられてゐたのだ。私は彼の釋放を要求し、交渉は遅々としてすまなかつた。私は、イギリスに向つて復讐すると威嚇した。イギリス大使ブカナンは、その日記のなかで言つた。『要するに、トロツキイの言ひ分にも理由がある。戦争繼續に傾いてゐる國で平和の宣傳をやつたといふ廉で、ロシア人を逮捕する權利を我々が主張するならば、同じく、平和に傾いてゐる國で戦争の宣傳をやつたといふ廉で、イギリス

人民を逮捕する権利をロシア人は持つてゐるからだ。』

チチエリンは釋放された。彼は最も都合のいい契機にモスコウへ到着した。私は、これで救はれたと吐息をついて、外交の舵を彼に引渡した。それから私は全く外務省へ姿を見せなかつた。稀に必要ながあると、チチエリンは電話で私に相談したものだ。三月十三日になつて初めて、公然と、私の外務人民委員辭職と、軍事人民委員及び最高軍事會議々長の任命とが發表された。その會議は私の發議で、その少しばかり前に出來たばかりであつた。

かくてレーニンは、結局彼の目的を達したわけだ。彼は、ブレスト・リトウスクでの意見の不一致に關聯して、私が辭職を申し出たのを利用して、彼の本來の考へ——事情の變化に副うために變形された——を遂行したに過ぎなかつたのだ。その時國內の敵は、隱謀から轉じて、海陸の戦線をつくらうとしてゐたので、レーニンは私に軍事行動の衝に當つて欲しいとの希望を表明した。彼はこんどはスヴェルドロフを味方に惹付けることに成功した。私はそれに反對しようと試みた。『それなら誰を我々は任命することが出来る？ 指名し給へ。』と、レーニンは攻勢をとつて來た。私は一瞬間、考へ廻した後で、承諾した。

私に軍事的な仕事をする準備があつたか？ 勿論ない。私はツアーの軍隊で、兵役に従つたことすらなかつたのだ。兵役年齢の間、私は牢獄、追放、亡命で暮した。一九〇六年に、裁判所の宣告は、

私から一切の市民權、兵役權を奪つてしまつた。バルカン戦争中、シベリヤ、ブルガリヤ、後でルーマニアで數箇月過してゐる間に、私は軍事問題に接近するやうになつた。しかしこの問題へはまだ自然、私は軍事的にといふよりも、政治的に接近したのであつた。世界戦争は凡ての人々を——私をもふくめて——軍國主義の問題に接近させた。『ナシエ・スロヴォ』での私の毎日の仕事、『キエウスカヤ・ミスル』への私の執筆は、私の新しい知識や觀察を系統化しようとの、必要な衝動を私に與へた。しかしそこで重大なものは、政治の延長としての戦争、戦争の道具としての軍隊だつたのだ。軍隊組織及び技術の問題は、私の關する限りでは、まだ背後に押しやられてゐた。他方、兵舎や、塹壕や、戦闘や、病院や、さういつたところに在る兵隊の心理が、深く私の興味を動かした。これは後になつて、非常に役に立つた。

議會政治の國々では、陸海軍大臣の職は屢々辯護士や、私のやうに編輯局——尤も私のよりもずつと快適なものだが——の窓から主に軍隊を眺めるジャーナリストに與へられてゐる。だが、そこには明かに區別があつた。資本主義諸國では、問題は現存軍隊の維持——嚴密にいへば、軍國主義の自動組織にたいする政治的包被の維持であつた。ところが我々のところでは、問題は、舊軍隊を綺麗に掃除してしまつて、その後へ、砲火の下で、新軍隊をつくることにあるので、そのプランは、どんな書物にも發見されるものではなかつた。何故私が軍事的の仕事について不安を感じたか、また、何故私

が他にそれをやるものがないので、そこで初めてそれを引受けることを承諾したか、それはこの事情が十分に説明してゐる。

私は私自身をいかなる意味でも戦略家だとは思つてゐなかつたし、また革命の結果黨内に満ちあふれてゐたやうな、戦略享樂主義に我慢することが出来なかつた。もつとも、デニキンとの戦争、ペトログラードの防衛戦、ビルストスキーとの戦争の三つの機会に、私が一箇の獨立な戦略的意見を抱いて、最初には高級司令官に反対し、次には中央委員會に反対してその意見を擁護したのは、事實だ。しかしこの場合いづれも、私の戦略的意見は、純粹戦闘に關する考慮よりも、むしろ政治的、經濟的考慮によつて、決定されたのであつた。尤も、高等戦略上の問題は、結局、それ以外の仕方では解決され得ないものだとも言ひ得るだらう。

私の仕事の變化は、政府の所在地の變更と一致した。中央政府のモスコウ移轉は、もちろん、ペトログラードにとつて打撃であつた。この時ペトログラード・ソヴィエツトの議長となつてゐたジノヴィエフを先頭に、この移轉には一般が反對であつた。ジノヴィエフはルナチャルスキーによつて支持されたが、ルナチャルスキーは革命の數日後、モスコウのセント・ペシル教會の破壊（實事無根）に責任を負ひ度くないといふ理由で、政府から辭任してゐたのだ。いま彼はその職務にかへつて、『革命の表象』としてのスモルニー館と分れることを欲してゐなかつた。

他の人達はそれよりも重要な論點を持ち出した。大多數者は、その移轉がペトログラードの労働者に與へる悪影響を恐れてゐた。當時我々の敵は、我々がペトログラードをカイゼル・ウイヘルムに引渡さうと企てたとの風説を流布してゐたのだ。これに反してレーニンと私とは、政府のモスコウ移轉は、政府の安全ばかりでなく、ペトログラードそのものゝ安全も保證するものだと言張した。或る敏速な一撃で、革命の首都と、それと共にその政府を獲取しようとの誘惑が、ドイツと聯合國との雙方に、強く働きかけないといふことはあり得ないであらう。政府がなくて、飢ゑてゐるペトログラードを獲取することは、自ら全く別箇の問題であらう。結局、反對は打ち破られ、中央委員會の大多數は移轉に賛成の投票をした。政府が實際モスコウへ移轉したのは、一九一八年三月十二日であつた。我々が『十月』の首都を遺棄しつゝあるといふ印象を柔げるために、私はその後一二週間ペトログラードに居残つた。鐵道行政が、もう少し餘計にその地位に私を引止めたのだ。といふのはそのサボタージュは減少はしてゐたが、なほ重大だつたからだ。私は、軍事人民委員に任命された翌日、モスコウに到着した。

中世的の城壁と、無数のきら／＼した圓頂閣をもつたクレムリンは、革命的獨裁の城塞としては、まつたくパラドックスに思はれた。たしかに、以前には貴族の娘達のための私立女學校だつたスモルニー館も、労働者、兵士、農民の代表者達のために、建てられたものでないことは同じであつた。一

九一八年三月まで、私は曾つてクレムリンの内部へ入つたことはなかつたし、一般にモスコウといふものを知らなかつた。たゞ一つのかけ離れた建物、ビュチルスキー移送監獄だけは例外で、私はその塔の中で、一八九八年——一八九九年の寒い冬の間、六箇月を過したのだ。一箇の観光客としてなら私はイヴァン恐怖王の宮城で、その即位室のあるクレムリン宮の古代性を、驚嘆の瞳をもつて眺めたでもあらう。しかし我々は、長い間こゝに住まなければならなかつた。この二つの史的兩極、二つの相容れざる文化の、直接の、毎日の交渉は、目ざましいことでもあり、同時に興味あることでもあつた。私は、木を敷きつめた道を驅つて、ニコライエフスキー宮殿を通るときに、しばしば傍に、ツァーの大砲とツァーの鐘を見た。モスコウの重々しい野蠻時代性は、その鐘の破れ目と、大砲の砲口からぢつと凝視めてゐた。もしハムレット王子ならば、この場所で繰返したでもあらう。『時代は氣が狂つてゐる——おゝ、呪はしい怨みよ、わしはそれを正しくするために生れて來たのだ！』然し我のまはりにはハムレット的な何ものもない。極めて重要な問題が討議にのぼつてゐる時でさへ、レーニンは演説者に各自わづかに二分間を與へたに過ぎなかつた。おそらく人は、一つの集會から次の集會へ行く途中で、不意に過去のクレムリンへ向きを變へた時、後進國の發展における矛盾について一二分間思ひをめぐらすことが出來たであらう。——だがそれ以上長くは出來なかつた。

ポテシニー宮殿と向ひ合つたカヴァレルスキー・ビルデングは、革命前、クレムリンの官吏の住居

區域であつた。その一階の全部は、長官によつて占められてゐた。當時の彼のアパートメントは今も數多の小さな部屋に分たれてゐた。レーニンと私とは、同じ食堂に坐りながら、廊下をへだてゝその區域を眺めた。クレムリンの食物は、その頃非常に悪かつた。新鮮な肉の代りに、コーン・ビーフが使用されてゐた。小粉麥や大麥粉には石が混つてゐた。赤ケット・カヴィヤだけが輸出がとまつてゐたので、豊富であつた。かくてこの強制的のカヴィヤは、革命の數年間を色取つたが、それはひとり私にだけではなかつた。

スパスキー塔の上の音樂時計は修理された。今は、その古いベルは、『神よ、ツァーを守り給へ』を鳴すかはりに、十五分おきに靜かに、悲しげに『インターナショナル』を打ち鳴らした。自動車入口は、スパスキー塔の下にあつて、アーチ形のトンネルを通つて行くのであつた。そのトンネルの上に、聖像龕があつて、その頂上のガラスがやぶれてをり、その龕の前のランプは、ながい間消えてゐた。クレムリンから出て來る時、よく眼ではその聖像龕をぢつと眺め、耳では頭上で『インターナショナル』が殷々と響くのを聞いたものだ。そのベルのある塔の上には雙頭の鷲が、もと通りに立つてゐたが、その王冠はすでに取除かれてゐた。私は、その鷲の上へ槌と鎌をおいて、スパスキー塔の高處から時代の破壊が望まれるやうにしたらと警告した。だが、何等かの理由でそれは實行されなかつた。

レーニンと私は、廊下で日に何度となく逢ひ、またいろんなことを協議するために互ひに訪ね合つた。時々、會談が十分、十五分にすら互ることがあつた——我々にとつては長い時間だつたのだ。その時代、レーニンは寧ろおしやべりであつた——勿論彼の標準から割出してのことだが。我々にとつては、そのために準備しなければならない、新しい事柄や、全く未知なことが澤山あつた。我々は、我々自身及び他の人々を、この新しい條件に適合するやうに創造しなければならなかつたし、従つて我々は、特殊から一般へ、及びその他の道へ移つて行く必要を感じた。ブレスト・リトウスクの不一致のかすかな曇りは、跡方もなく消えてしまつてゐた。レーニンは私と私の家族に非常に丁寧であると共に、親切であつた。彼はよく、廊下のところで私の小供だちをとめて、戯れ遊んだ。

私の部屋の調度はカレリヤの樺材で出来てゐた。ストーヴの上では、時計がキューピットとセイシンの飾りつけの下から、弱々しい銀の聲で時を打つた。部屋のなかに何一つといつて、私の仕事に相應したものもなかつた。支配階級の有閑生活の極光が、椅子といふ椅子から射してゐた。しかし私は私のアパートメントすら飛行機の翼の上においた。その時代、私は戦線からモスコウへの短い訪問の間だけ、その部屋で眠つたのだから、これはなほ一層本統のことだつた。

私がベトログラードから到着したしかもその最初の日だつたと思ふが、レーニンと私とがカレリヤの樺材の調度にかこまれて、おしやべりをしてゐた時に、キューピットと彼の愛人セイシーとが、我

私の邪魔をして、その銀のベルを鳴らした。我々は、恰も二人ともに同じことを考へてゐた自分を見出したかのやうに顔を見合せた。その隅つこに口を開いてゐる過去が、我々の話を立聞きしてゐたといふ、それは考へなのだ。我々は四方八方から過去で取かこまれてゐたが、それを我々は尊敬をもつて取扱ひもせず、それかと云つて敵意も持たず、寧ろ一種の皮肉をもつてそれを取扱つた。だがそれで我々がクレムリンの環境に慣れたものと解したら、それは間違ひであらう。我々の生活はそれに慣るにしては餘りに動的で、我々は何物にも慣るといふ時間を持つてゐなかつた。我々は周囲にあるものを眼尻で見やり、空想的に、皮肉であると共に勵すやうな調子で、キューピットとセイシーに言つた。「君たちは僕等がやつて來るとは思はなかつたかね？　もうどうにもならないよ！　さあ、僕等になじむことだ！」我々は、却つて、我々の周囲のものゝ方を我々に慣れさせてゐたのだ。

舊官吏團の下級者は、舊來の職にとめられてゐた。彼等はほんの少しばかり恐れを抱いて我々にかへた。ここでの舊制度は、奴隸制度の時代から始まつて、苛酷なものであつて、その奉仕は父から子へと繼續された。クレムリンの無数の追従漢やその他の從臣の間に、數代の皇帝につかへた老人が澤山ゐた。その一人のステュピシンは、小柄な、顔を綺麗にそつてゐる老人で、曾つては從臣たちから恐れられてゐた、職務に忠實な人間であつた。いま若い人達は、新しい挑戦ともつれあつた尊敬の眼で、彼を眺めた。彼は、疲れも見せず廊下をのた／＼と歩いて、椅子をきちんとその在るべき場所

に直し、塵を拂ひ、すべてに元通りの秩序を保たせてゐた。夕食のとき、我々は、鷲の紋章のついた皿のうへに、薄い植物性のスープと、粗製の蕎麥を盛つて出された。あの人は何をしてゐるの？ あれ！ と、セリヨーザが母親にさゝやいた。その老人が椅子の後ろを影のやうに動いて、黙々として皿をいろんな風に直してゐた。皿の縁の雙頭の鷲の紋章は、客と向ひ合つて正しくおかねなければならぬのだ、それを始めて分つたのはセリヨーザであつた。

『スチュピシン老人に気がつきましたか？』と私はレーニンに訊ねた。

『どうして彼に気がつかないでをれるかね？』と、やさしい皮肉な調子で、彼は答へた。

とき／＼我々は、根こそぎその本場から切離されたこれらの老人を、心から氣の毒に思ふことがあつた。スチュピシンは間もなく、レーニンにしっかりと惹きつけられた。その後レーニンが、もつと人民委員ソヴィエツトに近い他のビルヂングへ引越した後は、我々が秩序を解し、彼の注意を正しく評價したので、こんどはその老人は私の妻と私に、その信頼を移して來た。

舊從臣の全スタッフが間もなく解散された。若い從臣達は、たちまちの中に新しい條件に適合するやうになつた。スチュピシンは恩給で生活することを欲しなかつたので、さきに博物館に變更された、或る大きな宮殿に移された。彼はその後よくカヴァレルスキー・ビルヂングへやつて來て、我々を訪ねた。その後彼は、宮殿内のアンドレエウスキー大廣間の前方にあつて、諸大會や諸協議會の間、戸

口の番人となつてゐた。彼のまはりはいつちも秩序が保たれてゐた。彼は、ツアーや大公等のレセプションにやつたと同じ職務をやつてゐたが、いまではそれがコンミニュニスト・インターナショナルであるのだけがちがつてゐた。彼は、ツアーの讃歌から革命の讃歌に調子をかへた、スパスキー塔の時計のベルのやうに、色が褪せた。一九二六年、この老人が病院で、長病ひで死に瀕してゐた時、私の妻が彼に見舞品をおくつてやると、彼はむせび泣いて、感謝した。

我々を迎へたソヴィエツト・モスコウは混沌としてゐた。モスコウは、歴史家ボクロウスキーを議長として——この人ほどかういふ地位にふさはしくない者はない——自身の人民委員ソヴィエツトを持つてゐるらしかつた。ソヴィエツト・モスコウの権力は、モスコウ地域の全部に擴がつてゐたが、その地域の境界は何人もそれをはつきりと言ふことが出来なかつた。北方はアルハンゲル州、南方はクルスクの州が、それに屬すると主張されてゐた。そんな工合でモスコウにおいて我々は、ソヴィエツト領土の主要部分に権力——あやしいものだが——をもつてゐる一つの政府を發見した。モスコウとペトログラードとの傳統的な對立は、十月革命の後までもつゝいた。昔、モスコウは巨きな村落でペトログラードは都市であつた。モスコウは地主と商人とを代表し、ペトログラードは軍人と官吏を代表してゐた。モスコウは、骨の隨までロシア的で、スラヴ的で、客あしらひが親切で——言葉をかへて云へば、ロシアの正に心臓だと見なされてゐた。ペトログラードは、ヨーロッパ的で、薄情で、

利己的で、この國の官僚的頭腦であつた。モスコウは織物工業を發展させ、ペトログラードは金屬工業を發展させた。この對立は、實際の相違を文獻の上で誇張したものであつた。我々はすぐにそれを感得した。愛郷主義は、土着のモスコウ・ボリシエヴィキにすら及んでゐた。モスコウの人民委員ソヴィエツトとの關係を規正するために、私を議長として、一つの特別委員會が設置された。不思議な仕事であつた。我々は辛抱強く、地方人民委員會を解剖し、眞にそれに屬するところのものを、中央政府として承認した。我々の仕事が進捗するにつれて、第二のモスコウ政府の不必要なことが、すっかりあきらかとなつた。モスコウ人自身また、彼等の人民委員ソヴィエツトを廢止する必要を理解した。

モスコウ時代は、ロシア史ではこれで第二回目、國家を統一し、行政諸機關を創設すべき時代となつた。レーニンはこの時、依然としてあらゆる問題に宣傳的表式で答へてゐた人々をあつさり片附けるために、焦燥と皮肉と、時としては露骨な手厳しい嘲弄を示すやうになつてゐた。『君はいま何處にゐると思ふんだね、同志？ スモルニーにか？』彼はよく、人のよい寛容さで柔らげられた獯猛さをもつて、彼等を射抜いた。『仕末におへないスモルニー式だ。』と彼は、仕事のことヒジメを話さない相手を遮つてよくさう云つた。『どうか目を醒してくれ。我々は今もうスモルニーにゐるのではない。我々はあの時以來、前へすすんでゐるんだ。』レーニンは、次の日に備へる必要がある時には、過去に

ついて猛烈な言葉をあびせることを決して差控へなかつた。我々はこの仕事で、手に手をとつて進んだ。レーニンは非常に規律正しく、私は街學的でさへあつた。我々は、あらゆる種類の緩慢と弛緩にたいして、倦むことのない闘ひを行つた。私の提案で、遅刻者と、會議開會の遅延を罰する嚴重な規則が採用された。一步一步と、混沌は秩序に服して行つた。

重要問題や、各官省の間の紛争から重大事を惹起するやうな事象が討議される會合のまへには、レーニンはいつも電話で、私に前以つて問題をよく知つておくやうにと要請した。レーニンとトロツキイの間の不一致に就ての今日の文獻は、偽りの經文で一杯になつてゐる。もちろん時々には不一致はあつた。しかしそれよりも、電話で數語交した後で、又はお互ひに獨立で、我々が同じ結論に到達した場合の方が、遙かに多かつたのだ。或る事柄について我々二人が同一の意見を持つてゐることが明瞭であつた時には、會議で必要な決定が採用されるといふことを我々は知つてゐた。しかし時々レーニンは、彼の計畫の一つに重大な反對論が出るといふ懼れがあつた場合には、私に電話で、『會合に缺席しないやうにしてくれ給へ。君に第一番に演説して貰ふつもりだから。』と注意するのが常であつた。私は數分間演説するのが常で、するとレーニンは、私の演説中恐らく二度も『尤もだ！』と叫び、それが投票を決定したものであつた。それといふのは、他の人々が我々に反對するのを恐れて――當時は、現在見るやうな、自分の優位者に何でも賛成するといふ慣行は藥にしたくもなく、不適當

な言葉や投票で妥協するといふやうな、見るに忍びない恐怖は、その影もなかつたのだ——ゐたからでなく官僚的追従が尠くなればなるほど、指導者の權威が大きくなつてゐたのだ。

私がレーニンと意見が合はない場合には、激しい討論が展開される可能があつたばかりでなく、時には實際に展開した。だが我々の意見が一致した場合には、討議はいつも短時間で終つた。何かの理由で、前以て問題について談合することが出来ない時には、我々はいつても會議の席上でノートを取り交はし、その結果我々の間に何等か意見の不一致のあることがあると、レーニンは問題の決定を延期するやうに、その討議を導いて行くのが常であつた。時々、彼との不一致を述べたノートのうちに私はユーモラスな調子でその文章をかきつけた。するとレーニンの身體全體が、それを讀んでゐる間揺れてゐた。彼は笑ひにたいして非常に敏感で、特に疲れてゐる時がさうであつた。それは彼の小供じみた舉措の一つで、萬人のうちの最も男らしいこの人のうちには、小供じみた舉措が澤山あつた。私は、レーニンが極度の眞摯さをもつて會議を指導しようとする骨折りが、一方で込み上げて来る笑ひを抑へるために、ひどく苦心してゐるのをよくうれしがつて眺めたものだ。さういふ場合、彼の頬骨は、その骨折りのためにいつもよりも一層出張つた。

軍事人民委員省——こゝで私は、私の仕事の大部分、軍事的の仕事ばかりでなく、黨及び文獻上の仕事、又は私のすべき他の仕事をやつたのだが——は、クレムリンの外におかれてあつた。私はカヴァレルスキー・ビルヂングに住居をおいてゐたゞけであつた。仕事の上で私を訪問して来る人々は、その人民委員省の方へやつて來た。社交的の訪問——誰一人そんなことを考へたものはなく、我々はそれにしても餘りに忙しかつたのだ。いつも我々は、五時頃に仕事を終へて家に歸つた。七時には私は、夜の會議のために、人民委員省へ引返した。それからすつと後になつて、革命がいさゝか安定した時には、私に夕方時間を理論的な、文獻的な仕事に振り當てた。

私の妻は教育人民委員省に勤め、博物館及び古代記念物の係りに任ぜられてゐた。内亂の災害から過去の記念物を守るのが、彼女の任務であつた。困難な仕事であつた。白軍の方も赤軍の方も、歴史的財産、地方の諸クレムリン、又は古代寺院を大切にしようなどゝは、餘り深く考へてゐなかつた。このために、軍事人民委員省と博物館の官廳との間に、屢々論争が起つた。諸宮殿や諸寺院の守護者達は、文化にたいする尊敬心が缺けてゐるといつて、軍隊を攻撃し、軍事人民委員達は、生ける人民の代りに死物を大切にするといつて、その守護者達を攻撃した。形式的に見ると、私は私の妻と、官省の仕事の上で、はてしない喧嘩をしてゐるかのやうであつた。このことで私達のまはりには笑ひ草が澤山出來あがつた。

私はこの時、主に電話でレーニンと連絡してゐた。頻々として彼は私を呼出し、私は彼を呼出して無数の事柄に言及した。諸官省は、赤軍に對する不平で、屢々レーニンを悩ました。するとレーニン

はすぐ私を呼出したものだ。その五分間後には、私が農業又は檢察人民委員の新候補者に立つことが出来るかどうか、それを知り度いし、且つその候補者について私がどう考へてゐるか、それを話して貰ひ度いといつて、私は呼出した。そのまた一時間あとには、プロレタリア文化についての理論的討議を私が注意して見てゐるかどうか、ブハーリンに反駁する意嚮が私にあるかどうか、それに知るところに興味をもつて私を呼出した。それから、軍事省では南部戦線で、ステーションへの食料輸送のために貨物自動車隊を割當てる事が出来るか？ といつた質問がやつて来た。半時間すぎると、スエーデン共産党内の意見の不一致に私が注意してゐるかどうかを訊ねるレーニンの質問が齎らされた。私がモスコウにあつた時、毎日々々はそんな風にして過ぎたのだ。

ドイツが進出した瞬間から、フランス軍の行動——尠くともその比較的顯著なもの——は突然に變化した。彼等は、ホーヘンツォーレルン家と我々との祕密取引について云々することの愚さを理解したのだ。そのことは、我々が戦争に従事する事が出来ないといふことと同様、彼等に明白であつた。フランスの士官の或る者は、我々が媾和に署名したのは時日を得るためだとさへ主張した。この観念は、貴族出で、王黨派の、片眼の一フランス士官によつて、特に力を籠めて擁護されたが、この士官は極めて危険な任務に就き度いと私に申出た。

ニイツセルに交替したラヴァーヌ大將は、用心深い、むしろ物柔かい調子で、しばしば私に勧告を送つて来た——この勧告はほとんど價值のないものであつたが、見かけだけはさも意味がありさうであつた。彼にしたがふと、フランス政府は現在、ブレスト・リトウスクの媾和締結を承認してをり、我々に公平無私な援助を與へて、我々の軍隊の編制に力をかしたいと、それだけを欲してゐるのだとすることであつた。彼は、ルーマニアからの歸途にあるフランス使節團の將校を、私の勝手な手配に委せようと申出た。その中の二人、一少佐と一大尉とは、軍事省のビルディングの向ひ側に住居を定めて私がいつでも彼等に會へるやうに取計つた。しかし實は私は、彼等は軍事行政よりも寧ろ軍事間諜の能力があるものではないかと疑つてゐたことを、こゝに告白しなければならぬ。彼等は文書にした報告を私に提供したが、混雜してゐたその日頃、私はそれに眼を通す暇すらなかつたのだ。

その短い『休戦』の間の挿話のひとつは、聯合國の軍事使節團が私を訪問して来たことであつた。さういふ使節團は澤山あつて、各々數人の人々から編成されてゐた。その代表約二十人が、私の小さな部屋へやつて来た。ラヴァーヌもそれに加はつてゐた。彼等の若干のものは、ほとんど戲談といふものを言はなかつた。感じの柔かいイタリーの將軍は、モスコウから山賊を追拂ふことに我々が成功したのは目出度いことだと言つて、私に祝意を述べ、他の人々から自己を發揮した。『もうかうなれば』と彼は、人を魅するやうな微笑をうかべて言つた。『どこの首都とも變りなく、安全にモスコウで生活することが出来ますよ。』それは寧ろ誇張だと私は言つた。それで言葉が切れると、こんどは

お互ひに何を言つてよいものか、文字通りに我々は見當がつかなかつた。訪問者達も自身で思ひ切つて立ち上ることも出来なかつたし、私もどうして彼等を追拂つたらよいか知らなかつた。結局、ラヴアーン將軍が、この上軍事代表はあなたの時間を妨げ度くないが、それで異存はないだらうかと訊ねて、この難局から私を救つてくれた。私は、こんな優れた一行と別れるのは惜しい氣がするが、しかし敢て異存もないと答へた。代表は誰も彼も、思ひ出せば多少當惑した笑ひをうかべざるを得ない光景を、彼の生涯に経験したわけだ。聯合國の軍事使節と私の會見は、そんな種類のものであつた。

次第々々に軍事が私の時間の大部分を吸収した。しかも私はイロハから出發したので、よけいさうであつた。技術的領域及び軍事行動の領域では、私の仕事は主として、適當な人間を適當な地位に配置し、彼等をして各自その能力を發揮せしむることにあると考へてゐた。軍隊を創設する上の私の政治上及び組織上の仕事は、黨の仕事と完全に融け合つた。それ以外のどんな仕方でも、決して成功はしなかつたであらう。

軍事人民委員省で働いてゐる黨員の間に、軍醫スクリヤンスキーを私は發見した。彼は若かつた(一九一八年にやつと二十六歳であつた)に拘らず、事務的な仕事の仕方、勤勉、及び人民や事情を秤量する才能——言葉をかへていへば、爲政者たる資格において、實に素晴らしいものがあつた。さういふ場合になくてならぬスヴェルドロフに相談した後、私はスクリヤンスキーを私の代理に選んだ。私は

あとになつて會つてそれを後悔しなければならぬ機會はなかつた。私は當時、時間の大部分を戦線で送つたので、私の代理の義務を負ふといふことは、大きな責任あることであつたのだ。私の留守中、スクリヤンスキーは、革命軍事會議を主宰し、省内のその時々の仕事の一切——それは主として戦線の必要に應ずることであつた——を指導し、最後に、レーニンが議長となつてゐた國防會議において軍事人民委員省を代表した。

もしフランス革命のラザール・カルノーと比べることの出来る人間があるとすれば、それはスクリヤンスキーだ。彼はいつも正確で、不屈不撓で、活潑で、よく消息に通じてゐた。軍事人民委員省からの命令の大部分は、彼の署名で發せられた。そこでこれらの命令が諸中央機關紙及び地方新聞に掲載されたところから、スクリヤンスキーの名は強く一般に知れ渡つた。世の眞摯な、厳格な爲政者の例に洩れず、彼は多くの敵をもつてゐた。彼の青年氣鋭の才能でイラ／＼させられた凡庸な知名者は、尠くなく、スターリンは舞臺の後にあつてそれらを使喚してゐた。スクリヤンスキーにたいする攻撃は、内々で企まれてゐて、私のゐない時には特に甚しかつた。レーニンは、國防會議を通じて、スクリヤンスキーをよく知つてゐて、いつも非常に熱心に彼を擁護した。『素晴らしい働き手だ。』『立派な働き手だ。』と、彼はいつも變らず言つてゐた。スクリヤンスキーはそれらの一切の隠謀に耳をかさないで働いた。彼は給與係の報告を聴取し、諸工場から報道を蒐集し、いつも不足をつけてゐた彈藥筒

の數を調べてゐた。絶間なく煙草を吹かしながら、彼は、直通電話で通話し、責任士官を電話で呼出し、國防會議のために資料を準備した。朝の二時三時に彼を訪問しても、彼がまだ軍事省の彼の机に向つてゐるのが見出された。『君はいつ眠るんだね？』私はよくさう訊ねたものだ。すると彼はその答を戯談でまぎらした。

軍事省が個人的徒黨や、他の諸省に極めて重大な影響を與へる口喧嘩から、殆どまったく免かれてゐたことは、いま想ひ出して私も私は幸福を感じるのだ。仕事の奮闘的な性質、指導力の權威、働き手の正しい選擇（縁故ひいきや寛大がなく）——正確忠實な精神——これらが實に、厄介な、よく均衡のとれてゐない、その構成が非常に異質的な一つの機構にたいして、仕事の中斷されないやうに保證したものだ。しかもこれを成し遂げた功績の大部分は、スクリヤンスキーに屬するのだ。

内亂は、私を人民委員ソヴィエツトの仕事から遠ざけた。私はこんどは、列車のなかへ又は自動車
のなかで暮した。幾週間も幾月もさういふ旅行をした後では、私は、政府の時事的な仕事との接觸を
まったく失つてしまつたので、モスクウへ短時日の訪問した時には、ふたゝびその絲口を見出すこと
が出来なかつた。だが、最も重要な諸問題は、政務局（ポルトビュロー）で決定された。時々私は、
レーニンの招致に應じて、特に政務局の會合に出席するために歸つて來ることがあつた。また時々
は、私はスヴェルドロフを通じて、戦線から私が持つて來た重大問題を討議するため、政務局の臨時

會議を召集した。この期間、レーニンと私との文通の内容は、大部分内亂に關する事項に限られて居
り、そのまへの談話を補正するためか、又は次の談話の基礎とするための短いノートか、長い電報で
あつた。それらの文獻は事務的な短いものではあるが、他の何ものよりも優つてポリシエヴィキの指
導グループの間の實際の關係を示してゐる。私は近く、それに必要な註釋を附して、この廣汎な往復
文書を公刊するつもりだ。それは、スターリン學校の歴史家の仕事にたいする致命的の駁論となつて
現れるだらう。

ウキルソンがロシアのすべての政府の妥協會議——彼の貧血大學教授的なユートピアの一つ——を
目論んでゐた時に、レーニンは一九一九年一月廿日、南部戦線にあつた私に（暗號）電報を送つて言つ
た。『ウキルソンが休戦を提議し、ロシアのすべての政府を招致して會議を起さうとしてゐる。……
恐らくウキルソンのところへ赴かなければならぬのは、君だらう。』プレスト・リトウスク協議の時
の意見の不一致は、當時私が完全に軍務に没頭してゐたに拘らず、重大な外交上の仕事に當面しなけ
ればならない場合には、レーニンが再び私に向き直ることを妨げはしなかつたのだ。周知のやうに、
ウキルソンの平和製造の努力から何ものも實らず、その結果、私はその會議に行く機會がなかつた。

レーニン自身の無数の證言の外に、私の軍事上の仕事にたいするレーニンの態度について、マキシ
ム・ゴルキーのかいた生々した記録がある。『手で卓子を打ちながら、彼（レーニン）は言つた。他

のどんな人間が、一年のうちに殆ど典型的の軍隊を組織し、軍事専門家の尊敬すら博すことが出来るか？ あつたら私に示してもらひたい。我々はさういふ素晴らしい人間をもつてゐるのだ！ 我々はあらゆるものを持つてゐる。だから奇蹟が行はれるだらう。』

ゴルキーによると、やはりそのときの會談でレーニンは彼に言つた。『さう、さう。私は知つてゐる。彼に對する私の關係については、若干の嘘が傳へられてゐる。あまりに澤山の嘘が語られてゐるが、特に私とトロツキイについてはひどい。』事實や、文書や、論理に反して、我々の關係についての嘘が、一個の國家教育となつてゐる今日、もしレーニンがゐたら何と云ふだらう？

革命後の第二日目に、内務人民委員の任命を私が拒絶した時、私は、他の理由の外に、民族性の問題を出した。ところで、軍事においては内政におけるよりも、この斟酌がよけいになされねばならぬと思はれるだらう。しかしレーニンの正しかつたことが實證された。革命が上昇期にある時には、この問題は曾つて些少の意義ももつことがなかつたのだ。もちろん白軍は、赤軍内でのプロバガンダでは、反セミ民族の契機を展開しようとしたが、明かに失敗した。白軍の新聞紙のうちにすら、それについての澤山の證據がある。ベルリンで發行されてゐる『アルヒフ・オブ・ルシアン・レボリユーション ロシヤ革命雜誌』のなかで、白軍側の文筆家が、次のやうな目ざましい挿話を述べてゐる。『我々を訪ねて來た一人のコサツクは、君はユデア人のトロツキイの指揮の下で、勤務してばかりでなく戦争までしたと、誰かに罵倒された。

するとそのコサツクは固い自信をもつて答へた。「そんなことは絶対にない。トロツキイはユデア人ではない。トロツキイは闘士だ。彼は我々の……ロシア人だ！……コンミニユニストのレーニンはユデア人だが、トロツキイは我々の……闘士で……ロシア人……我々自身の！』

それと同じモチーフは、我々の若い小説家のうちの最も才能のあるバーベルの『騎兵隊』中に見出されるであらう。私がユデア系であるといふ問題が重要さを持つて來たのは、私が政治的迫害の對象となつて後になつてからに過ぎないのだ。反セミ族主義は、反トロツキイズムの擡頭といつしよに、擡頭した。その兩者ともに、同じ泉源——十月革命にたいする小ブルジョアの反動——から來たものだ。

第六章 ブレスト・リトウスクの商議

我々は媾和を欲してゐると聲明した布告は、まだペトログラードしか我々の手に入つてゐなかつた十月二十六日に、ソヴィエツト大會によつて可決された。十一月七日に、私はラヂオを通じて、聯合國及び中歐強國（ドイツ、オーストリア・ハンガリー……譯者。）にアピールを發し、一般的の平和締結を勸説した。聯合國政府は彼等の代表者を通じて、ロシア軍總司令官デューコーニン大將に回答し、今後、單獨媾和に向つて歩を進めることがあれば、『極めて重大な結果』を惹起するであらう、と言つた。私はこの威嚇に答へるに、全勞働者、兵士及び農民にたいするアピールをもつてした。それは絶對的なアピールであつた。我々は我々のブルジョアジエを顛覆した今日、外國のブルジョアジエの命令で、わが軍隊をしてその碧血を流さしむ可きではない、といふのであつた。

十一月二十二日に、我々は、バルチック海から黒海に互る全戦線にそつて休戦するといふ協定に調印した。そして再び、聯合國にたいして、我々とともに平和商議に参加せんことを勸誘した。何等回答はなかつたが、もはや前のやうな威嚇もなかつた。聯合國政府は何等か教訓を得たものと見える。

平和商議は、平和布告の採用から六週間の後、十二月九日に開始された。この期間は、聯合諸國にたいして、この問題について彼等の態度を決する上に、十分な時日を殘したものであつた。開會の冒頭に、我々の委員は民主的媾和の原則を述べた正式の宣言を發した。

相手方は休會を要求した。會議の再開は繰返し延期された。四國同盟（ドイツ、オーストリア・ハンガリー、トルコ、ブルガリヤ……譯者。）の委員は、我々にたいする回答を作製するにあつて、あらゆる種類の内政上の困難と戦はなければならなかつた。そして結局、會議の再開を十二月二十五日と通告して來た。四國同盟の各政府は、民主的媾和の原則——無併合、無賠償、民族自決——に『賛成』した。十二月二十八日には、民主的媾和の名譽のために、一大デモンストレーションがペトログラードで行はれた。大衆はドイツの回答に不信を抱いてはゐたが、その回答を革命のための一つの大きな道徳的勝利だとして承認した。翌朝、わが委員は、キュールマンが中歐強國のために提出した奇怪な要求を携へて、ブレスト・リトウスクから歸還した。

『商議を延引せしめるためには、その延引をやつてのける誰かゞなければならぬ。』とレーニンは言つた。そこで彼の主張で、私はブレスト・リトウスクに向つて出發した。私は恰も拷問へ導かれてゐるやうに感じたことを告白する。見知らぬ外國人とゐることは、いつも私の恐怖を呼び起したが、特にこの場合はさうであつた。私は、革命家でありながら、悦んで大使のやうな地位を承諾し、その新しい環境にあつて、水の中の魚のやうに感ずる人を、絶対に理解することが出来ない。

ブレスト・リトウスクでは、ヨツフェを首班とした最初のソヴィエツト委員は、ドイツ人によつて非常にこちらの氣に入るやうな風に取扱はれた。バヴァリアのレオポルド公は、彼等を『賓客』として迎へた。委員達は全部正餐や夕食を共にした。ホフマン將軍は、思ふに、サハロフ將軍を暗殺した婦人委員ヴィチエンコを、多大の興味をもつて觀察したに相違ない。ドイツ人はわが委員の間に挟まつて座席をかまへ、彼等の欲しいと思つた消息は何でも彼でも、わが委員から甘く聞き込まうと努めた。この最初の委員には、一人の労働者と、一人の農民と、及び一人の兵士とが含まれてゐた。彼等は、單に偶然なことで委員に任命されたので、さういふ種類の瞞着を拒む準備がほとんどなかつたのだ。その一人の農民は、老人で、體のためになるよりも多量の酒を飲むことに、夢中になつてゐさへした。

ホフマン將軍の幕僚は、ロシアの俘虜のために、『ルスキー・ヴェストニーク』といふ新聞を發行してゐたが、最初の段階では、その新聞はいつも極めて感動させるやうな同感をもつて、ポリシエヴィキのことを語つてゐた。『我々の讀者は、トロツキイとは何者だかと、我々に訊ねてゐる。』そこでホフマンは彼の新聞で、ロシアの俘虜に報知し、ツアー政治にたいする私の闘争のこと、私のドイツ語の著者『革命のロシア』のことを、驚嘆すべき情愛をもつて、俘虜達に語つた。『全革命世界は、彼の逃走の成功によつて、震撼させられた。』またさらに『ツアー政治が顛覆された時、ツアーの秘密

の伴侶達は、トロツキイが長い追放から歸還するや否や、彼を牢獄に投じた。』などとも語つた。一言で言へば、バヴァリアのレオポルドや、プロシヤのホフマン以上に熱心な革命家はなかつたのだ。

しかし乍らこの牧歌は、長くはつゞかなかつた。二月七日のブレスト・リトウスク會議の會合は、牧歌的なものは微塵もなかつた會合だが、その席上で私は過去に言及して、言明した。『我々は、公のドイツ及びオーストリア・ハンガリーの新聞が、我々に送つてくれた時期尙早的な讃辭を辭退し度いと思つてゐる。媾和商議の進行を成功的ならしめるには、こんなことは全く不必要である。』

この問題で、社會民主々義黨は、再び、ホーヘンツォーレルン及びハツプスブルグ政府の影以上の何物でもなかつた。シャイデマン、エベルト及びその他は、最初は、おためごかしに、我々の背を叩かうと試みた。ウインナの『労働者新聞』^{アルバイク・ツァイトウング}は十二月十五日に雄辯に書いた。『トロツキイとブカナンとの間の決闘は、今日の大いなる闘争、即ち資本家に對するプロレタリアートの闘争の表徴である。』と。キュールマンとツエルニンとが、ブレスト・リトウスクでロシア革命を絞殺さうとしてゐる時、オーストリアのマルクシストは、トロツキイとそれから——ブカナンとの間の決闘以外の何物も見ることが出来なかつたのだ！ 今日ですら、人はさういふ偽善をたゞ嫌惡をもつて眺めるに過ぎない。『トロツキイは』とハツプスブルグ家御用マルクシストは書いた、『ロシアの労働階級の平和の意志を代表する權能を授けられて居るもので、ロシアの労働階級は今や、それをもつてイギリス資本から

縛られてゐる鐵と黄金の鎖を斷ち切らうと努力してゐるのである。』と。社會民主黨の指導者達は、自ら進んで自身をオーストリア・ドイツ資本に縛りつけて居り、彼等の政府を援けて、強制的にロシア革命を鎖で縛らうと努めつゝあつたのだ。プレスト・リトウスク商議の最も困難な段階に、レーニンか私かど、ベルリンの『フオールヴェルツ』かウインナの『アルバイター・ツァイツング』の一片に出會はすと、我々は色鉛筆で下線をつけた箇所を黙つて相互に指示し、一瞬間眼をあげて見交し、それから、つい前日までインターナショナルの内部で我々の同志であつた人々のために、度外れた羞恥の感を抱いて、向きを轉じたものだ。この段階を意識的に通過した人は誰でも、次のことを永久に理解した。政治的地位の變動がどうであらうとも、社會民主主義は歴史的に死んでしまつたといふこと、これだ。

この不適當な假面劇をおしまひにするために、私は私自身の新聞紙のうちで、ドイツの幕僚はドイツの兵士に向つて、カール・リープクネヒト及びローザ・ルクセンブルクに關する何事かを述べようとは思はないかと訊ねた。我々はドイツの兵士のための題目を取扱つた特別のリーフレットを發行した。するとホフマン將軍の『ヴェストニーク』は口をつぐんでしまつた。私がプレスト・リトウスクへ到着した直後に、ホフマンは軍隊内での我々のプロバガンダに向つて抗議した。私はこの問題を論議することを拒絶し、將軍はロシアの軍隊内で彼自身のプロバガンダを繼續してゐる——事情は同じ

ことで、たゞ異るところはプロバガンダの種類だけだと、示唆した。私はまた彼に注意を促し、或る寧ろ重要な諸問題に就ての我々の見解の不一致は、すでに久しい以前から知られてゐることであり、ドイツの一裁判所——大戦中、缺席裁判で私に禁錮を宣告したもの——によつて確證されてすらゐることだと言つた。この不作法な注意の喚起は、大きなセンセーションを捲起した。肩書のある紳士達は呼吸も絶えんばかりになつた。キユールマンはホフマンの方を向いて訊ねた。『返事をしようと思はないかね?』それにホフマンは答へた。『いや、あれで澤山だ。』

ソヴィエツト委員の委員長として、私は、最初の時期に全く目にとまらぬほどにこしらへ上げられた親密さを即刻停止してしまはうと決意した。我々の軍事代表の口を通じて、私にはバヴァリアの公爵を訪問する希望はないといふことを明かにした。これは承認された。私は次に、その合間に會議をしなければならぬといふ口實の下で、別々に午餐や夕食をとり度いと要求した。これもまた黙諾された。一月七日の日記にツェルニンは次のやうに誌した。『トロツキイに率ひられた全ロシア人は、午餐時の前に到着した。彼等は直ちに、もし食事を共にしないやうなことがあつても許して欲しいと求めた。そして彼等はみんな何處かへ消えた。こんどはこの前の場合とは全く風の吹き廻しが異つてゐるやうに思はれる。』偽善的な友誼關係はかくて、公式の手續に席をゆづつた。我々はこの時、月竝な準備行爲から媾和條約の具體的な問題に移らなければならなかつたのであるから、これは寧ろ好

都合であつたのだ。

キユールマンはツエルニンよりも遙かに優れてゐた。また恐らく、戦争後の數年間に私の會つた外交家の誰よりも優れてゐたやうだ。彼は、普通よりも遙かにすぐれた實際的精神をもち、我々——ここで彼は敵手に會つたわけだ——ばかりでなく、彼の親愛なる同盟者をも包む悪意をもつた、性格のはつきりした人として、私に印象した。被占領地域問題の討議中に、キユールマンは出来るだけ高々と背をのばし、聲を張上げて言つた。「我々ドイツの領土は、神のおかげで、どこ一箇所たりとも、外國の軍隊によつて占領されてゐない！」この時ツエルニンの顔は青ざめ、體は震へた。キユールマンはわざと彼を指してさう言つたのだ。彼等の關係は、朗かな友好の關係からは、遙かに遠いものであつた。その後、討議が兩側とも外國軍隊によつて占領されてゐるペルシヤに向つた時、私は、ペルシヤはオーストリア・ハンガリーと異つて、何れの國とも同盟を結んでゐないのであるから、占領されてゐるのはペルシヤの領土であつて、我々の領土でないといふ事實は、我々の何人のうちにも信心深い歡喜を呼び起さない、と述べた。この時ツエルニンは、「前代未聞だ！」と叫んで、ほとんど飛び上らんばかりであつた。外見上ではこの叫びは私に向けられてゐたが、實際にはそれはキユールマンに當てつたものであつた。こんな挿話は屢々あつた。

長い間弱い相手とばかり會つてゐて、熟練した技術の幾分を失つてしまつた甘い將棋家のやうに、

キユールマンは、戦争中、オーストリア・ハンガリー、トルコ、ブルガリヤ及び中立國の屬僚外交家とばかり會つてゐたので、こんどの革命的敵手を見くびり、いゝ加減にゲームをやる傾きがあつた。彼はしばしば、特に會議の初期に、彼のやり方の素朴なことゝ、敵手の心理の理解に缺けてゐること

で私を一驚せしめた。私は、初めて外交家達との會合に行つた時は、恐ろしく、そして全く不快になるほど、まごついてゐた。廣間でコートをとつて掛けてゐる時、私はキユールマンと顔を合はせた。私は彼の顔を知らなかつた。彼は自己紹介をやり、使者を相手にするよりも主人と直接に交渉した方がいゝのだから、私のやつて來たことは『非常によるこぼしい』ことだ、とそのあとへすぐ附け加へた。彼が、劈頭にさういふ印象を與へようと目論んで、この『立派』な行動に満足してゐることは、彼の顔付が見事に證明してゐた。私はこのことから、何だか穢らしいものゝ上に歩み入つたやうに、はつきりと感じた。私は思はずたぢろいだ。キユールマンは失策しくじつたことを知つて、こんどは用心し、彼の調子はすぐもつと形式的なものに成つたが、こんなことがあるに拘らず、彼は私の見てゐる前で、トルコ委員の首班の老宮廷外交家に同じ手を使つたのだ。トルコ代表が私に同僚を紹介して後、私から一步遠ざかるのを見すまし、キユールマンは、トルコ代表が聞きつけることを承知の上で、自信のある舞臺いたについた耳語で、私に言つた。「あの人はヨーロッパで最も優れた外交家だ。」と。このことをヨツフエに話

したら、彼は笑ひながら答へた。『僕がキュールマンと始めて會つたときも、全くそれと同じことをやつたよ。』たしかにキュールマンは、或る非プラトニツクな強請ゆすりにたいするプラトニツクな代償として、『最も優れた外交家』といふ名前を興へてゐたやうだ。それにまた、そのやり方で、彼はツェルニンを最も優れた外交家だとは考へてゐない——彼の次位だ——といふことをツェルニン自身に知らせ、一石二鳥の効果をあげようとしてゐたことも、あり得ることだ。十二月二十八日に、ツェルニンの言葉から、キュールマンはツェルニンに言つた。『皇帝は、ドイツ全土において唯一人の聰明な人間です。』この言葉が、ツェルニンの耳に入れるといふよりも、皇帝自身の耳に入れるためのものだつたことは想像される。外交家達が、自分の追従を目ざす相手に甘く傳へるために、お互ひに助けあつてゐるのはたしかだ。おべつかをつき、おべつかをつき、それでまたいつも、何かそこに残つてゐるんだ！

私がかういふ社交的サークルと面と向ひ合つたのは、これが初めてだつた。もちろん前にも、私はそれに就て何等か幻像を抱いてゐたわけでは決してなかつた。『大人物は神によつては創られなかつた。』といふ、全く強い疑惑を私は抱いてゐた。しかし私は、一般にもつとずつと水準が高いものと思つてゐたことを、自認しなければならぬ。最初の會合の私に興へた印象を云つて見れば、人々は他を安く値踏みし、自分自身を余り高くは値踏しないと、まあさう云つたやうなものだ。

99

このことに關聯して、次のエピソードは多少興味があるかも知れない。ヴィクトル・アドラーの提議で——當時アドラーは、あらゆる方法で、私に個人的同情を示さうと骨折つてゐた——ツェルニン伯は或時私に、大戦の勃發當時私がウインナに残しておいた藏書を、モスコウに送るやうにしようと思出た。この藏書といふのは非常に面白いもので、長い間の外國亡命中に、私はロシアの革命的文獻を蒐集しておいたのだ。私が少しためらつて、まだお禮の言葉も述べないうちに、この外交家は、二人のオーストリー俘虜の事件を私に調査して欲しいと申入れた。なんでもその俘虜は、彼の言ひ分だと、ひどい取扱ひを受けてゐるといふのだ。藏書のことから俘虜——もちろん私人でなく、ツェルニン伯にくつゝいた仲間の官吏だ——のことへ、かく直接に、力を籠めて移つていつたことは、まったく餘りに鐵面皮に思はれた。私は、ツェルニンの言ふことが本統に正しいのなら、もちろんどんな必要なことでもするのが私の義務だ、だがこのことは私の藏書とは何の關係もない問題だと簡単に答へた。ツェルニンは、彼の回顧録のなかで、俘虜の問題と藏書のそれとを結びつけようとしたといふ事實を否定しないで、この出來事を公平に正確に描いてゐる。否、彼は、その二つの事柄を結びつけるのを全く自然なことだと考へてゐるらしいのだ。彼はその描寫をつぎのやうな曖昧な文句で結んでゐる。『トロツキイがその藏書を欲しがつてゐた事は、一目瞭然だつた。』と。私はこれに附加しておかう。私はその藏書を受取るとすぐ、モスコウの學術研究所の一つへ寄附してしまつた。

人類未曾有の最も革命的な統治の委員と、あらゆる支配階級のうちで最も反動的な民族の代表者とが、同じ外交折衝のテーブルにつくやうになつたのも、歴史の事情の意志によるのだ。我々の相手方が、ポリシエヴィキとの商議の破壊力をどれほどひどく恐怖してゐたかは、商議の場所を中立國へ移すくらゐなら商議そのものをぶちこはした方がよいと決意してゐたことで、示されてゐた。ツエルニンはその回顧録のなかに、中立國へ行けば、ポリシエヴィキは、國際的盟友の援助をかつて、商議の手綱を彼等の手中ににぎつてしまつたらう、と全く正しく述べてゐる。彼が正式に用ひた口實は、中立國で商議を開けば、イギリスとフランスがすぐもう『公然と、また舞臺裏との雙方で』陰謀を企てるに相違ないといふのであつた。私は、我々の政治的實踐は舞臺裏の何ものにも一切用事はない、さういふ外交上の武器は、十月二十五日の蜂起の成功のうち、他の多くのものと一緒にロシアの民衆によつて根絶されてしまつてゐるのだから、と答へた。しかし我々は最後通牒に服さなければならなかつた。そして我々はブレスト・リトウスクにとどまつたのだ。

以前の町から離れたところにあつて、ドイツの幕僚が占有してゐる若干の建物をのぞいては、ブレスト・リトウスクは嚴密にいふともはや存在してゐなかつた。その町は、ツァーの軍隊が退却する時無力な憤怒に煽られて、すつかり焼き拂はれてしまつたのだ。ホフマンがこゝを幕僚の駐屯地に選んだのは、こゝだとその幕僚の各員を手元にひきつけて置くことが出来るといふことを知つてゐたから

に相違ない。設備は食物と同じやうに、極めて簡單なものであり、ドイツの兵士は従者として立ち働いてゐた。この兵士達にとつては、我々は平和の使者であつて、彼等は望みを抱いて我々を眺めてゐた。高い、刺のある鐵條網が幕僚達の建物を圍繞してゐた。朝の散歩のときに私はよく、『ロシア人にしてこゝに立入るものは射殺さる可し』といふ掲示にぶつかつたものだ。これは勿論俘虜に示されてゐるものだつたが、私は、こゝで俘虜同様の我々にも適用されるものではないかと自問して、そこからよく取つて返へしたものだ。ブレスト・リトウスクの町を貫いて、立派な軍事道路が走つてゐた。我々はこゝに滞在してゐた最初のころ、ドイツ幕僚の自動車でドライブに出掛けたが、その結果、ある日のこと、我々の委員の一人とドイツの軍曹との間に衝突が起つた。ホフマンは正式に遺憾の言葉を送つて來、私は、我々に振當てられてある自動車は有難いが、その使用を拒否すると答へた。商議は遅々として進まなかつた。我々は何れも、直通電線で各自の政府と連絡しなければならなかつたがその電線にはしばしば故障が起つた。この故障が實際、物理的原因にもとづくものか、それとも我々の相手に時間を與へるためにわざと仕組まれたものか、我々にはわからなかつた。とにかく會議の中絶が頻々として起り、それが時とすると數日もつゞいた。さういつた時のある日、私はワルソーに旅行を試みた。その町はドイツの劔戟の支配の下に生きてゐた。住民は明かにソヴィエツト外交家に大きな興味を示したが、それを表現するのに非常に警戒してゐた。といふのは凡てがどんな結果へ向

つてゐるのか、誰一人知つてゐるものがなかつたからだ。

商議の遅延は我々の利益であつた。これが私のブレスト・リトウスクへ赴いた本當の目的だつたのだ。しかし私は、この點で私の功績を少しも主張し得ない。私の共働者が最善をつくして私を援助したのだ。『こゝでは時間はどつさりある。』とツエルニンは日記のなかで、憂鬱さうに書いてゐる。『準備の出來てゐないのは、或時はトルコ委員だ。或時はブルガリヤ人だ。また或時はロシア人だ。——會合は休會となるか、または開會したばかりで解散してしまふ。』こんどはオーストリア委員がウクライナ委員との間に難問題にぶつかつた時、商議を引延しはじめた。もちろんこれらの事實は、キュールマンとツエルニンとが公の聲明書において、商議を引伸ばさうとしてゐるのは獨りロシア委員のみだと非難することを妨げはしなかつた。私は執拗にこれに抗議したが、しかし無駄であつた。

政府から指圖されてゐるドイツの新聞紙は、その前にはボリシエヴィキにたいして勝手に下手くそな御世辭をふりまいたものだが——もつとも、祕密の新聞紙は例外で、これもみんな政府から指圖されてゐた——商議が終末に近づくと、その御世辭の根跡すらなくなつてしまつた。たとへば『エーグリップ・ヒ・ルンドシャウ』紙は、トロツキイはブレスト・リトウスクで、自分のプラツトフオームを創へて、そこから全世界に向つて彼の聲を傳へてゐるとこぼし、だから出來るだけ早く商議を御仕舞ひにせよと要求したばかりでなく、更に『レーニンもトロツキイも媾和を欲してはゐない、もし媾和にな

れば、それは十中八九彼等にとつて絞首臺か牢獄を意味するであらう。』と論じた。社會民主黨の新聞紙の調子も、實質的には、それと同様であつた。シヤイデマン徒輩、エベルト徒輩及びスタンパー徒輩は、我々がドイツに革命の起るのを望んでゐることをもつて、我々の最大の罪惡だとしてゐた。これらの紳士達は、數箇月の後に、革命が彼等の頸根つこを捉へ、彼等に權力の地位を與へるとは、思つてもゐなかつたのだ。

長い間ドイツの新聞紙を手にしなかつたあとで、私は再びブレスト・リトウスクで、非常な興味をもつてそれを取上げた。媾和の商議はそのなかでは、徹頭徹尾宣傳的な行爲だといつた風に描かれてゐた。だが、私の時間の全部を費すにしては、新聞紙だけでは十分でなかつた。そこで私は、この私の強制的な閑暇——こんなことが近い將來に再びあらうとは想像出來なかつた——を出來る限り十分に利用しようと決意した。我々は、曾つて國會で働いてゐた澤山の速記者をつれて來てゐたので、私は記憶をたどつて、彼等に十月革命の歴史的素描を口授し始めた。しばらくする中に外國の勞働者を目當てに書かれた一冊の書物が出來上つた。實際に起つたことを外國の勞働者に説明してきかせることは絶対に必要なことであつて、レーニンと私とは、一度ならずこの問題を協議したが、誰もそれをする時間がなかつたのだ。しかも私は、ブレスト・リトウスクが私の文筆上の勞働をやる場所にならうなどゝは、夢にも思つてゐなかつた。原稿を携へて歸つた時、レーニンは非常に悦んだ。その中に

我々二人はともに、苛酷な媾和にたいする未來の革命的報償の恰好な擔保の一つを見たのだ。この書物は、たゞちに多數のヨーロッパ及びアジア語に反譯された。

コンミニュニスト・インターナショナルに加盟してゐる一切の黨派は、當時、ロシア人の指導にしたがつて、この書物を無數に出版したに拘らず、一九二三年以外、亞流共はそれはトロツキイズムの有毒な産物だと宣言した。今日それは、スターリンのブラツク・リストに加へられてゐる。テルミドルにたいする觀念上の準備は、その澤山の表現の一つをこの小さな出來事のうちに見出したのだ。勝利をうる唯一の道は、十月革命とつゞいてゐる臍緒をたち切ることでなければならなかつたのだ。

我々の反對側の外交官連も亦ブレスト・リトウスクで彼等の閑暇を利用する方法を見出した。ツエルニン伯は、彼の日記によると、狩獵に出かけたばかりでなく、フランス革命時代の諸回顧録を讀んで、知識の貯藏を増したのだ。彼は、ポリシエヴィキをジャコバン黨とくらべ、それが彼自身を慰めた。このハツプスブルグ家の外交家は書いた。『シヤロツト・コルデイは、「私の殺したのは野獸であつて、人間ではない。」と言つた。これらのポリシエヴィキは再び消えてなくなるだらう、そして——誰が分るものか？——おそらくそこにはトロツキイにたいしてコルデイがあるであらう。』その時にはもちろん、私はこの敬虔な伯爵のこの元氣のいゝ理想については、知るところがなかつた。しかし私はいま、それが大眞面目だつたことを容易に信ずることができるのだ。

最初、ドイツが、數日後には狼のやうな食欲を暴露したに拘らず、十二月二十一日にその民主的原則を提案したとき、ドイツの外交はいつたい何を目ざしてゐたのか、それを正確に發見することは困難に思はれるかも知れない。もと／＼民族自決について理論的の討議——それは主としてキユールマン自身の發案で展開したのだ——を許すことには、ドイツ政府にとつて全く危険がふくまれてゐたのは明かであつた。その討議の始まる以前ですら、ホーヘンツォーレルン家の外交家達には、その方面では何等大きな勝利を得る見込がありさうもないといふことが、明白であつたに相違ない。たとへばキユールマンは、ポーランド、リトアニア、バルチック諸州及びフィンランドをドイツが占領してゐることは、それらの諸國各自の側から言へば『自決』の形態に外ならないものであつて、彼等の意志は、『民族』的機關——ドイツの占領當局によつて創られた——によつて表現されてゐる、と説明しようとしてゐた。だがこれを證明することはさう容易ではなかつた。しかしキユールマンはそれを抛棄しようとはしなかつた。彼は私に、たとへばハイデラバツドの王は彼自身の人民の意志を體現してゐると君は認めないかどうかと、しつこく訊ねた。私は、もしインドからイギリスの兵隊が一掃されれば、尊敬すべき王は十中八九は、二十四時間以上長く自分の足で立つてゐることは出來ないだらう、と答へた。キユールマンは亂暴に肩をゆすぶつた。ホフマン將軍にぶつ／＼言つた。通譯は反譯した。速記者はノートをつくり、討議は際限なくつゞいた。

ドイツの外交家達の方でかういふ行爲に出たのは何故かといふに、我々が彼の手にのらうとしてゐるものと、キユールマンがすっかり自信してゐたからで、そこに祕密があるのだ。彼はこんな風に推理したに相違ない。『ポリシエヴィキは媾和に賛成することによつて、権力を得る。彼等は民主的な條件で媾和をするやうに委任されたことは、本當だ。しかしそれなら、何のための外交家か？ もしも、キユールマンがポリシエヴィキにたいして、適當な外交文書のなかで彼等の革命的公式を與へたら、彼等は私に、諸地方及び人民を占領する——勿論、他の名目で——機會を與へるだらう。世界の眼にはドイツの併合は、ロシア革命の承認を意味するであらう。ポリシエヴィキにとつては、彼等は彼等の平和を持つだらう。』キユールマンがかういふ期待を抱いたについては、彼は疑ひもなくわが自由主義者、メンシユヴィキ及び人民黨派の言説に誤り導かれてゐたのであつて、彼等はブレスト・リトウスク商議をもつて、豫め企まれた筋書を運ぶ喜劇であると言つてゐたのだ。

我々がブレスト・リトウスクでの我々の相手に、我々にとつてはそれは祕密取引のための偽善的假装の事柄ではなくて、人民の相互關係を支配する原則の問題だといふことを——少しの曖昧さも残さず——十分に明白にしたときに、すでに彼の最初の建前で自身を縛つてゐたキユールマンは、恰も、我々が何等かの默契——彼の想像のうちだけで實際に存在してゐたものに過ぎない——を破壊したかのやうに、我々に當つて來た。彼は、十二月二十五日の民主的原則を確守してゐると頑強に言ひ張つ

た。彼は自身の天與の詭辯の才を信じ切つて、世界に向つて、白と黒とは同じだと示さうと目論んでゐたのだ。ツエルニン伯は、彼らしい不器用な仕方、キユールマンのワキ役をつとめ、キユールマンの指導にしたがつて、形勢が危機に瀕するといつても、一層人を喰つた、詭辯的な聲明を發する役目をひきうけた。彼はかうして自分の弱さをかくさうと期してゐたのだ。他方ホフマン將軍は商議のなかへ、呼吸抜き要素をもち込んだ。將軍が外交の機微にはすっかり同感の缺けてゐることは一目瞭然で、時々將軍はそのまはりで商議の行はれてゐるテーブルの上へ、長靴を乗つけた。我々の側からいふと、この商議のうちでホフマンの長靴だけが眞面目にとつてよい唯一の現實だといふことを、一瞬も疑はなかつた。

だが時折將軍は、純粹に政治的な討論のなかへ割込んで來て、彼のやり方で討論した。彼は、民族自決についてのもの凄い商議にすっかり我慢がし切れなくなつた時、ある美しき朝——一月十四日——ロシアの新聞を詰込んだ手鞆をもつて現れた。その新聞の大部分は社會革命黨の新聞であつた。ホフマンはロシア語を安々と讀めた。誰かを罵倒するかのやうに、又は命令でも與へるかのやうに、短いはつきりと細かく區切つた文章で、將軍は、言論の自由を抑壓し、民主主義の原則を侵害してゐるといつてポリシエヴィキを攻撃し、その間にロシアのテロリスト黨の發表した諸論文からこれ見よがしに引證した。その黨派は一九〇二年以來、この將軍のやうなもの考へ方をする一群のロシア人

を、世界の他の部分へ送つてゐたのだ。將軍は我々の政府が暴力によつて支持されてゐるといふことを理由として、憎しげに我々を非難した。彼の口から出てくると、それは實際素晴しく響いた。ツェルニンの日記の冒頭に言つてゐる。『ホフマンは不幸な演説をやつた。彼はそれを数日間練つたのでその成功をすつかり鼻にかけてゐる。』

私はホフマンに答へた。階級社會ではどんな政府でもXの上に立つてゐる。たゞ異ふのは、ホフマン將軍は大財産所有者を保護するために抑壓力を適用してゐるが、我々は労働者を防衛するためにそれを適用する點だけだ。こゝ數分間、媾和會議は、初心者マルクス主義宣傳學校と化したわけだ。『他の諸國を驚かし、いやがらせてゐるものは』と私は言つた『我々が、罷業者を逮捕しないで、労働者に締出しを喰はす資本家を逮捕し、土地を要求する農民を射殺しないで、農民を射殺しようとする地主や官吏を逮捕することだ。』こゝで、ホフマンの顔は紫色になつた。

そんなことがあつた後はいつも、キュールマンは、ホフマンは目下討議中の問題について何か意見を述べようとしてゐるのかどうかと、意地の悪い丁寧さで問ふのが常であつた。すると將軍はいつも『いや、終り！』と答へつ放して、ぶり／＼して窓の外を眺めた。ホーヘンツォーレルンと、ハツプスブルグと、回々教國と、それからコブルグの外交家、將軍及び提督の集まつてゐるところでの、Xの革命的使用についてのこの論議のうちには、氣持のよい、骨を刺すやうな皮肉なものがあつた。

立派な位階をもち、いかめしく飾り立てた紳士のあるもの達は、かういふ商議中すつと何もすることが出来ず、當惑してしまつて、最初に私を一瞥し、次にキュールマンとツェルニンを眺めた。彼等は誰かに、おゝ神様、これはいつたい何のことか説明して欲しい、と言ひたげであつた。舞臺裏では、勿論、キュールマンが彼等の頭へ叩き込んだ——ロシア委員の命數はもう數週間のところだ、この短い期間を利用して『ドイツ』式の媾和を締結しなければならぬ、さうすればポリシエヴィキの後任者はその結果を承認せざるを得ないだらうと。

軍事上の事實の點では、ホフマン將軍は我々より優れてゐたが、それと同程度に、反對に、原則上の問題の討議では、我々の立場はキュールマンのそれよりも優れてゐた。一方で將軍が一切の問題を我々の軍隊の比較勢力の問題に還元しようと思つて居り、他方でキュールマンが戦争地圖を基礎とした媾和に、恰も原則を基礎としたものゝやうな外觀を與へようと無駄骨を折つてゐたのは、そのためであつたのだ。ある時、ホフマンの演説がもたらした印象を緩和しようとして、キュールマンは、軍人といふものはどうしても外交家よりも辛辣な表現をするものだ、と言つた。『我々ロシア委員は、外交家派に屬するものでなく、むしろ我々自身を革命の軍人だと考へてゐる。』と私は答へ、だから軍人らしいぞんざいな言葉の方がいゝと言つた。

だがキュールマンの外交的禮節は相對的なものであつた。彼が取上げた問題は我々の側からの協力

がなくては、到底解決出来ないものであることは明かであつたが、見そこなつたのはまさにそれなのだ。私はキユールマンに説明した。『我々は革命家だ。しかし我々は同時にまた現實主義者だ。だから我々は、本統の名前のかはりに匿名を使ふよりも、むしろあつさりと合併について論議し度いのだ。』そのあとで、キユールマンが時折その外交的假面をなげすてしまつて、意地悪くからんで來たのは不思議でなかつた。私はいまでも彼が、ドイツは『強力なる』東方の隣邦と友好關係を回復し度いと眞面目に欲してゐるものである、と言つた時の、彼の聲の調子をおぼえてゐる。その『強力なる』といふ言葉が、いかにも挑發的な、嘲弄の調子をおびてゐたので、キユールマンの聯合者すらたぢろいだほどだ。その上ツエルニンは、商議が決裂しやしないかと、死ぬほどおそれた。私は手袋をとつて立上り、もう一度、曾つて私が最初の演説で述べたことを彼等に想ひ起させた。私は一月一日に次のやうに述べたのだ。『我々は、我々の國が最近までそれを支配してゐた階級の政策のために弱くなつてゐるといふ事實について、抗辯すべき立場にあるものでもないし、また抗辯しようとも思はない。だが、一國の世界的地位といふものは、今日現在のその技術的機關の状態によつて決定されるものでなく、その國に潜在する可能性によつて決定されるものであつて、それは恰もドイツの經濟力が現在のドイツの食料供給状態によつて測定され得ないのと同然である。廣い、見透しのある政策は、發展能力の上に、内部的な力の上に基礎をもつもので、その力は一度目醒まされれば、遅かれ早かれその力を實現するであらう』。

このことがあつてから全九箇月足らずの後、即ち一九一八年十月三日に、私は全露中央執行委員會の會合で、プレスト・リトウスクでのキユールマンの挑戦の記憶を呼び起して言つた。『我々のうちの何人も、ドイツが現在恐るべき破局に遭遇してゐるといふ理由で、何等か意地の悪い悦びを感じるものはない。』而してこの破局の最大部分が、プレスト・リトウスクでの軍事上及び行政上のドイツの外交によつて準備されたものであることは、證據を引張つて來て説明する必要のないことだ。

我々が問題を正確に組立てれば、それだけキユールマンに對するホフマンの優位が加はつた。彼等にもはや彼等の間の矛盾を隠さなかつた——特に將軍の方がさうだつた。私が、彼の時々の攻撃の一つに答へて、心に何の隠すところなく、ドイツ政府といふ言葉を口にした時、ホフマンは忿怒でかすられた聲で私を遮り、『我輩はこゝではドイツ政府を代表してゐるのではない。ドイツ軍最高司令部を代表してゐるのだ。』と呶鳴つた。この聲は誰か石を投げつけてガラスを破つたやうに響いた。私は相手方のテーブルを眺めまはした。キユールマンの顔はすつかり歪んで、下を向きながら坐つてゐた。その場のツエルニンの表情は、當惑と、一種の意地の悪い歡びとの混淆であつた。私はそれに答へて、私はドイツ帝國の政府とその最司令部との間の相互關係を裁判する資格を與へられてゐるとは思はない、私はドイツ政府をのみ相手として商議する權能を與へられてゐるのだ、と言つた。キユ

ールマンは私の闡明をノートに取りながら、齒をきしらせて、それに同意の表情を洩した。

ドイツの外交と最高司令部との間の不一致はとても甚しいもので、誇大しようとしても困難だ。キールマンは、占領地帯は既に正式の國民的機關を通じて、ドイツに屬することに『自決』してゐると證明しようと努めてゐた。ところが一方ホフマンは、それらの地帯には權能を附與された機關といふものがないのであるから、ドイツ軍隊の撤退などは問題にならない、と説明した。かく議論は相互に對蹠的に異つてゐたが、實際の結論は同一であつたのだ。

これに關聯してキールマンは、最初は殆ど信じられさうもなかつた戰略を試みた。我々が提起した一聯の問題にたいして、文書をもつて答へ（フォン・ローゼンベルグによつて通告された。）ドイツ軍隊は西部戦線の戦争が終熄するまでは、占領地帯から撤退することは出来ない、と聲明した。私はこの聲明から、その軍隊は戦争の終熄後には撤退するものと結論し、その時日をもつと正確に示して欲しいと要求した。キールマンは非常に興奮してゐた。彼は明かに、彼の表式の催眠的效果を當てにしてゐたのだ。言葉をかへて云へば、言葉の遊戲——によつて、合併を虚飾しようとして欲してゐたのだ。これが失敗すると、彼はホフマンの口を通じて、ドイツ軍隊はその以前にもそれ以後にも、撤退するものではない、と説明した。

私は一月の末頃に、オーストリア・プロレタリアートの代表者と談合するため、ウイennaを訪問す

るの許可を、オーストリア政府から得ようと試みた——尤も私は、成功の望みはないと思つたが。オーストリア社會民主黨は、さういふ訪問の思ひつきにたいして、他の何者よりも甚しく飛び上つて驚いたやうだ。もちろん私の申出は、私にはさういふ協議をやる權能がないといふ、全く信すべからざる理由で、拒絶された。私は次の文章をもつてツエルニンに答へた。

『大臣閣下、本月二十六日附公使館參事官クザツキー伯の書簡は、本月二十日附の小生の電報にたいする貴下の回答と見做さるべきものであるが、その書簡の寫しをこゝに送達し、合せて貴下に通告する。即ちそこには、民主的媾和の實現に利するために、オーストリア・プロレタリアートの代表者と協議のためウイennaを訪問せんとする小生の申込みにたいして許可を與へることの拒絶が述べられてあるものと私は認める。私は次のことを記録せざるを得ない。この回答は、形式上の考慮の裏に、貴下がロシアの勞働者農民の政府の代表者と、オーストリア・プロレタリアートの代表者との間の個人的協議を許すことを欲してゐないといふ意嚮を隠してゐる。この書簡の中には、小生にはさういふ協議を行ふ全權的權能が缺けてゐると言及されてゐるが——それは形式上でも事實上でも是認出来ない言及である——これについて小生は、大臣閣下の注意を求めたい。小生の權能の範圍と性質を決定する權利は、小生の政府以外の何ものにも屬さぬものである。』

商議の最後の段階中では、キールマンの切札とツエルニンのそれとは、モスコウに敵意をもつて

ゐるキエフ・ラダの獨立行動であつた。そのラダの代表者達は、ケレンスキーズムのウクライナ變種であつて、その偉大なロシアの原型と異るところは、彼等がもつと地方的だといふ點だけであつたのだ。ラダのブレスト・リトウスク委員は、資本家外交家の何人かによつて鼻先をもつて引摺り廻されるより以外の他の運命を、本來の性質上、決して心に期してはゐなかつた。キユールマンもツエルニンも、横柄な侮蔑的な態度で、この仕事に従事した。ダラの民主的阿呆共は、ホーヘンツォールレンとハツプスブルグの二つの強力な商館が彼等を眞面目に取扱つてゐるといふ考へで有頂天になつて、恰も空中を歩いてゐるやうに感じた。ウクライナ委員の代表ゴルボウイツが、お定りの演説をやつたあとで、黒いフロックコートの長いスカートを丁寧に左右に分けて、彼の椅子についた時には、彼の内部に沸騰する無限の歡喜と感歎で、その場に蕩けてしまひやしないかと案じられた。

* ラダは、ウクライナのさまざまの公衆團體の代表者の大會で、二月革命の後に樹立されて、ウクライナ國民の代表機關だと自稱してゐた。ポリシエウイキによつて顛覆されて後に、ラダはドイツの占領に賛成し、そして一度ドイツの占領が實現されると、ラダ政府は解散させられ、スコラパズキ大將が、その國の唯一の支配とされた——英譯者。)

ツエルニンは、彼の日記に自身で記録してゐるやうに、ウクライナ人を誘つてソヴェット委員に反對させ、敵意をむき出しにした聲明をなさしめることに、實際成功したのだ。しかしウクライナ人

はやり過ぎた。二十五分の間、彼等の演説者は尊大の上へ野卑を積みかさね、さすがに綿密なドイツの通譯者さへまごつかせ、その通譯者はそんな音叉で全く彼の調子を合すことが出来なかつた。ハツブルグ家の伯爵はこの場の光景を描いて、私が困惑し、顔色蒼ざめ、痙攣をおこし、冷汗が私の顔に玉をなしたと言つてゐる。この誇張はどうでもいゝが、私はその光景が極めて悲惨であつたことは、これを承認しなければならぬ。だがその光景での悲惨なものは、ツエルニンが考へてゐるやうに、我々の同胞國民が外國人の面前で我々を侮蔑したことではなくて、とにかく革命の代表者たるものが、彼等を頭から輕蔑してゐるつまらぬ貴族の前で氣狂のやうに自己を卑下したことなのだ。歡びで息づまりさうな誇大な野卑と卑屈が、このみぢめな國民的民主主義者——ほんの一瞬間權力に手を觸れた——の舌から、泉のやうに流れ出た。キユールマン、ツエルニン、ホフマン及びその他は、勝馬に賭金をかけた競馬の賭博者のやうに、重い息をついた。ウクライナ委員は、恰も激勵をもとめるやうに、一言々々、彼のパトロンの方を見やつて、彼のノートからありとあらゆる悪口雜言を積み上げた——これは委員達が四十八時間かゝつて共同でこしらへ上げたものだ。それは私が曾つて目撃した最も卑しい光景の一つであつたことは、否定することが出来ない。しかし侮辱と、悪意で、こつてゐる流し眼のもとにあつてすら、私は一瞬と雖も疑ひはしなかつた——この夢中になつてゐるおべつか使ひ共は、やがて彼等の勝誇れる主人共によつて戸の外へ投げ出されるであらう、またその次に

はその主人共は、數世紀の間擁してゐたその地位から、やがて追ひ出されなければならぬ、といふことだ。

その時、ソヴィエツト革命軍隊は勝利をおさめつゝウクライナに進軍し、その道を戦ひとりながらドニエーブルにいたらうとしてゐた。問題が頂點に達し、ウクライナ委員がキエールマン及びツエルニンとウクライナ買却の取引をつける丁度その日に、ソヴィエツト軍隊はキエフを占領した。ラデツクが直通電話でウクライナ首府の形勢を訊ねた時、ドイツの電話技師は、彼の話し掛けてゐる人物を他の誰かと間違へて、『キエフは死んだ』と報知した。三月七日に私はレーニンから來た電報について、中央強國の委員の注意を求めた。その電報は、ソヴィエツト軍隊が一月二十九日にキエフを占領したこと、ラダの政府は、今や人影なく、すでに姿を隠してゐること、ウクライナ・ソヴィエツトの中央執行委員會はその國の主權を宣告し、キエフを主權の所在地としたこと、ウクライナ政府は内政及び外交においてロシアと完全に一致し、後者との聯邦的關係を可決したことを報じてゐた。翌朝、私はキエールマン及びツエルニンに向つて、彼等が相手にしてゐる委員は、その全領土がプレスト・リトウスクだけになつてしまつた政府の委員だと言つた。(條約でこの町は再びウクライナのものにするこゝとなつてゐた。)しかしドイツ政府、寧ろドイツ最高司令部はすでにその時まで、ドイツの軍隊をもつてウクライナを占領することに定めてゐたのだ。中央強國の外交は單に彼等のために占領の許

可を與へる旅行免狀を書き上げるにあつた。ルーデンドルフはホーヘンツォーレルンの軍隊の最後の苦悶を準備するために、素晴らしい仕事をした。

當時、ドイツの或る牢獄に、社會民主黨の政治家が發狂的なユートピア思想を抱いてゐるものとして求刑し、ホーヘンツォーレルンの裁判官が國事犯として宣告した一人の人間が監禁されてゐた。その囚人は書いた。『プレスト・リトウスクの結果は、強制的降伏の媾和とはなつたが、しかしそれは無駄ではなかつた。ロシア委員のお蔭で、プレスト・リトウスクは一つの革命的演壇となり、そこから發せられる布告は遠く、廣く行き互つた。それは中央強國の正體を暴露し、ドイツの貪慾と、狡猾な嘘と、偽善とを暴露した。それはドイツの多數派(社會民主黨)の媾和政策——敬虔な偽善の政策であるよりも寧ろ狡猾な外交策だ——にたいして、絶滅的の判決を下した。それは諸國に多くの大衆運動を呼び起すに足るほど、十分に有力であることを證明した。而してその悲劇的な最後の幕——革命にたいする干渉——は、社會主義の體軀の全神經を震撼せしめた。だが、かうして蒔かれた種から、現在の勝利者にとつてどんな作物が實つて來るか、時が示すであらう。彼等はその收穫で喜ばされはしないであらう。』

*カール・リープクネヒトの『遺稿中の政治的文章』一九二一年アクション發行。五一頁。

第七章 媾和

その秋の終るまで絶えず、戦線から毎日のやうにペトログラード・ソヴイェットへ委員がやつて来て、十一月一日までに媾和が締結されなければ、兵隊は自身で塹壕から出て来て、彼等のやり方で媾和を締結すると告げた。これが戦線でのスローガンとなつた。兵士達は小群をなして塹壕を去つた。十月革命は一時それを喰ひ止めたが、それも長くはなかつた。

二月革命のおかげで、兵士達は、彼等はラスプーチン一味によつて支配されてゐたので、その一味が彼等を極悪の、無駄な戦争に引きずり込んだのだといふことを發見した。彼等は、ケレンスキーといふ若い辯護士によつて、戦争を繼續せよと求められたからと云つて、それをすべき何等の理由も見出さなかつた。彼等は、自分の家へ、家族のもとへ、土地へ歸りたかつた。そしてその革命は、彼等に土地と自由を與へる約束はしたが、然しそれだけで、結局、彼等を戦線の冷い、蟲のわき立つ地穴にとめておく以外のことは何もしなかつたのだ。ケレンスキーは兵士、労働者及び農民を非難し、彼等を『反抗する奴隷』と呼んだ。彼は一つの小さなこと——革命は正にこのものから、即ち奴隷たることに反抗し、それを拒絶する奴隷から成つてゐるといふこと——を理解出来なかつたのだ。ケレ

ンスキーのパトロンで、背後の力だつたブカナンは、不用意にも彼の回顧録のなかで、戦争と革命とは彼及び彼の同類にとつて何を意味したかを我々に語つてゐる。十月革命の數箇月後、ブカナンは一九一六年のロシアについて次のやうに書いた——その年は、ツア一の軍隊が敗北し、經濟生活が破壊された恐るべき年、ラスプーチンの司令の下に、蛙のやうにビョ／＼頭を下げた政府を持ち、飢餓線をかまよつた年であつた。『我々の訪問した多くの美しい別邸の一つで、(ブカナンは一九一六年に彼のクリミア行の小旅行の時のことを語つてゐるのだ。)我々は銀の皿にパンと鹽を提供されたばかりでなく、辭し去る時に、我々の自動車にはブルガンデイの古葡萄酒一打の入つた箱が見出された。實は午餐の時にこれを飲んで、私がそれを讚めちぎつたのである。かういふ幸福な過ぎ去つた日(！)を振り返つて見、さういふ親切と歡待を示してくれた人々がどんなに悲惨な、不幸な境遇に落ち込んだかを考へるのは、實に悲しいことであつた。』

ブカナンは塹壕にある兵士の苦痛や、飢餓線にある飢ゑた母達のことには言ひ及ばず、クリミアのうつくしい別邸の所有者、銀の食器とブルガンデイの所有者の不幸を述べてゐるのだ。この幸福な、恥知らずの文章を読めば、たゞかうしか言へない——十月革命は無駄ではなかつた。この革命がロマノフ家ばかりでなく、ブカナンやケレンスキーも同様に一掃してしまつたのは、無駄ではなかつたのだと。

ブレスト・リトウスクへ赴く途中で、初めて私が戦線を通じた時、塹壕にある我々の同感者は、ドイツの奇怪な要求にたいする抗議を有力に動員することは出来なかつた。といふのは塹壕は殆ど空になつてゐたからだ。ブカナンとケレンスキーの實驗の後、誰一人として、條件附ですら、戦争の繼續を敢て口にするものが無かつた。平和、平和、どんな犠牲を拂つても！その後、ブレスト・リトウスクからモスコウへの歸還の途中、私は、戦線から中央執行委員会へ赴く代表者の一人を説得して、獐猛な演説をさせて、わが媾和委員に少しばかり援助を與へさせようと努めた。すると彼は答へた。『駄目です。絶対に駄目です。我々は塹壕に歸することは出来ないでせう。彼等は我々を理解しようとしないうでせう。そして、我々もケレンスキーがやつたと同じに、彼等を欺きつゞけてゐるのだと言ふことせう。』

戦争繼續の不可能なことは、明白であつた。この點については、レーニンと私との間には意見の不一致の影すらなかつたのだ。我々は二人とも、ブハーリンその他の『革命戦争』の使徒に當惑してゐた。しかしそれと同様重要な、他の問題があつた。ホーエンツォーレルン政府は、我々にたいする闘争をどこまで進めることが出来るか？ ツエルニンは彼の友人の一人に、もし彼等に十分にその力があるなら、ポリシエヴィキと商議などはしないで、そこに秩序を樹立するためにペトログラードに向けて、彼等の軍隊を送る方がよい、と書いた。こゝには確かに、悪意がなくはなかつた。だが、その

力が十分にあるか？ ホーエンツォーレルンは、平和を欲する革命家を向ふに廻して、彼の軍隊を派遣することが出来るか？ 二月革命と、その後十月革命とは、どれだけドイツ軍隊に影響をあたへたか？ どれだけ経てば何等かの結果が現れるだらうか？ これらの問題については、まだ何等の回答も與へることは出来なかつたのだ。我々は、商議の過程で、これを發見するやうに努力しなければならなかつた。したがつて我々は、出来るだけ長く、商議を引伸ばさざるを得なかつたのだ。ヨーロツパの労働者にたいして、ソヴィエツト革命の媾和政策を始め、その革命の當の事實を正しく呑込む時間を與へることが、必要であつた。而も、聯合國の新聞紙は、ロシアの『妥協』派新聞及びブルジョア新聞同様に、逸早くこの平和商議を描いて、巧妙に役割を配置した喜劇だとしてゐたから、そのことは更になほ一層重要だつたのだ。

ドイツにあつてすら、その時代の社會民主黨反對派——彼等は我々によつて照し出された彼等自身の黨の弱さを見ることが出来た——の間に、ポリシエヴィキはドイツ政府と手を携へてやつてゐるのだといふ意見が行はれてゐた。そんなわけでこの意見は、フランスやイギリスでは、更に一層信すべきものとされてゐたに相違ない。聯合國のブルジョアジーや社會民主黨が、労働者大衆の間に我々についての誤つた觀念を傳播することに成功すれば、聯合國の將來の軍事的干渉が一層容易になることは、明かであつた。そこで私は、單獨媾和——もしそれが絶対に避くべからざるものであれば——に

調印する前に、我々は如何なる犠牲を拂つても、ヨーロッパの労働者にたいして、我々とドイツの支配階級との間に存在する恐るべき敵對關係についての目ざましい、争ふべからざる實證を與へなければならぬ、と主張した。ブレスト・リトウスクで一つの政治的デモンストレーションを行ひ、『我々は戦争を止める、我々は軍隊を復員する、だが、我々は媾和に調印しない。』といふスローガンを掲げるといふ觀念が私の念頭に浮んだのは、その考慮からであつたのだ。もしドイツの帝國主義が我々に向けて軍隊を送ることが出来ないことを自ら知るならば——と私は推論した——それは、我々が遠大な効果をもつ素晴らしい勝利を贏ち得たことを意味するだらう。しかも若し、まだホーヘンツォーレルンに我々を打つに足る力があるならば、我々はいつでも手つ取り早く降服することが出来るであらう。私は媾和委員の他の人々、わけてもカメネフに相談し、彼等が私に同感してゐるのを知つて、そのことをレーニンに書き送つた。彼の返辭は、『君がモスコウへ來た時に、それを熟議しよう。』といふのであつた。

レーニンは私の意見に答へた。『もし實際に、ホフマンが我々に向けて軍隊を派遣するに足るほど強くないやうなことがあるとすれば、君の意見以上によい意見は他に求められないだらう。だが、そんなことは殆どありさうでない。彼は、その目的のために、富裕なバヴァリアの農民から成る特に選抜した軍隊を見出すであらう。その場合、彼の必要とするのは、果してどれだけの兵隊か？ 君は、

我々の方の塹壕は空だと、君自身で言つてゐる。ドイツ人が戦争を再開したら、どうなるか？』

『その時には我々は、媾和に調印するより外はないだらう、しかし我々には他の道がないのだといふことを、凡ての人が理解するだらう。獨りこの行爲によつてのみ、我々は、ホーヘンツォーレルン一黨と我々との秘密關係についてのお伽噺に、決定的の打撃を加へることが出来るだらう。』

『勿論、それにも或る利益はある。しかしそれは餘りに危険が多い。もし我々にとつて、ドイツ革命の成功を保證するために自らを犠牲にする必要があるとすれば、我々はそれをしなければならぬだらう。ドイツ革命は、我々の革命よりも遙かに重要である。しかしそれは何時來るだらうか？ 誰も知らない。そこで現在の瞬間には、我々の革命ほど重要なものは、何も無い。我々の革命は、どんな犠牲を支拂つても、これを危険から防衛しなければならぬ。』

問題のこの困難は、黨内事情によつて更に擴大された。黨の内部、尠くともその指導要素にみなぎつてゐた態度は、ブレスト・リトウスクの媾和條件に署名することにたいする徹底的敵意の態度であつた。我々の新聞紙に發表された商議の速記録は、この氣分を強め、それは、革命戦争のスローガンを掲げてゐた『左翼』コミュニニスト・グループの中に、最も尖鋭な表現を見出してゐた。

内部闘争は日に日に激しくなつて行つた。後に流布された物語とは反對に、その闘争はレーニンと私との間に在つたのではなく、レーニンと、黨の重要團體の壓倒的多數との間に在つたのだ。我々は當

時革命戦争を行ふべき地位にあつたかどうか？ また革命勢力にとつて、帝國主義者との協定に調印することが、一般に許さるべきことであるかどうか？——かういふ重要な問題においては、私は一點の隠すところなくレーニンと意見が一致し、彼と同じに、第一の問題には否定的に、第二の問題には肯定的に答へた。

大勢の聴衆の面前で意見の相違についての最初の討議の行はれたのは、一月二十一日、積極的な黨労働者の會合においてであつた。三つの見解がその時、前面に持ち出された。レーニンは、我々は商議を引伸ばすやうに努めなければならぬ、而して最後通牒があつた場合には、即刻降服すべきであると主張した。私は、新たなドイツの進軍をうける危険を冒してもなほ、商議を破壊する必要があると考へ、かくてドイツが武力を用ふることが明白になつた場合に、我々は降服——もしそれが必要なら——することが出来る、と主張した。ブハーリンは革命の地域を擴張するために、戦争を要求した。レーニンは、私の提議にはちよつと批評を加へたゞけだつたが、革命戦争の賛成者にはその會合で、痛烈に闘争した。革命戦争の支持者は三十二票を得、レーニンが十五票、私が十六票を得た。然してこの會合の場合よりもつと強かつた。私の表式に一時勝利を保護したのは、この事實があつたからだ。ブハーリンの意見に賛成の人々は、私の提議を彼等自身の方向への一歩前進だと見做したのだ。

他方レーニンは、最後の決定の延期は彼の實際上の勝利を自ら齎すと信じた、そしてそれが正しかつたのだ。

この時我々自身の黨が、西ヨーロッパの労働者の場合に劣らず、實狀の何たるかについての何等か目に見えてのデモンストレーションを大いに必要としてゐた。黨のすべての指導機關において、レーニンは少數派であつた。二百以上の地方ソヴェットが、人民委員ソヴェットの申出でに答へて、戦争と媾和についての彼等の見解を述べた。その全部のうちで、たつた二つの大きなソヴェット——ベトログラードとセバストポール（後者は保留附で）が、媾和に賛成するものとして、記録されたに過ぎなかつた。他方、モスコウ、エカテリンブルグ、カールコフ、エカテリノスラウ、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク、クロンスタット等のやうな、大きな労働者の中心地の多くは、壓倒的多數でもつて、商議破壊に賛成の投票をしたのだ。おなじ態度は、我々の黨の組織の間に、及びもちろん左翼社會革命黨の間にみなぎつた。レーニンの見解を實行しようとすれば、それは黨の分裂とクー・デターによつて出来ることで、他に方法はなかつた。だが、一日々々とレーニンの賛成者がふえて行かざるを得なかつた。かゝる事情にあつて、『戦争もせず、媾和もせず』といふ表式は、実際にはレーニンの立場への橋梁として役立つた。黨の大多數、又は尠くともその指導分子の大多數は、その橋梁を渡つて來たのだ。

『よろしい、それなら、我々が實際、媾和に調印することを拒絶し、ドイツがそれに答へて進出したと假定しよう。その時、君は何をしようとするのかね?』とレーニンは私に質問した。

『我々は劔戟の下で、媾和に調印する。その時には全世界に形勢が明瞭となるだらう。』

『だがさうなつた場合、君は革命戦争のスローガンを支持しようとしないか、どうかね?』

『どんな場合でも、そんなことはない。』

『その場合、その實驗はおそらく大して危険ではないだらう。我々はエストニアからラトヴィヤを失ふ危険を冒すに過ぎないだらう。』かう云つた後で、盗み笑ひをして、レーニンは附け加へた。『トロツキイと甘く媾和するためには、ラトヴィヤとエストニアを失ふ値打がある。』 數日の間、これが彼の好んだお定り文句である。

中央委員會が私の提案、即ち商議を長引かせ、ドイツが最後通牒を送つて來た場合には、結局戦争を宣言するが、媾和に調印することを拒絶し、その後は事情の必要に應じて行動するといふ提案を採用したのは、一月二十二日のこの決定的な會合の席上であつた。一月二十五日の夜遅く、ポリシエヴィキの中央委員會と、『左翼』社會革命黨(當時の我々の同盟者)の中央執行委員會との共同會議が開かれ、その同じ表式が壓倒的多数をもつて可決された。それから當時我々が屢々やつてゐたやうに、我々は、兩委員會のこの決定は、人民委員ソヴィエットの決議たる資格があると宣言した。

一月三十一日、私はプレスト・リトウスクから直通電線で、スモルニー館にあるレーニンに打電した。

『ドイツの新聞紙に到着する無数の風説及び報道の間に、我々が媾和條約の調印を拒絶しようとしてゐるのは、デモンストレーションのためだとか、この問題についてポリシエヴィキの間に意見の不一致があるとか等々のくだらない言説が現れてゐる。私は、ストックホルムから發せられ、その出據として「ポリチーケン」紙が擧げられてゐる、この種の一つの電報の事を言つてゐるのである。もし私に誤りがなければ、「ポリチーケン」はヘーグルンドの機關である。この種の報道が實際新聞に現れた場合、彼の編輯者が何故さういふくだらないナンセンスを公にするのか、それを彼に訊ねてもらへまいか? ブルジョア新聞はあらゆる種類の惡意的なゴシップで一杯であるから、ドイツ人はこの報道を大して重要視してはゐないやうである。しかしこの場合には、その出據が左翼の新聞で、その編輯者の一人はペトログラードにゐるのである。この事實はこの報道にある程度の權威を與へ、それはそれだけで我々の反對派の心を混亂させることが出来るのである。』

『オーストリア及びドイツの新聞は、ペトログラード、モスコウ及び全ロシアを通じての恐怖の報道、無数の死者が出てゐるとか、機關砲が鳴りはためてゐるとか等々の報道で一杯になつてゐる。この

際冷静敏活な人間を任命して、毎日國情についての報道を發せしめ、ペトログラード電報局及びラヂオを通じて、それを公にせしめることは絶対に必要である。もし同志ジノヴィエフがこれを自分で引受けてくれれば、まことにいいことである。それはこの上なく重要なことで、その報道は第一にウオロウスキイ及びリトヴィノフに送る必要があるが、これはチチエリンを通じて爲され得ようと思ふ。

『我々はこれまで一回の正式な會合を開いただけである。ドイツ人は商議を引延してゐるが、それは彼等の内部の危機によるものらしい。ドイツの新聞紙は、我々は實際には講和を欲してゐないのだ、たとへ他の諸國に革命を擴げたいとあせつてゐるのだ、と叫び始めた。この驢馬共は、出来るだけ早く講和することが我々にとつて極めて重要なのは、我々が更にヨーロッパの革命を欲してゐるからに過ぎないといふことを理解出来ないのである。』

『ルーマニア大使を追放するために、何等かの手段が講ぜられたか？、ルーマニアの皇帝はオーストリアに在ると、私は信じてゐる。ドイツの一新聞紙に現れた報道によると、我々がモスコウに保管してゐるのは、ルーマニア國民資金ではなく、ルーマニア國民銀行の準備金であるとのことである。ドイツ官邊の同情は、もちろん全然ルーマニアにそゝがれてゐる。』

汝のトロツキイ

この覺書はほとんど説明を要しない。ブレスト・リトウスクからの電報は、盗み聽きをされたり、盗みとられたりする心配はないものとされてゐた。だが我々には、ブレスト・リトウスクにあるドイツ人は直通線による我々の通信を讀んでゐると信すべきあらゆる理由があつた。我々は彼等の技術上の豊富な工夫に十分敬意を拂つてゐたので、これを信じたのだ。我々にとつては我々の通報の全部を暗號にすることは不可能だつたし、それに我々は暗號にしたところで、十分に防衛になるとは考へなかつた。同時に、『ポリチケン』紙は、同紙の勝手氣儘な、だが據り所のある報道を發してゐて、我々に何等奉仕するところがなかつた。こんなわけで私のこの電報は、我々の決定の祕密が外國で洩されてゐるといふことをレーニンに警告するよりも、寧ろドイツ人に一杯喰はすために書かれたのだ。私が新聞記者のことを指して、『驢馬共』などいふ非常に無禮な言葉をつかつたのは、この通報をまつたく『自然なもの』に讀ませようとするために過ぎなかつたのだ。私のこの戦略がどの程度までキュールマンを欺くことに成功したか、それは分らない。とにかく二月十日の私の宣言は、我々の反對側へ何等か全然豫期しなかつたものゝやうな印象を與へた。ツエルニンの日記の二月十一日のところにはかう書いてある。『トロツキイは調印を拒絶してゐる。戦争は終つた、だが講和はない。』

然るに、一九二四年に、スターリン及びジノヴィエフ一派が、この事柄を托けて、ブレスト・リトウスクで我が黨及び政府の決定に反して行動したかのやうな觀を與へようと企んだことは、殆ど信す

ることが出来ない。この嘘つき共は、舊い速記録を調べ、彼等自身の言説を読み直す手数さへとらなかつたのだ。私がブレスト・リトウスクでその宣言を發した翌日、即ち二月十一日に、ジノヴィエフはペトログラード・ソヴィエツトで演説し、『我々の委員は、現在の難局からの唯一の正しい出路を見出した。』と斷言した。而も一名對全員——メンシユヴィキと社會革命黨員は棄權した——の大多數で採用された、媾和條約調印の拒絶を是認した決議を提出したものは、ジノヴィエフだつたのだ。

二月十四日、私が中央執行委員會へ報告した後で、スヴェルドロフはボリシエヴィキ分派を代表して、決議を提出した。その決議は、『中央執行委員會は、媾和委員の報告を聴取し、十分考慮を加へた上、ブレスト・リトウスクにおけるその代表者の行動を飽まで是認するものである。』といふ言葉で始まつてゐた。どの一つの黨派も、どの一つのソヴィエツト地方團體も、二月十一日と十五日の間のソヴィエツト委員の行動について、是認を表明しないものはなかつた。一九一八年三月の黨大會でジノヴィエフは、『トロツキイが中央執行委員會の大多數の決定にしたがつて行動したと言つてゐるのは正しい。何人もそれを拒まうとはしない。』と宣言した。最後にレーニン自身が、その大會に報告し、『中央委員會で……媾和に調印しないといふ決議が可決された。』と云つた。これら凡てのこと、ブレスト・リトウスクで媾和に調印を拒絶した責任者はトロツキイ一人だといふ新しい獨斷説をコンミュニスト・インターナショナルのうちに打ち樹てることを妨げはしなかつたのだ。

ドイツ及びオーストリアでの十月ストライキの後、ドイツ政府が攻撃に決定するかどうかの問題は今日事後において、多くの『聰明な』人物によつて説明されてゐるやうには、當時我々にとつてもドイツ政府にとつても、それほど明瞭ではなかつたのだ。二月十日、ブレスト・リトウスクのドイツ及びオーストリア・ハンガリーの委員は、『トロツキイの宣言に提議されてゐる形勢は、これを承認しなければならぬ』といふ結論に到達した。それに反對したのはホフマン將軍だけであつた。ツエルニンによると、翌日の彼等の最終會議において、キユールマンは『事實上』の媾和を承認するの必要を、確信をこめて説いたとのことだ。この反響は直ちに我々のところへ到着した。我が委員の全部は、ドイツは攻撃を開始しないだらうとの印象を興へられて、モスコウへ歸つた。レーニンはこの結果を非常によろこんでゐた。

『だが我々を欺くんぢやないだらうね?』と彼はなほさう問うてゐた。

我々は肩を聳かした。どう見たつてさうは見えなかつたのだ。

『うむ、もしさうなら、まったく結構なことだ。』とレーニンは言つた。『體面は保たれ、且つ戦争は終つた。』

だが、ドイツがその終りまでに回答する事になつてゐた週間の過ぎる二日前に、ブレスト・リトウスクに居残つてゐたサモノロ大將からの電報は、ドイツはホフマン將軍を通じて、二月十八日の夜十

二時からロシアと戦争状態にあるものと思惟すと聲明し、その理由で同大將にブレスト・リトウスクを退去せんことを求めたと、我々に報じて來た。レーニンが最初にその電報を手にした。その時私は彼の部屋にゐて、そこでは左翼社會革命黨との協議が開かれてゐた。レーニンは一言も言はないで、その電報を私に手交した。彼の顔色からすぐに私は、何か持上つたなと知つた。彼は社會革命黨の人人との協議を早く打切らうといそいでゐた。さうして彼等が立去つたすぐ後で、この状態を討議しようとしてゐた。

『結局、彼等は我々を欺いた。……五日間儲けたわけだ。……この野獸共はどんなものだつて逃さない。もうかうなつたら、以前の媾和條件に調印するより以外に、とる方法は他にない。たゞドイツが少しも變更しないで以前の媾和條件に同意するといふ條件でだ。』

私は、これまで通り、ホフマンに實際に攻撃を開始させてよい、さうすればドイツの労働者及び聯合國の労働者は攻撃を一つの威嚇としてとなく、一箇の事實として知るだらう、と主張した。

『否』とレーニンは答へた。『我々はいまは一時間たりとも失ふことを許されない。試験は終つたのだ。ホフマンは戦闘しようとしてゐるし、またそれが出来る。この野獸はすばやく跳びかゝつて來る。』

三月に黨大會の席上で、レーニンは言つた。『ドイツが最後通牒を發するまでは我々は屈しない、

しかし最後通牒があつて後は、我々は降服すべきであるといふことが、我々（即ちレーニンと私）の間に約束された。』私は曩にその意見の一致のことを描いた。レーニンは黨においては私の見解を攻撃しないといふことを承諾した、といふのは、私が彼に、革命戦争の賛成者を支持しないと約束したからに他ならないのだ。その（革命戦争派——譯者）のグループの公然の代表者——ウリツキー、ラデツク、それからオツシンスキーもゐたと信するが、その人々が私のところへやつて來て、『單獨戦線』の提議をした。私は、彼等と私の提議には共通な何ものもないことを、彼等に十分にはつきりさせた。ドイツの最高司令部が休戦廢棄の覺書を與へた時に、レーニンは私に我々の約束を想ひ起させた。私は、最後通牒といふことをもつて單に言葉の上の聲明と解したのではなく、實際のドイツの攻撃といふ意味に解したのであつて、その攻撃がやつて來た場合、それは兩國の實際の關係に何等疑問を残さないであらう、と答へた。

二月十七日の中央委員會の會議で、レーニンは準備的質問を投じて、投票に問うた。それは、『ドイツの攻撃が事實となり、ドイツに何等革命的隆起が起らないとしても、我々はなほ媾和に調印すべきであるか？』との質問であつた。ブハーリンと彼の追隨者は、この基本的な質問に答ふるに棄權をもつてした。クレステンスキーも同様に行動した。ヨツフェは媾和に反對の投票をした。レーニンと私はそれに賛成の投票をした。翌日、私は、我々に媾和に調印する準備があると聲明した電報を即時

に送附するといふレーニンの提議にたいして、反対の投票をした。だが、その日の間に、電報の報道は、ドイツは攻撃を開始し、我々の軍需品を擱取し、ドゥンスクへ向けて進軍中だ、と我々に報じて来た。その夕方、私はレーニンの電報に賛成の投票をした。いまやドイツの攻撃が全世界に報ぜられるであらうことは、何等疑ひを残し得なかつたからだ。

二月二十一日に、我々はドイツから新たな媾和条件を受取つた。それは、明かに、媾和調印を不可能にしようとの明白な目的をもつて構へられたものだ。この時までには我々の委員はプレスト・リトウスクへ歸つた。その条件は一般によく知られてゐるやうに、以前よりも苛酷にすらされてゐた。レーニンを始め、我々凡ては、ドイツはソヴィエツトを紛碎するについて聯合國と協定をとげるに相違ない、而して西部戦線の平和はロシア革命の亡骸の上に築かれるに相違ないといふ印象を抱いてゐた。もしこれが本流なら、我々がどんなに譲歩したつて、何の役にもたゝないのは明白であつた。フィンランド及びウクライナでの發展は、戦争にとつてひどく有利な形勢となつた。刻々、我々にとつて不利な何ものかと齎らされた。ドイツ軍のフィンランド上陸の報道、フィンランド労働者の潰走の報道が我々に達した。私は彼の部屋に近い廊下で、レーニンと會つた。彼は恐しく興奮してゐた。曾つて私はこんな彼を見たことはなかつたし、その後再びさういふ彼を見たことはない。

『さうだ、我々は、執つて戦ふ可き何物も持つてゐないが、戦はなければならぬだらう。』と彼は言

つた。『それ以外に、出路があるとは思へない。』

しかし十分か十五分間の後、私が彼の部屋を訪問した時、彼は言つた。『否、我々是我々の政策を變更すべきではない。我々の側からの軍事的行動は、フィンランドの革命を救ふことは出来ないであらう。しかもそれは確かに、我々を滅すに相違ない。我々は、我々に出来るあらゆる方法で、フィンランドの労働者を助けはするが、しかし我々は、媾和を抛棄することなしに、それをしなければならぬ。これが現在、我々を救ふかどうか、それは確かではない。しかしとにかく、いまなほ救ひの可能な道はこれしかないのだ。』

私は、完全に降服するといふ犠牲をもつてしても、なほかつ媾和を保證することが出来るかどうかそれについて非常に懐疑的であつた。しかしレーニンは極力、降服の觀念を試みようかと決意した。彼は中央委員會で多數を制して居らず、決定は私の投票に掛つてゐた以上、私は、一票の多數を彼に保證すべき投票から棄權した。私は、棄權の理由を説明する時に、力を籠めて明白にそれを説明した。もし降服してもなほ我々にとつて媾和が獲得されないやうな事になつた場合には、我々は、我々の黨戦線を伸張して、敵によつて我々に押しつけられた革命の武裝的防禦に就くであらう、と私は説明した。

私は個人的にレーニンに語つた。『私は、外務人民委員の職を辭した方が、政治的に賢いやうに思

ふね。』と。

『何のために？ 我々は、そんな議會主義者的な方法をとりたいくないものだ。』

『しかし僕の辭職は、ドイツ人にとつては、我々の政策の急激な變更を意味し、且つこんどこそは我々に實際、媾和條約に調印する意志のあることを、彼等に確信せしめるに役立つだらう。』

レーニンは考へた末に答へた。『それには考ふべきものがある。それは眞摯な政治的推理だ。』

二月二十二日、中央委員會の會議で、私は、フランス軍事使節が、もしドイツと戦争する場合我々を助け度いといふフランス及びイギリスの提議を通牒して來たことを報告した。私は、もちろん外交政策においては我々は飽まで獨立であるといふことを條件として、この提議の受諾に賛成であると述べた。ブハーリンは、帝國主義者と何等かの協調に立入るのは、我々にとつて許すべからざることだと主張した。レーニンは勇敢に私を援助し、中央委員會は五對六票をもつて、私の決議を可決した。私のいま想起し得る限りでは、レーニンは次の言葉で、その決議を口授したやうに覺えてゐる。『同志トロツキイに、ドイツの山賊共に反對するフランス帝國主義の山賊共の援助を受諾する權能を與へること。』彼はいつも、疑問を残す餘地のない表式を選んだ。

私はその會議から出て來た後、ブハーリンはスモルニ館の長い廊下で私をつかまへ、私に兩腕をなげかけて、歎息し始めた。『何といふことを我々はしてゐるのだ。我々は黨を糞塚にしようとして

ゐるのだ。』と彼は叫んだ。ブハーリンはいつも涙を用意してをり、切實な表情を好んだ。しかしこの時には、形勢は眞に悲劇的となつてゐた。革命は、ハンマーと鐵床の間に挟まれてゐたのだ。

三月三日、我が委員は、讀むことすらしないで、媾和條件に調印した。クレマンソーの觀念の多くに先廻りして、プレスト・リトウスク媾和は、絞刑吏の絞繩のやうなものであつた。三月二十二日に同條件はドイツの國會によつて批准された。ドイツ社會民主黨はまへもつて、未來のヴェルサイユ條約の原理に是認を與へたわけだ。獨立社會民主黨はそれに反對の投票をした。彼等はこの時、實際上彼等の出發點へつれ歸つた無駄なカーブを描き初めてゐたのだ。

黨の第七回大會（一九一八年三月）にこれまで踏まれて來た道を論評して、私は私の立場を十分に詳細に、明白に記述した。我々は實際、最も有利な媾和を獲得することを欲してゐたならば、我々は早くすでに前年十一月にそれに同意してゐたであらう。しかし何人も（ジノヴィエフを除いて）聲を發してそれをなすものはなかつたのだ。我々は誰も彼も、ドイツ、オーストリア・ハンガリー、及びヨーロッパ全般の勞働階級を煽動し、革命化することに賛成してゐた。だが、これまでのドイツ人と我々の一切の商議は、それが誠實に受取られた限りにのみ、革命的意義をもつてゐた。私はすでにソヴィエツト全露大會のポリシエヴィキ分派に報告し、前オーストリア大臣グラツツが、ドイツ人は唯我々に最後通牒を發する若干の口實を必要としてゐるのだと言つたことを傳へた。彼等は、

我々は我々自身で最後通牒を招きよせてゐるのだ、我々は『何ものか』に調印しなければならぬことを前以つて理解してゐるのだ、そして我々はまさに革命的喜劇を演じてゐるのだ、と信じてゐたのだ。

私は言つた。『これらの事情の下で、もし我々が媾和に調印することを拒絶したならば、我々は必ずやレヴアル及びその他の地域を失ふことで、威嚇されたであらう。同時に他方、我々が餘りに取急いで調印したらば、我々は必ずや世界のプロレタリアート、尠くともその大部分の同情を失ふの危険を冒したであらう。私は、ドイツ人は進出しさうには思はれないが、もし進出した場合には、我々はたとひそれが一層苛酷な条件を含んでゐたとしても、いつでも媾和に調印する時を持つてあらう、と考へた人々の一人であつた。相當の時が経てば、どんな人でもそこには他の出路がなかつたことを信するやうになるだらう。』

その時リープクネヒトが獄中から書き送つたことは、素晴らしいものである。『問題の現在の解決はプレスト・リトウスクの降服が二月の初めに行はれたものとして、その場合ほど未來の革命の發展にとつて有利ではないとは、どんな意味でも云ふことは出来ない。まつたくその反対だ。そのやうな降服(二月初めの降服——譯者)は、それ以前の一切の反抗にたいして最惡の光りを投じたであらうし、それに次ぐ暴力への服従に、「報恩的性質」を帯びたものゝやうな外觀を與へたであらう。天に叫ぶ狡猾、窮極のドイツの行動の野蠻な性質は、一切の疑惑を背後へ追ひやつてしまつた。』

リープクネヒトは戰爭中に、眞に驚く可く生長した。彼は、彼自身とハーゼの誠實な無性格との間に、深淵を劃すべきことを學び知つた。リープクネヒトが無限の勇氣をもつた革命家であつたことは云ふだけ野暮だ。しかし彼はいま始めて、彼自身を戰略家にまで發展させつゝあつたのだ。このことは彼の個人生活の諸問題、ならびに革命政策の問題に表れた。個人的安全の考慮は、彼には絶対に縁のない事柄であつた。彼が逮捕されてのち、多くの友達は彼の自己犠牲的『向ふ見ず』に頭を振つた。レーニンは、彼とは反対に、いつも指導者の安全について、非常に注意を拂つてゐた。彼は參議本部の首脳であつた、そしていつも、戰爭の間には彼は最高司令の機能を確保しなければならぬといふことを知つてゐたのだ。リープクネヒトは、自己の軍隊を導いて戰鬪に赴く將軍に似てゐた。

この理由、ならびに他の諸々の理由のために、彼にはプレスト・リトウスクでの我々の戰略を理解する事が出来なかつた。最初彼は、單純に運命に挑戦し、進んでそれと戦ふやうにと我々に求めた。その時代彼は、この基礎的な問題におけるレーニンの立場と私のそれとを何等區別せず——全く理由のあることだが——『レーニン・トロツキイの政策』を繰返し非難してゐた。しかしその後、彼は別箇の光りでプレスト・リトウスクの政策を眺め初めた。五月の初旬に彼は書いた。『ロシア・ソヴイエットにとつては、何ものにも優つて只一つのことが必要である——それは確かに、示威や紛飾でなく、強固な、酷烈な權力である。このためには彼等には、聰明と、時間と、及びエネルギーとが必要

である。即ち、彼等が、最も聰明なエネルギーにとつてすら必要な時間を獲得するための、聰明さである。』これは、レーニンのブレスト・リトウスク政策の正しさを完全に承認したもので、その政策は徹頭徹尾、時間を得ることに向けられてゐたのだ。

眞理はその道を拓くが、ナンセンスも同様に頑強だ。アメリカのフイツシャー教授は、ソヴィエツト・ロシアの初期を描いた『ソヴィエツト・ロシアの飢饉』*といふ大著のなかで、ソヴィエツトは決してブルジョア政府と戦争もしなければ、媾和もしないといふ觀念は、私が考へ出したものだとしてゐる。フイツシャーは、他の多くの人々と同じやうに、このナンセンスな表式を、ジノヴィエフ及び一般に亞流共から寫し取り、それに彼自身の理解不足から來た或るものを附け加へたのだ。私の遅ればせの非難者共はもう長い間、私のブレスト・リトウスク提議をその時間及び空間の關係から切離し、それを一層容易に荒唐無稽なものにしてしまふために、普遍的表式に轉化してゐる。だがそれをやるに當つて彼等は『媾和もなく、戦争もない』状態、或はもつと正確に言へば、媾和條約もなく戦争もない状態は、それ自身のうちに何等不自然なものもつてゐない、といふことを注意し損つてゐる。正確にこの關係は、今日、ソヴィエツト・ロシアと世界の最大強國——アメリカ合衆國と大英國*——との間に存在してゐるのだ。まことに、さういふ關係が樹立されて來たことは、我々の欲求に基いたものではなかつたのだ。が、それは問題を變へはしないのだ。

* 『一九一九——一九二三年までのソヴィエツト・ロシアの飢饉、アメリカ救済委員の活動』エツチ・エツ

チ・フイツシャー著ニュー・ヨーク、マックミラン會社發行。

** この文章は、ソヴィエツト・ロシアと大英國との、最近の外交關係回復以前に書かれたものである——英譯者。

その上、我々が我々自身の發議で、正確に『媾和もなく、戦争もない』關係を樹立した國が存在する。私はルーマニアを指して云つてゐるのだ。私の批判者等は、彼等が單なる荒唐無稽として描いてゐる普遍的表式を私の工夫になるものだとしながら、他方で、彼等がソヴィエツト同盟と他の多くの國々との現在の關係において、その『荒唐無稽な』表式を再生産してゐるといふ事實については、甚しく無知であるやうに見える。

ブレスト・リトウスクの挿話が過去の事柄となつた時に、レーニン自身はそれをどう見做したか？レーニンは概して、私とのその場の意見の相違を、特に述べる値打のないことと考へてゐた。しかし一度ならず彼は、『ブレスト・リトウスクの商議のどえらい宣傳的重要性』について語つた。(たとへば、一九一八年三月十七日の彼の演説において。)媾和から一年後の黨大會において、レーニンは述べた。『西ヨーロッパ及び他の一切の國々からの我々の極端な孤立状態は、西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命の進展の可能率、又はその生長の形態を判明すべき一切の客觀的材料を、我々から

奪つた。一切のこの複雑な形勢の結果、ブレスト・リトウスク媾和の問題が、我が黨の内部に多くの意見の相違を生み出した。』(一九一九年三月十八日の演説。)

そこで私の後年の批判者及び非難者連の、當時の行動の問題が残つてゐる。殆ど一箇年といふものブハーリンは、黨を分裂させると威嚇しながら、レーニン及び私と狂暴に争闘した。キュビシエフ、ヤロスラウスキー、ブブノウ、及びその他のスターリニズムの現在の支柱の多くは、彼と一緒にであつた。ジノヴィエフは、これに反して、ブレスト・リトウスクの宣傳的可能性を断念してしまつて、媾和の即時調印を要求した。レーニンと私とは、この主張を非難することにおいて一致してゐた。カメネフは、ブレスト・リトウスクに在つた間は私の表式に同意してゐたが、モスコウに歸ると、レーニンに結びついた。リユーコフは當時中央委員会にはゐなかつたので、この決定的な會議に何等の役目も演じなかつた。ヂェルジンスキーはレーニンに反対であつたが、最後の投票で、彼の方へ赴いた。スターリンの立場はどうであつたか？ いつもの通り、彼は何の立場ももつてゐなかつた。彼は單に日和見をやり、胸算用をしてゐた。『あの老人はまだ媾和を期待してゐる。彼は何ものも獲まいよ。』彼は、レーニンを指して、私にさう黙頭いたものだ。その後にはいつも彼はレーニンの方へ行つたもので、恐らく、私についてやはりそれと同じ種類の觀察をしてゐたであらう。彼は決して公衆の前で演説をしなかつた。どちらにしても何人も彼の矛盾に大して興味を持つてゐなかつた。私の主要な目

的——媾和問題における我々の行動を、出来る限り最善の光りの下に、世界のプロレタリアートによつて理解されるものとしようとする——は、疑ひもなく、スターリンにとつては二義的な意義しか持つてゐない事柄であつたのだ。彼は、後になつて『一國における社會主義』に興味をもつたやうに、當時は『一國における平和』に興味をもつてゐた。決定投票では、彼はレーニンに結びついた。彼がブレスト・リトウスクの出來事について、『見解』らしいものを自身のために工夫したのは、漸く數年後のことであつて、それは單にトロツキイズムにたいする彼の争闘を利用するためだけであつた。

この凡てについてはこの上長く述べる必要は殆どない。見る通り、私はブレスト・リトウスクでの意見の相違に、釣合ひのとれないほど多くの頁を割いて來てゐる。然し實際に何が起つたか、そしてそれが後になつてどんな風に言ひ表されてゐるかを示すために、尠くとも争論的エピソードの一つを完全な姿で露出することが、必要に思はれたのだ。そしてこれで、私は亞流共をその在り場所に置かうと欲したので。レーニンに關しては、彼にたいする私の態度がドイツで謂ふところの『レヒトハーベライ』(常に自らを正しとする)の感情によつて導かれてゐるなどは、眞摯な何人も疑ひをかけもしないであらう。他の何人よりもずつと前に、私はブレスト・リトウスク當時のレーニンの役割について、公の席上で賞讃した。一九一八年十月三日、ソヴィエツト政府の最高機關の臨時合同會議において、私は言つた。『この權威ある集會において、次のことを述べるのは私の義務であると信ずる。

私もふくめて我々の多くの者が、ブレスト・リトウスク媾和に調印することが我々にとつて許さる可きことかどうか、それについて疑問を抱いてゐた時、同志レーニンは獨り頑強に、驚く可き先見をもち、我々に反對して、世界プロレタリアートの革命まで我々を乗り切らせるために、我々はそれに堪へなければならぬ、と主張した。而して今や、我々が誤つてゐたことを、承認しなければならぬ。』

私は、ブレスト・リトウスク當時プロレタリアートの獨裁を救つたレーニンの天才の政治的勇氣を認めるのに、亞流共からの時期遅れの啓示を待つてはゐなかつたのだ。いま引用した言葉で、私は他の人々の過誤にたいする責任を、實際私に相當するよりも、大きな割合で、私自身に引受けた。私はかくして、レーニンにたいする私の態度、嫉妬とか卑劣とかのない態度を理解し、賞讃してゐる。黨はか示さうと欲したのだ。私はたゞ、レーニンが革命にとつて、歴史にとつて、及び私にとつて、何を意味するものであつたか、それを餘りにもよく知つてゐた。彼は私の師であつた。このことは、私が一寸ばかり後れて彼の言葉と姿態とを眞似たといふことを意味するのではなく、私が彼から學んで、彼とは獨立で、彼と同一の決定に到達したといふことを意味するのだ。

第八章 スウイヤーツースクの一箇月

一九一八年の春と夏は、異常に苦しかつた。戦争のあらゆる二番刈はその時丁度現れ始めてゐた。時々、一切のものが失はれ、崩れつゝあるかのやうに、しつかりと掴まへる何ものもなく、手頼りに出来るなものも無いかのやうに、思はれた。こんなに絶望的な状態になり、こんなに經濟的に困憊し、こんなにまで荒廢した國が、一つの新しい制度を支持し、その獨立を保有するに足る活力をそのなかに残されて持つてゐるだらうか、と人は疑ぐつた。食物はなかつた。軍隊はなかつた。鐵道は完全に解體してゐた。國家機關はやつと形をとり始めただけだつた。隱謀はいたるところで企てられてゐた。

西部では、ドイツ軍が、ポーランド、リトアニア、ラトヴィア、白露、及び大ロシアの大部分を占領してゐた。プスコウは彼等の手の中にあつた。ウクライナはオーストリア・ドイツの植民地となつた。ヴォルガでは、一九一八年の夏、フランス及びイギリスの手先共が、以前の戦時俘虜から成つてゐるチエツコ・スロヴァク聯隊の反亂をたきつけた。ドイツ最高司令は、その軍事代表者を通じて、私に、もし白軍が東方からモスコウに近づくならば、ドイツは新たな東部戦線の形成を阻止するため

に、西方から、即ちオルシヤ及びプスコウの方向から、モスコウへやつて来る、と通じて来た。我々はハンマーと鐵床の間に挟まれてゐた。北部では、フランス及びイギリス軍がムルマンスク及びアルハンゲルを占領し、ヴォログダへ進出すると威嚇してゐた。ヤロスラウルでは、白衛軍の暴動が勃發した。これは、ヴォログダとヤロスラウルの道に沿つて、北部軍隊と、ヴォルガにあるチエツク・スロヴァク及び白衛軍とを結びつけようとするフランス大使ノーレンとイギリス代表ロツクハルトとの使喚で、ザヴィンコフが組織したものであつた。ウラルでは、デュトヴの勢力が大きかつた。南部では、ドン地方で、當時實際ドイツ軍と同盟してゐたクラスノフ將軍の指導の下に、蜂起が蔓延しつゝあつた。左翼社會革命黨は、七月に隱謀を組織し、ミルパツハ伯を殺害した。と同時に彼等は東部戦線で蜂越を試みた。彼等は我々を強制して、ドイツと戦争させようと欲したので。内亂戦線は、刻一刻と、モスコウをじり／＼と絞め上げて行く絞殺繩のやうな形をとつてゐた。

シンピルスク陥落の後、私がヴォルガに赴くことに決定された。そこで我々は最大の危険に當面してゐたのだ。私は特別列車——當時、これはさう簡単な仕事ではなかつた——を用意し始めた。凡てのものが失れてゐた。いや、もつと正確に云へば、どこで何を見つけてよいか、誰も知つてゐるものはなかつた。この最も單純な仕事は、一つの複雑な即席仕事となつた。私は、この列車の中に二箇年半も生活しなければならぬやうにならうとは、想像だにもしなかつた。私は、その前日カザンが陥落

したことをまだ知らずに、八月七日にモスコウを離れた。私は途中で始めてその極めて騒亂的な報道を聞いたのだ。取急いで勤務につかせられた赤兵は、戦争をしないでその地位を去り、カザンの防衛を空にしてしまつた。幕僚のあるものは實際は裏功者であつたし、他の人々は不意を襲はれ、彈丸の雨を浴びて、命から／＼で逃走せざるを得なかつた。總司令官または他の司令將校がどこにゐるか、誰も知らなかつた。私の列車は、カザンに最も近い相當に大きな驛のスウイヤーツースクで停つた。そこでは、まる一箇月間、革命は中ぶらりんになつてゐた。その月は私にとつて一つの大きな教習學校であつた。

スウイヤーツースクの軍隊は、シンピルスク及びカザンから退却した枝隊と、あらゆる地點から驅けつけて来た援助兵の枝隊から成つてゐた。兵士といふ兵士は、各自勝手なやり方で生活し、共通に持つてゐるものとは、いつでも退却しようとして構へてゐたことであつた——それだけ敵は、組織と經驗の兩者において我々よりも優れてゐた。白軍の或るものは、一人のこらす奇蹟を行ふ士官から成つてゐた。大地そのものが恐慌で染んでゐるやうだつた。勇敢な氣持で到着した新たな赤軍枝隊も、さまざま退却の墮氣に吸込まれてしまつた。ソヴィエツトの運命は定つたといふ風説が、その地方の農民の間に擴まり始めてゐた。僧侶と商人とは首をもたげた。村々の革命的要素は姿を隠してゐた。あらゆるものが崩れつゝあり、しつかりと擱まる可きものは何もなかつた。形勢は絶望的に見えた。

こゝ、カザンを前にして、狭い土地の擴がりの上に、人類史におけるさまざまの要素の堆積してゐるのを見ることが出来たし、また、かの臆病な史的決定論にたいする反對理由を描くことが出来た。その決定論とは、あらゆる具體的な問題において、かの最も重要な要素——生ける、活動的な人間——をすつかり無視してしまつて、因果法則の受動的作用の背後にかくれる見解を云ふのだ。革命を顛覆するのに、それより以上のものが必要であり得たか？その（革命）領域は今や、前代のモスコウ管轄區域にまで縮小されてゐた。それは殆ど軍隊といふものを持つて居らず、四方八方から敵軍によつて包圍されてゐた。カザンの後には、ニジニ・ノヴゴロドの陥落の順番がやつて来るだらう。こゝからはモスコウへ、實際に何等障りもない大道が開けてゐるのだ。革命の運命は、こゝスウイヤーツースクで決せられつゝあつた。而してこゝでは、最も危機的な瞬間に、その運命はたゞ一つの大隊に、一つの中隊に、一人の人民委員の勇氣に掛つてゐた。簡単にいへば、それは眞に、一本の絲で支へられてゐたのだ。かくして日は來り、日は去つてゐた。

これら凡てにも拘らず、革命は救はれた。それがためには何が必要であつたか？ほんの少しだ。大衆の前層がこの形勢における致命的な危険を理解する必要があるであつた。成功の第一要件は、何ものも隠蔽しないこと、我々の弱さを全然かくさないことであつた。大衆を弄せず、一切のものをその正しい名によつて呼ぶことであつた。革命はまだ非常に無責任であり、十月の勝利は、極めて易々として

得られたのであつた。同時に革命は、それを育成した一切の困難を、一撃の下では、取除いてゐなかつた。自然發生的な壓力は弛緩してゐた。敵は、軍事組織——これこそ我々の持つてゐなかつた當のものだ——を通じて、成功をおさめつゝあつた。しかし革命は、カザンを前にして、それを成就しつゝあつたのだ。

全國を通じての宣傳が、スウイヤーツースクからの電報によつて、煽り立てられてゐた。諸ソヴィエツト、黨、労働組合は、新たな部隊の編成に一齊に身を打ち込み、數千のコミュニニストをカザン戦線に送つた。黨の青年の多くのものは、武器の取扱方を知らなかつたが、勝たうとする意志を持つてゐた。それが最も重要なものであつたのだ。彼等は、軍隊の柔かい肉體に背骨となつたのだ。

東部戦線の總司令官は、曩にラトヴィヤ銃師團の司令官だつたウエツエチス大佐であつた。この師團が舊軍隊からのこされた唯一の部隊だつたのだ。ラトヴィヤの農民、労働者、及び貧農は、バルチック貴族を増悪した。ツァーリズムはドイツとの戦争にこの對立を資本とし、ラトヴィヤ聯隊はツァーの軍隊中の最良の軍隊であつた。二月革命の後、彼等はポリシエヴィキの影響の下に、殆ど一人の人間のやうになり、十月革命では重要な役割を演じた。ウエツエチスは剛毅で、勢力的で、工夫に富んでゐた。彼は、左翼社會革命黨の反亂の間に、頭角をあらはしたのだ。彼の命令の下に、叛徒の參謀本部の前に輕砲が据ゑつけられ、ほんのおどかしのために二三發々射しただけで、死傷者もなく

叛徒を潰走させる事が出来た、ウエツエチスは、ムラヴィヨフが東部で隠謀を企てた後に、この冒險者の後を襲つたのだ。陸軍大學で教習された他の士官達とは異つて、彼は決して革命の混沌のなかで自己を忘失せず、嬉々として跳び込んで來、口から泡を吹き、訴へかけ、説き廻り、それが遂行される望みの殆どないときですら、命令を與へた。行政の勤務についてゐる他の『専門家』たちが、他のいかなることに優つて、彼等の權能を踏み越えることに恐怖を抱いてゐたのに反し、ウエツエチスは、靈感がやつて來た瞬間には、あたかも人民委員ソツイエツトや中央執行委員會が存在しないかのやうに、命令を發したものだ。一年後に彼は、疑はしい計畫をやり、他と連絡をとつてゐたといふ廉で、罷免されなければならなかつたが、この告訴には實際には何等重要なものはなかつたのだ。思ふに寢床につく前に、この先生、ナポレオンの傳記を讀んでゐて、彼の野心的な夢想を二三の若い士官に打明けたものだらう。今日、ウエツエチスは陸軍大學の教授となつてゐる。

八月六日、カザンからの退却にあつて、白軍がすでに建物に入つて來た時に、司令本部を一番最後に去つた一人は、彼であつた。彼は逃走を企て、カザンは失つたが、彼の樂天主義は失はないで、いろ／＼と廻り路をして、スウイヤーツースクに到着した。我々は一緒になつて重要な諸問題を審議し、ラトヴィヤの士官スラヴィンを第五軍團の司令官に任命し、それから別れを告げた。ウエツエチスは司令本部にむけて出發し、私はスウイヤーツースクにとどまつた。

私と同じ列車で來た黨員労働者の間に、グセウといふ人間がゐた。彼は一九〇五年の革命に参加したので、『老ポリシエヴィキ』と呼ばれてゐた。彼はその後十年間、引退してブルジョア生活をおくつたが、他の多くの人々と同じに、一九一七年に革命に歸つて來た。その後レーニンと私とは、或る一寸とした隠謀の廉で、彼を軍事的勤務から罷免したが、その後すぐ彼はスターリンにひろひ上げられた。今日彼の特別の天職は、主として、内亂當時の歴史を伴る仕事であり、この仕事での彼の主要な資格は、冷い狡猾であるのだ。スターリン一派の爾餘の者と同様に、彼は決して過去に彼が書いたこと又は言つたことを顧ることをしない。一九二四年の初め、私にたいする反對運動がすでに十分に大びらになつたとき、グセウは冷淡な誹毀者としての彼の役割を演じた。だが、スウイヤーツースクの當時の記憶は、七年の間隔があるに拘らず、なほ餘りにも鮮かなので、彼にあつてすらそれは一つの邪魔物として作用した。カザンをまへにしての出來事について彼の云つたのは、かうだ。『同志トロツキイの到着は、形勢に決定的な變化を齎した。スウイヤーツースクの陰暗な停車場へ、同志トロツキイの列車が來ると共に、軍事作業のあらゆる方面に、勝利を得ようとする強固な意志と、新しい創意的のセンスと、決斷的な壓力とがやつて來た。』

『實に最初の日から、凡ての人々は、停車場——政治部の積極的な運動本部であり、無數の聯隊の給與列車で埋まつた軍隊給供本部であつた——ばかりでなく、約十五露里離れて駐屯してゐる軍隊の間

にも、或る突然の變化が起つたことを感じ始めた。それは第一に、軍規において目についた。同志トロツキイの峻嚴な方法は、……その規律の亂れ、不規則になつた戦争の時期には、最も有益で、且つ必要であつた。説服は何の役にも立たず、それをしてゐる時がなかつた。かくて同志トロツキイがスウイヤーツースクで送つた二十五日間に、驚く可き量の仕事が爲され、その結果として、第五軍團の解體した、荒廢した軍隊が、戰鬪的軍隊に變化し、後にカザンを奪還したのである。』

謀反は、司令部及び高級士官の間に、事實、あらゆるところに巢を喰つてゐた。敵は打撃を加へる場所を知つてゐて、殆どいつも確實にそれをやつた。それは意氣を沮喪させるものであつた。私は、到着するとすぐ、戰鬪部隊を見て廻つた。その時砲兵隊の配備の様子が、一人の經驗ある士官によつて、私に説明された。その士官は風で皮膚がざら／＼になり、底の知れない眼をもつた男であつた。彼は、戦線の電話で何か命令を發し度いから、一寸暇をくれと言つた。數分間すると二箇の砲彈が、我々の立つてゐるところから、足で測つて五十歩を隔つたところに落下した。第三の砲彈は我々の全くすぐそばに落下した。私は身を臥す暇もなく、土砂を浴びた。その士官は、日に焼けた皮膚を通して、顔色蒼白になつて、少し離れたところに身動きもせず立つてゐた。いかにも不思議なことだが、私はその瞬間、何等疑ひをはさまず、これをほんの偶發事だと考へてゐた。だが二年後になつて、突然その事件をすつかり想ひ起し、細かい點まで記憶を呼び起したとき、始めて私に讀めて來た。その

士官は我々の敵だつたもので、どこか中間點から敵の戰鬪部隊に電話し、發砲すべき地點を教へたのだ。彼は二重の危険——白軍の砲彈によつて我々と共に殺される危険と、赤軍によつて射殺される危険との——を冒したわけだ。その後、彼にどんなことが起つたか、私は知らない。

私は、列車へ歸つて來るとすぐ、私の周りに小銃の射撃を聞いた。私は扉のところへ衝き進んだ。白軍の飛行機が一臺、我々の上を飛行してゐたが、我々の列車を撃たうとしてゐることは明かであつた。三箇の爆彈が次々と、大きなカーヴを描いて落下したが、損害を與へなかつた。我々の列車の屋根からは、小銃や機關砲が敵を目がけて射撃してゐた。飛行機は彈丸のとどかない高さにあるのだが、猛射はつゞけられてゐた——恰もみんなは酔つぱらつてゐるやうだつた。多大の面倒をして、私は射撃をやめさせることが出來た。恐らくあの同じ砲兵士官が、私の列車へ歸る時間を告知したものであらう。それともまた他に告知知らせるものがあつたのかも知れない。

革命の軍事的形勢が絶望的になればなるほど、謀反は積極的になつて行つた。退却の自動的な情性は、どんな犠牲を拂つても出來るだけ速かにこれを征服することが必要であつた。この情性に陥つては、立ちとどまつて、廻轉し、敵の胸を撃つことが出來るとは信ぜられなかつた。私は約五十名の若い黨員を同じ列車で、モスコウから連れて來てゐた。彼等は彼等に不相應な立派な仕事をなし、破れ目に入り込んで行き、彼等の向見すの英雄性と單なる無經驗をもつてして、私の目の前で立派に對象

へ溶込んで行つた。彼等に次ぐ哨所は、第四ラトヴィア聯隊によつて占められてゐた。すつかり解體してしまつたラトヴィヤ師團の一切の聯隊のうちで、これが最悪のものであつた。兵士達は列車の下の泥の中に横たはつてゐて、救済を要求したが、求め得られる救済はなかつた。その聯隊の司令官と聯隊委員會は私に聲明書をおくつて来て、聯隊が直ちに救済されなかつたならば、『革命にとつて危険な結果』が生ずるであらう、と言つた。それは威嚇であつた。私は聯隊司令官と委員會議長を私の列車へ召致した。彼等は無愛相に彼等の聲明を主張した。私は彼等の逮捕を宣言した。現在クレムリンの司令官になつてゐる私の列車の交通士官は、私の部屋のなかで彼等の武裝を解除した。列車内の役員は我々二人しか居らず、殘餘の者は戦線で闘つてゐた。もし逮捕された人々が何等かの反抗を示して来るか、それとも彼等の聯隊が彼等の防衛を決し、戦線を離れたならば、形勢は險惡なものとなつたであらう。我々はスウィヤーツスク及びヴォルガの河橋を、敵に渡さなければならなかつたであらう。敵による我々の列車の獲取は、疑ひもなく軍隊に影響を及ぼしたであらう。モスコウへの道は開放されたであらう。しかし逮捕は安全に過ぎた。軍隊への命令中に私は、その聯隊司令官を革命裁判の審理に附する旨を表明した。その聯隊は持場にとどまつてゐた。司令官は投獄の宣告を受けただけだつた。

コンミニュニスト達は、説明し、説き聞かせ、實例を示してゐたが、アヂテーションだけでは軍隊

の態度を急激に變へることは出来なかつた。且つ形勢はそれをする十分な時間を與へなかつた。我々は更に峻嚴な手段を決定しなければならなかつた。私は一つの命令を發し、それが私の列車の中で印刷に附せられ、全軍隊に配布された。『余は警告する、或る聯隊にして命令なくして退却する場合には、その軍隊の人民委員先づ第一に射殺され、つぎに司令官射殺さる可し。而して勇敢にして果斷なる兵士をその後任に任命することゝす。臆病者、卑劣漢及び裏切者は、決して彈丸をのがれること無し。余はこれを、全赤軍の面前には嚴肅に誓約する。』

もちろん直ちに變化はやつて來なかつた。箇々の部隊は依然として命令なしに退却しつゞけてゐたし、又は最初の激しい突撃に會ふと、すぐ破れてゐた。スウィヤーツスクは打撃に曝されてゐた。ヴォルガには、幕僚のためにすでに蒸汽船が用意されてあつた。私の列車乗務員中の十名ものは、自轉車に乗つて、幕僚本部と乗船場との間の通路を警衛してゐた。第五軍團の軍事ソヴィエツトは、私に河の方へ移動するやうにと提議した。これは賢い提議ではあつたが、私は、既に神經過敏になり自信を失つてゐる軍隊への惡影響を惧れた。丁度その時、戦線の形勢が突然惡化した。我々が信任してゐた新しい一聯隊が、それに屬する人民委員とその司令官を先頭として、持場を去り、ニジニ・ノヴゴロドへ航行中の汽船を武力で威嚇して奪取したのだ。

驚愕の波は戦線をさらつた。凡てのものが河の方を見始めた。形勢はほとんど絶望的に見えた。敵

は僅か一、二キロメートルのところをり、弾丸はすぐそばで爆發したに拘らず、幕僚はその地位にとどまつてゐた。私は、なくてはならぬマルキンと相談した。彼は、一隊の選抜隊を率ゐ、俄かに艦装した砲艦に乗つて、脱走者の占めてゐる汽船に航行して、砲口をつきつけて彼等の降服を要求したのだ。一切の事がこの一瞬間にかゝつてゐた。一發の小銃の發射でも、破局を齎すに十分であつたであらう。しかし脱走者等は無抵抗で降服した。汽船は埠頭に沿つて入渠し、脱走者は上陸した。私は戦線裁判所を任命し、その裁判は當の司令官、人民委員、及び數名の個人に死刑の宣告を下した——腐り果てた傷へ、赤い焼けた鐵を加へたのだ。私は、何等隠したり、緩和したりしないで、これを聯隊に説明した。數名のコンミュニストがその聯隊に編入され、聯隊は新しい士官と新しい精神をもつて、戦線に歸つた。凡てのことがいかにも急速に起つたので、敵は我々の隊伍中のこの騷擾を利用する時間ひまがなかつた。

空軍を組織する必要があつた。私は技師で操縦手のアカシエヴを呼んだ。彼は信仰的にアナキストであつたが、我々と一緒に仕事をしてゐたのだ。アカシエヴは彼の創意を示し、忽ちうちに空軍をつくり上げた。遂に我々は、その助けをかりて、敵の戦線の全圖を持つことが出来た。第五軍團の司令官は、そのまへに暗いところから出て來た。飛行機は毎日、カザンを空中から手入れし、狂氣のやうな驚愕が同市をとらへた。少し経つて、カザンが奪還されて後、私は若干の文書を手にしたが、

その中にカザンの包圍中、そこで暮してゐた一ブルジョア少女の日記があつた。我々の航空手が齎した恐慌の描寫にその數頁が費されてあつて、それと交互にその少女の戀愛事件を描いた頁があつた。カザンの客間で始まつたその事件は、自然の過程をたどつて、最後の幕は爆彈からの避難所とされた地下室に達してゐた。

八月の二十八日に、白軍は包圍行動を開始した。後に白軍の將軍として尊敬されたカツペル大佐は強力な一枝隊を率ゐて、闇にまぎれて我々の背後に潜入し、小さな停車場を占領し、軌道を破壊し、電柱を切倒りした。かうして彼は我々の退路を斷つておいて、スワイヤーツースクの攻撃に向つて來た。もし私に誤りがなければ、カツペルの幕僚にはザヴィンコフも含まれてゐた。この活動は我々に不意打を食はせたものであつた。我々は、すでに割目のある戦線を分裂させることを懼れて、わづか二三中隊しか呼び寄せなかつた。私の列車の司令官は、列車及び停車場で、コツクまでをふくめて、彼の手をつけることの出来るあらゆる人々を動員した。我々には、小銃、機關砲及び手榴彈の蓄へが十分にあつた。列車乗組員は立派な闘士から成つてゐた。その人々は列車から約一露里のところ陣地をかまへた。戦闘は約八時間つゞき、雙方に損害があつた。結局、敵は、勢力を費消したあとで、撤退した。同時にスイヤーツースクとの連絡の切斷は、モスコウ及び全戦線を衝撃した。小さな諸部隊が我々の救済に駆けつけた。線路はたゞちに修理され、新しい部隊は軍隊へ流れ込んだ。その時カ

ザンの新聞紙は、私は退路を断たれ、俘虜をとつて殺害し、飛行機で逃れ去つた——が私の犬は戦利品として捕獲された、と報じてゐた。この忠實な動物は、その後あらゆる内亂の戦線で捕獲された。多くの場合、それはチョコレート色の犬に過ぎなかつたが、時々には聖バーナードであつた。私はいつともつと損をしないで逃れ去つたのだ、といふだけは私は曾つて犬などを持つてゐたことはないのだから。

スウイヤーツースクの最も危機的な夜、朝の三時に、私は幕僚の居所のあたりを散歩してゐた。その時私は、幕僚室からひそ／＼聲の洩れて来るのを聞いた。「彼は俘虜になるまでこの遊戯をつゞけ、彼自身と我々みんなを滅すだらう。僕の言葉を覚えてゐたまへ。」私は闕のところでは立ちどまつた。私に向ひ合つて、參謀本部の二人の若い士官がゐて、テーブルに掛けて、熱心に地圖を案じてゐた。喋つてゐた人間は、私に背を向けて立つて、テーブルにかゝんでゐた。彼は、仲間の顔に驚愕に似たものを讀みとつたに相違ない。といふのは彼は鋭く振返つて、扉の方を見たからだ。それは、ツアーの軍隊の以前の中尉で、いまは若いポリシエヴィキのブラゴンラヴオフであつた。恐怖と羞恥のこんぐらかつた表情が、彼の顔に凍りついたやうであつた。一個の人民委員として、軍隊に所屬する専門家の道徳性を保つて行くのが、彼の義務であつたのだ。然るにそれをしないで、こゝで彼はこの危機的なモメントに、彼等を煽動して私に叛かせ、實際上、彼等に脱走を示唆してゐたのだ！ 私は

現行犯の彼を捕へたのだ。私はほとんど私の眼乃至耳を信ずることが出来なかつた。

一九一七年中、ブラゴンラヴオフは戰鬪的革命家たることを實證した。彼は革命の間ピーター・ポール要塞の人民委員であつて、その後士官學生の蜂起抑壓に参加した。私はスモルニー時代、彼に重要な役目を委任し、彼は立派にそれをやつてのけた。私はある時冗談話にレーニンに言つたことがある。「さういふ中尉のなかゝら、いつかナポレオンも出て来るかも知れんね。彼はそれに打つてつけの名前すら持つてゐる。ブラゴンラヴオフは、ボナ・パルトと殆ど同じだ。*」レーニンはこの豫期しない比較に笑つて、それから考へ深くなり、いつもより頬骨を出張らせて、殆どおどかすやうに非常に眞面目に言つた。「さうだ、我々はボナパルト達を制御するだらう。ではないかね？」

* ロシヤ語のブラゴ・ノラヴオフは、立派な性質とか、立派な風貌とか云つた意味であり、フランス語のボナパルトもほどそれと同じ意味である。——英譯者

『凡ては神の手にある。』と、私は冗談に彼に答へた。人民達がムラヴィオフの詐術にかゝつて眠つてゐた時、私が東部へ送つたのも、この同じブラゴンラヴオフであつた。クレムリンのレーニンの接見室で、私がブラゴンラヴオフに彼の仕事を説明した時、彼はあたかも意氣が沮喪したかのやうな風で答へた。「事態の全意味は、革命が衰微に入つたといふことです。」それは一九一八年の中頃であつた。「君がそんなに急にしよげるといふことが、一體あり得ることかね？」と私は、憤然として訊

ねた。彼は自分を取直し、調子を變へ、それからやる必要のあることは何でもやると誓約した。私は再び彼を信じた。

ところが今、我々の最も危機的な時に、あきらかに隠謀しようとするところで、私は彼をとらへたのだ！

我々は廊下に歩み入つてゐたから、士官達のまへで、それを討議する必要はなかつた。ブラゴンラヴォフは青くなつて、ふるへて、帽子に手を擧げてゐた。『どうぞ私を裁判に附さないで下さい。』と彼は絶望的に繰返した。『もし私を一人として戦線に派遣してくだされば、私は執行猶豫になるでせう。』私の豫言は實際とはならなかつた。こゝで、私のナポレオン候補者は、私のまへに雨にぬれた雌鶏のやうになつてゐる。彼はその地位から罷免され、もつと責任のない仕事に差し向けられた。

革命は人間及び性格の大きな貪食者だ。それは勇敢なものを破壊に導き、しつかりしない人々の魂を滅してしまふ。今日、ブラゴンラヴォフは、ゲー・ペー・ウーの支配群の一員であり、現在の統治の支柱の一人だ。彼は、まだスウイヤーツースクにあつた時、『永久革命』を嫌ふことを學んだのに相違ない。

革命の運命は、スウイヤーツースクとカザンとの間に、中ぶらりんで動揺してゐた。ヴォルガへの退路を除いては、一切の退路は開かれてゐなかつた。軍隊の革命的ソヴィエツトは、スウイヤーツースク

での私の安全を保証する問題が、彼等の行動の自由を拘束すると報じて來、即時私に河上の船へ移轉して欲しいと要求した。彼等はこの要求をなす権能を與へられてゐた——最初から私は、私のスウイヤーツースクに在ることが、どんな仕方でも軍隊の最高司令を迷惑がらせたり、拘束したりしないといふことを規定としてゐた。私はさまざまな戦線にとまつてゐた間、つねにこの規定を守つて來た。そんなわけで私はこの要求を容れて、河上へ引越したが、私のためにまへから用意してあつた乗客船へではなくて、水雷艇へであつた。四隻の小さな水雷艇が、マリインスクの運河によつて、非常な困難の末、ヴォルガに派遣された。その時まで、數隻の河蒸氣船も大砲や機關砲で武装されてゐた。

ラスコルニコフの率ゆる小艦隊は、その夜、カザンを襲撃する計畫であつた。それには、二つの高い岬の前を通過せねばならなかつたが、その岬には白軍が戦闘部隊を配備してゐた。その岬の向うで河はカーブして、廣くなり、そこに敵の小艦隊が停泊してゐた。反對の岸には、カザンが廣く横たはつてゐた。闇にまぎれてその岬を通過し、敵の小艦隊と沿岸戦闘部隊を破碎し、それから市を砲撃するといふ計畫であつた。

小艦隊は、夜の泥坊のやうに、燈火を消して、戦闘陣形で出發した。雙方とも薄い小つぼけな鬚のある二人の年老つた水先案内が、艦長のそばに立つてゐた。彼等は、無理に艦上へつれて來られて

わたので 刻々死ぬやうな恐怖におそはれ、我々を憎悪し、彼等の運命を呪ひ、その間にたえず白楊のやうにふるへてゐた。いま凡ては彼等にかゝつてゐた。艦長は、もし彼等が艦體を坐礁させたら、即座に兩人を射殺すると、たえず彼等に言ひきかせてゐた。我々が丁度、暗い中からぼんやりとつき立つてゐる岬に平行した箇所に来た時、機關砲からの一發射が、鞭のやうに河を横切つて閃めいた。丘の上からそれについて砲撃があつた。我々は沈黙して進んだ。我々の後から、下から、それに應酬する射撃が続いた。數箇の弾丸が、艦長橋で腰のところまで我々を保護してゐる鐵板を鳴らした。我々は身をかじめ、掌帆長は縮み上り、貫くやうな眼で、暗をさぐり、艦長と緊張した耳語を交してゐた。一度岬を通過すると、我々は着弾距離に入つた。我々の向ふ側、反對の河岸に、カザンの灯が見えてゐた。猛烈な砲撃が、我々の背後に、上からも下からも、行はれてゐた。

右方、約二百ヤードのところ、丘の多い堤防の下に、敵の小艦隊が碇泊して居り、小艇が模糊たるかたまりとなつて浮んでゐた。ラスコルニコフはその小艇に向つて砲火を加へるやうに命令した。我々の水雷艇の金屬體は、自身の砲門からの最初の發射で、呻き聲を立て、すゝり鳴いた。我々は、恰も鐵の子宮が軋るやうな苦しみで砲弾を産み出してゐるかのやうに、ピョコ／＼と躍びはねながら動いてゐた。不意に夜の闇が火焰のためにまぎ／＼と剝ぎとられた——わが砲弾の一つが給油船に火災を起させたのだ。思ひも設けない、歡び迎へられもしない、だが燦爛たる炬火が、ヴォルガの上

にあがつた。いま我々は埠頭を砲撃し始めた。我々はそこに備へられてある大砲をはつきりと見るこゝとが出来たが、それは我々に應酬しなかつた。明かに砲手達があつさりと逃げてしまつたのだ。河全體が照し出された。我々の背後には一人もゐなかつた。我々は獨りぼつちだつた。敵の砲兵隊が、明かに、我々の艦隊の爾餘の船の通路を斷つたのだ。我々の水雷艇は、白い皿の上の一匹の蠅のやうに、輝く河上に浮んでゐた。次の瞬間には我々は、岬及び埠頭からの十字火砲撃の下にある我々を見出したであらう。そこで我々は獨行した。ところがこの最中に、我々は艇體のコントロールを失つてしまつた。操舵要具が破壊したのだ——おそらく砲弾をうけたゝめだらう。我々は手で舵を廻さうとしたが、切れた鎖がそのまはりから、みついてゐて、舵機は役にたゝなくなつてゐた。そこでどうしてもエンヂンを停止せざるを得なくなつた。艦體はしづかにカザン堤防の方へたゞよつて行き、一隻の古い、半ば水に浸つた大傳馬にくつゝいた。砲撃はすつかり止んでしまつた。晝のやうに明るく夜のやうに靜かであつた。

我々は畏にひつかゝつてゐた。たゞひとつどうしても解せないやうに思はれたのは、我々が砲弾を注ぎかけられてゐないといふ事實だ。我々は、我々の襲撃によつて惹起された破壊と恐怖を理解することが出来なかつた。最後に若い士官達は、この大傳馬を押しつけ、左右のエンヂンを交互に運轉して、艦體の運動を整調することに決した。それが成功した。まだ焰をあげてゐる石油の炬火の下で、

我々は岬の方へ動いて行つた。射撃は全くなかつた。岬のまはりで、我々は再び闇のなかに入つた。絶息してゐた水兵が、機關室からかつき出された。丘の上の砲臺は、たゞの一發も發射しなかつた。我々が監視されてゐないことは明かであつた。おそらくそこには我々を監視する人は一人もゐなかつたのだらう。我々は救はれた。『救はれた』とは、書けば容易い言葉だ。煙草をつけて一ぶくした。我々の俄か仕立の砲艦一隻の、木炭のやうになつた残骸が、海岸に物悲しく横たはつてゐた。他の艦に若干の負傷者があつた。そのとき始めて、我々は、我々の水雷艇の艦首が一インチ砲彈によつて、綺麗に射ち抜かれてゐるのを知つた。夜明けまでであつた。我々は、誰も彼も、再生したやうに感じた。

快事は快事につゞいた。たゞいま下りて來たばかりの飛行家は、我々のところへ歡ばしい報道をもたらした。コサツク兵アジインの指揮する第二軍團の一枝隊は、北東からカザンをさして眞直ぐにやつて來た。彼等は二輛の武装列車を獲取し、二門の大砲を不能にし、敵の一枝隊を潰走させ、カザンから十二露里の二つの村落を占領した。その飛行家は訓令とアツピールをもつて、すぐさま飛び歸つた。カザンは鉄の間へはさみ込まれてゐた。我々の夜襲は、すぐ後で我々の偵察隊から知つたことだが、白軍の抵抗を狂はしてしまつたのだ。敵の小艦隊は殆ど完全に破壊され、河岸の砲臺はすつかり沈黙させられた。ヴォルガの河上の『水雷艇』といふ言葉は、少し後になつて『タンク』といふ言葉

がペトログラードの前方の若い赤軍にたいして持つたと同じ効果を、白軍にたいして持つたのだ。ポリシエヴィキの中にはドイツ人が混つて一緒に戦つてゐる、といふ風説がひろがつた。繁榮階級はカザンから群をなして逃走しはじめた。勞働者地區は再び頭を擡げた。火藥工場に反抗が勃發した。進撃的精神がわが軍隊の間にまざ／＼と眼について來た。

スウイヤーーツースクその月は、眩暈的な挿話でぎつしり詰つてゐた。毎日毎日何事か起つた。この點では、夜といふ夜が、晝といふ晝から遠く離れてゐないことが、まつたく屢々あつた。戦争といふものが爾く親しく我々のまへに展開したのは、これが初めてであつた。これは小さな戦争で、それに參加した我々側の人員は、二千五百人から三千人に過ぎなかつた。だが、小さな戦争と大戦争との違ひは、その規模だけだ。それは戦争の生きたモデルのやうなものであつた。その進退と驚愕事とが、そのやうに犇々と感ぜられたのは、そのためなのだ。この小さな戦争は一つの大きな學校であつた。

その間に、カザンを前にしての形勢は、理解出來ぬほど變化した。異質的な枝隊が、ペトログラード、モスコウ及びその他の場所からの勞働者コミュニニストの支柱を得て、正規的な軍隊となつた。聯隊は強力となつた。軍隊の内部では、人民委員が、革命的指導者の意義、獨裁の直接の代表者の意義を獲得した。軍事裁判所は、革命が一朝、致命的の危険におびやかされた場合には、最高の犠牲を

要求する、と各人に明示した。宣傳、組織、革命的實例及び抑壓は、數週間のうちに必要な變化を産み出した。動搖的な、頼りにならぬ、そしてすぐばら／＼になる大衆は、一つの眞實な軍隊に轉化された。我々の砲兵隊は著しくその優越性を確立した。我々の小艦隊は河を支配した。我々の飛行家は空を支配した。最早私は、我々がカザンを占領するに至ることを疑はなかつた。

突然、九月一日に、私はモスコウから電報をうけ取つた。『すぐ歸還せよ。ウラヂミル・イリイツチが負傷した。その危険程度はまだ不明。命令は行き互つてゐる。八月三十一日、一九一八年、スヴェルドロフ。』私はすぐ出發した。モスコウでの黨仲間の氣持は、物悲しく沈鬱であつたが、彼等は絶対に動搖しなかつた。この決斷性の最もよい體現は、スヴェルドロフであつた。醫師達は、レーニンの生命は危険でないと宣言し、遠からず恢復すると約束した。私は、東部における成功の展望をつけて、黨を上げまし、直ちにスワイヤーツースクへ歸つた。

カザンは九月十日に奪取された。二日の後、シンピルスクがわが第一軍團によつて占領された。これは私には何等驚異ではなかつた。第一軍團の司令官ツカーシエウスキーは八月の末に私に約束し、九月十二日までにシンピルスクを奪取すると言つた。その町が占領された時、彼は打電して來た。『命令は實行された。シンピルスクを占領した。』一方、レーニンは恢復しつゝあつた。彼は歡びをのべた挨拶の電報を打つてよこした。全戦線にわたつて、事態は良好になりつゝあつた。

第五軍團はこの時、イヴァン・ニキイツチ・スミルノウに率ゐられてゐた。これは極めて重要なことであつた。スミルノウは最も完全な、完成した革命的タイプを代表してゐた。彼は三十年前に革命家の伍列に入つて、それ以來、かつて休息を持たなかつたし、またそれを求めもしなかつた。反動の暗黒な時期には、スミルノウは地下の通路をほり下げて行つた。その通路が破壊された時も、彼は氣力を失はず、凡てを再びやり直した。イヴァン・ニキイツチはいつも義務に忠實な人間であつた。この點では、革命家は良き兵卒に似てゐる。革命家が立派な兵卒と成ることの出来るのは、この故だ。イヴァン・ニキイツチは彼自身の資性の要求にのみしたがつて、つねに志操の堅固と勇敢の典型で、しかしさういふ性質に往々伴ふかの残酷性をもつてゐなかつた。軍隊の立派な働き手は全部、彼を範例とし初めた。『イヴァン・ニキイツチ以上に尊敬されたものはない。』と、ラリツサ・ライスナーはカザン包圍についての彼等の描寫のなかで、書いた。『最も危機に瀕した瞬間に、彼がいつも最もよく、最も勇敢であることを、人は感じた。』スミルノウには街學の痕などは全然なかつた。彼は極めて社交的で、陽氣で、機智に富んだ人間だ。彼の權威はまつたく争ふ可からざるものであるが、少しもあからさまでなく、もしくは横柄ではないので、それだけ餘計に人々は易々として彼に服するのだ。

第五軍團のコンミニュニスト達は、スミルノウのまはりに集まつた時、一箇の獨立な政治的家族を形

成した。この家族は、その第五軍團解體から七年たった今日でも、ロシアの生活に一役を演じてゐるのだ。『第五軍團人』といふ言葉は、革命の辭典のなかで、特別の意味をもつて居り、眞の革命家、義務に忠實な人間、而してな就中慎重な人間を言ひ表してゐる。イヴァン・ニキイツチと一緒に、第五軍團の人々は、内亂の終熄後は、彼等みんなのヒロイズムを經濟の方面に移し、そしてほとんど例外なしに反對派の伍列のうちに彼等を見出したのだ。スミルノウは軍需品工業の首班となり、その後郵便電信の人民委員の部署についた。今日、彼はコーカサスに追放されてゐる。諸々の牢獄ヤシベリヤに諸君は第五軍團の彼の同僚の英雄達の多くを見出すであらう。しかし革命は人間及び人格の大きな貪食者である！ 最近の報道によると、このスミルノウですら鬪争のために打ち碎かれて、降服を説いてゐるとのことだ。

イヴァン・ニキイツチを『スウイヤーツースクの良心』と呼んだラリツサ・ライスナーは、彼女自身もまた、第五軍團ならびに全體としての革命において、秀いでゐた。この立派な若い女性には、多くのものゝ眼を奪ふ燃ゆる火の玉のやうに、革命の空に燃え輝いた。彼女のオリンピックヤの女神のやうな容貌には、精敏な、冷厳な精神と、戰士の勇氣とが結びついてゐた。カザンが白軍に占領されて後彼女は、百姓女に變裝して、敵の陣營へ偵察に赴いた。しかし彼女の容貌があまりにも普通でないので、逮捕されてしまつた。彼女は、日本情報士官の訊問をうけてゐる時、休憩のひまをぬすんで、警

護の行きとどかない戸から逃れ出て、姿を消した。その後で、彼女は情報の仕事にしたがつた。更にその後、彼女は軍艦に乗り込み、戰鬪に参加した。内亂についての彼女の素描は文學であつた。彼女はまた同じ喜びをもつて、ウラルの諸産業、ロールにおける労働者の叛亂について書いた。彼女は凡てを知り、凡てを見、一切のことに参加しようと熱中してゐた。數年の短い間に、彼女は第一流の文筆家となつた。しかし水火の間を傷かすにくゞつて來た後で、この革命のプラスは突然、三十歳にすらならぬうちに、モスコウの平和な環境にあつて、チブスで仆れてしまつた。

一人の立派な労働者は他の同じ者へと結びついた。砲火の下で人々は一週間のうちに學び知つた。軍隊は素晴しく形を具へつゝあつた。革命の最低潮——カザン陥落の瞬間——は、いまや我々の後になつた。これと共におそろしい變化が農民の間に起りつゝあつた。白軍はムジーク（百姓）に彼等の政治のイロハを教へてゐた。それに續く七箇月の間に、赤軍は、四千萬の人々をもつた、約百萬平方キロメートルの領土を清掃した。革命は再び前進しつゝあつた。白軍はカザンから逃走した時、ホフマン將軍の二月攻撃以來、そこに蓄へられてあつた共和國の準備金を携へて去つた。我々は遙かに後になつて、それを奪還し、それと共にコルチャツク提督を逮捕した。

遂にスウイヤーツースクから眼を轉ずることが出来るやうになつた時、私は、一定の變化がヨーロッパに起つてゐたことを知つた。ドイツ軍は、絶望的地位にあつた。

第九章 列車

さあ、『プレドレヴォエソヴィエツトの列車』^{*}のことを物語る可き時が来た。革命の最も骨の折れた數年間、私の個人生活はその列車の生活と結びつけられて、離れなかつた。他方、その列車は赤軍の生活と結びつけられて、離る可からざるものであつた。その列車は、戦線と根據地とを結びつけ、切迫した問題を立ちどころに解決し、教育し、訴へ、供給し、表彰し、且つ罰した。

^{*} 革命軍事會議々長の列車——英譯者。

およそ軍隊は刑罰がなくては、設置され得ないものだ。軍隊司令部がその武器庫のなかに死刑をもつてゐない以上は、人間の大眾は死に導かれ得ないものである。自己の技術上の達成をいかにも鼻高と誇つてゐる、意地の悪い、尻尾のない猿共——我々はその動物を人間と呼んでゐる——が、軍隊を設置し、戦争をやつてゐる間は、司令部はいつも兵士達を、戦線での死の可能性と、後方での死の不可避性との間に置かざるを得ないであらう。しかし又、軍隊は恐怖の上には設置されない。ツプアの軍隊の崩壊したのは、何等か刑罰が缺けてゐたからではない。ケレンスキーは、死刑を復活させてその崩壊を救はうと企て、その軍隊をぶつこはしてしまつたのだ。ボリシエヴィキは、大戦争の灰

燼の上に、一つの新しい軍隊を創つた。これらの事實は、いやしくも歴史の言葉についての極く僅かな知識をもつてゐる人なら、何人にも説明はいらぬことだ。その新しい軍隊の内部の最も強いセメントは、十月革命の觀念であつた。そしてその列車は戦線へこのセメントを供給したので。

カルガ、ヴォロネツ、及びリヤザンの地方では、無数の若い農民が、ソヴィエツトの發した最初の動員令に應じなかつた。戦争はそれらの地方からは遠く隔たつたところで行はれてゐるのであり、兵籍名簿は不完全であり、したがつて勤務命令は眞面目にとられなかつたのだ。命令に應じて馳せ参じない人々は逃亡者と認められてゐた。そこでこれらの不参者にたいして、強烈な引出し運動を開始することが必要となつた。リヤザンの軍事人民委員はさういふ逃亡者約一萬五千人を集めることに成功した。私は、リヤザンを通過の途次、彼等を一見しようと決心した。我々の周囲の或る人々は、私にそれを思ひ止らせようとした。『何事か起るにちがひない。』と彼等は警告した。だが、萬事は見事に行つた。人々は兵營から呼び出された。『同志逃亡者——集合せよ。同志トロツキイ來つて、諸君に演説する。』彼等は興奮して、學校の子供のやうに好奇的にかやくと走り出て來た。私は彼等をもつと甚しく悪質だと想像してゐたのだし、彼等は私をもつと恐しい人間だと想像してゐたのだ。數分のうちに、私は拘束のない、全然規律のない、だが、全く敵意をもたない人間の大群衆によつて、取圍まれた。『同志逃亡者』達は、あたかも眼玉が頭から抜け出すやうな好奇心で、私を眺めてゐた。

私はその廣場のテーブルの上によぢ上り、約一時間半彼等に向つて演説した。それは最も手答へのある聴集であつた。私は彼等の目を醒まさうと努力した。そして最後に、革命にたいする忠誠のしるしとして、手を舉げるやうにと求めた。實に私の眼のまへで新しい觀念が彼等を浸した。彼等は心から熱狂し、私の自動車について來て、まへのやうに恐怖を抱いてゝなく、有頂天になつて、私を貪るやうに眺め、聲の限りに叫んだ。彼等は殆ど私を去らしめなかつた。私は後になつて、彼等を教育する最もよい方法の一つは、『君は同志トロツキイに何を約束したか?』といつて、彼等の注意を喚起することだ、と知つて、多少の誇りを感じた。その後、リヤザンの『逃亡者』の諸聯隊は、戦線で立派に戦つた。

私はオデツサのセント・ポール實科學校の第二學年を想ひ起す。その四十名の生徒たちは、他のどんな四十名の子供の集團とも、實質的に異つてゐなかつた。しかし、額に不思議な十字のあるブルナンド、監督者のメーヤー、監督者のウイルヘルム、生徒監のカミンスキー及び校長のシュワンネバツハが、生徒たちのうちの勇敢な、他よりも優れたグループを力任せに打つ時には、告口屋や、妬み屋の馬鹿共は、すぐさまいゝ氣になつて、他の生徒を率ゐた。

聯隊といふ聯隊、軍隊といふ軍隊は、さまざまの性質の人間を含んでゐる。聰明な、犠牲的な人間は、少數である。それと反對の極には、すつかり頽廢した者、卑怯者、意識的な敵が極く僅かゝる。

この二つの少數者の間に、どつちつかすの、動搖的な人間の、大きな中間的なグループがある。ところでその優れた要素が戦闘で失はれるか又は押しつけられ、卑怯者や敵が支配者になつた場合には、その軍隊は崩壊してしまふのだ。さういふ場合、その大きな中間的なグループは誰に従つてよいか分らず、危険のやつて來た瞬間には、周章狼狽する。一九一九年二月二十四日、私はモスコウの『圓柱會館』に參集した若い司令官達に向つて演説した。『私に三千人の逃亡者を與へ、これを一つの聯隊と呼びしめよ。私は彼等に與へるに、一人の戰闘的な司令官と、一人の立派な人民委員と、大隊、中隊、小隊に適した數名の士官とをもつてするであらう。然る時、これら三千の逃亡者は、わが革命の國土において、四週間の間に一箇の優れた聯隊と成るであらう。……最近數週間の間に』と私は附け加へた。『ネルヴァ及びブスコフの戦線での經驗によつて、我々は再びこれを試験し、其處で若干のばらばらな破片から立派な戰闘的な軍隊をつくり上げること成功したのである。』

私は、比較的短い合ひ間を除いて、二箇年半の間、客車のなかで暮してゐたが、その客車は以前の交通大臣の一人が使用したものであつた。その箱は大臣の快適な乗心地といふ見地からは申分はなかつたが、仕事をするにはほとんど適してゐなかつた。其處で私は、報告をもつて來る人達と應接し、地方の軍事及び行政の當局者と會議し、電報について考究し、命令や論文を口授した。そこから私は私の共力者と一緒に自動車で戦線に沿つて長い旅行をした。仕事かひまな時には、私はケレンスキー

攻撃の書物や、さまざまな他の述作を口授した。當時私は、ブルマン製の車輪と弾機の伴奏で書いた
り考へたりすることにすっかり慣れてしまひ、一見永久にさうであるかのやうだつた。

私の列車は一九一八年八月七日の夜、モスコウで大急ぎに仕立てられた。翌朝私は、チェツコ・ス
ロヴァク戦線を目當てに、その列車でスウイヤーツースクへ向けて立つた。——列車は絶えず仕立て
直され、改善され、その機能を擴張した。早くすでに一九一八年に、それは一つの移動行政機關とな
つた。その各部には、書記局があり、印刷場があり、電信局があり、無線電信局があり、電力局があ
り、図書館があり、格納庫があり、また浴場があつた。列車は非常に重かつたので、二つの機關車が
必要であつた。後になつてそれは二つの汽車に分れた。我々が戦線の或る部分に或る期間停る必要
のあつた時には、その機關車の一つは、急使としての役目をよくやつたもので、他の一つはいつでも
運轉出来るやうにしてあつた。戦線は絶えず變化し、まったく見透しがつかなかつた。

私はいま手元にその列車の歴史をもつてゐない。それは陸軍省のなかに埋れてゐる。或る時その歴
史が、私の若い助手によつて苦心慘澹して作製された。内亂記念展覽會のために作製されたその列車
の活動の圖表は、當時の新聞の報じたところでは、非常に澤山の參觀者を惹きつけるのが常であつた
と云ふ。其後それは内亂博物館のなかに納められた。今日それは、内亂の最も重要な瞬間を反映し、
何等かの形で、その中での私の役割と結びついた、貼札や、宣言書や、命令や、旗や、寫眞や、ファイ

ルムや、書物や、演説筆記などのやうな、他の無數の展覽物と一緒に、どこかへ隠匿されてゐるに相
違ない。

一九二二年から一九二四年の間、即ち反對派にたいする抑壓が始まつた以前、軍事出版社は、陸軍
及び内亂に關する私の著述五巻を刊行する運びをつけた。その列車の歴史はこれらの著述のなかには
取扱はれてゐない。私は、列車新聞『途上』^{アッシュハート}の指導論文の下に記した場所名からして、列車の活動の
軌道を一部分だけ建て直し得るに過ぎない——サマラ、シエルヤビンスク、ウエートカ、ペトログラ
ード、バラショウ、スモレンスク、再びサマラ、ロズドウ・オン・ドン、ノヴォチエルカスク、キエ
フ、チトミール、及び何々と、際限がない。私は内亂の間、その列車の走つた全距離の正確な數字す
らいま持つてゐない。私の軍事書につけてあるノートの一つには、三十六回の旅行、全疾走距離十萬
五千キロメートルと記してゐる。以前私と一緒に旅行した人の一人は、記憶によつて計算すると、三
箇年間に我々は地球を五回半まはつたと書いてゐる——即ち彼は、上に述べた數字の二倍の數字をか
かけてゐるのだ。これには、鐵道線路から戦線の中心點へ自動車で行つた數千キロメートルの數字が
ふくまれてゐない。その列車はいつも最も危機的な地點へ行つたのであるから、その旅行の圖表は、
もろ／＼の戦線の相對的の重要さについてのまことに正確な、はつきりした描寫を與へるものだ。最
も數多く旅行したのは一九二〇年、即ち戦争の最後の年であつた。南部戦線への私の旅行は特に頻繁

であつた、といふのはその時期を通じて、それが凡ての戦線のうちで最も頑強な、危険な、且つ廣汎な戦線だつたからだ。

革命軍事會議々長の列車は、内亂戦線で何を求めてゐたか？ それにたいする一般的の答は分り切つてゐる。勝利を求めてゐたのだ。だが、それは戦線へ何を與へたか？ どういふ方法をそれは執つたか？ 國土の一端から他端への、その際限のない疾走の直接の目的は何であつたか？ それは單なる檢閲旅行ではなかつた。否、その列車の仕事は、軍隊の組織、その教育、その統率、及びそれへの供給と、すつかり結びつけられてゐたのだ。我々は全部にわたつて新たに軍隊を組織しつゝあり、それも砲火の下でそれをやつてゐた。列車が最初の一箇月間を記録したスウィヤーツクばかりでなく、戦線の全部において、さうであつたのだ。不正規兵の集團、白軍からのがれた避難者、近隣から動員された農民、工業中心地から送られた労働者の部隊、コンミニunist及び組合労働者のグループ——これらのものから、我々は戦線にあつて、中隊、大隊、新しい聯隊、及び全師團すらも、つくり上げたのだ。敗北と退却の後でさへ、弱蟲の、ビク／＼ものゝ群衆が、二三週間のうちに一箇の有力な戦闘部隊に轉形されるのが常であつた。これをするのに何が必要であつたか？ 澤山で且つ少しばかり。立派な司令官と、數十人の經驗ある戦士と、どんな犠牲も拂はうと待ち構へてゐる十二人かそこいらのコンミニunistと、跣足の者に與へる長靴と、浴場と、勢力的な宣傳と、食料と、肌着と、

煙草と、マッチが必要だつたのだ。その列車はこの全部に注意を拂つた。我々は缺所を満たさうとあせつてゐる若干のコンミニunistと、數百人かそこいらの優れた戦士と、長靴、毛皮のジャケット、醫藥、機關砲、雙眼鏡、地圖、時計、及びあらゆる種類の贈物の若干の貯藏物とを、いつも蓄へてもつてゐた。もちろん列車の實際の物質的の貯へは、軍隊の需要から見ると僅かなものであつたが、不斷に補充されてゐたのだ。

だが、——これが一層重要なことですらあるのだが、——數百回、數千回となく、それらの貯藏物は、特定の瞬間に火の消えるのを防ぐに必要な、シヤベルに一盛り of 石炭の役目を演じたのだ。電信局はその列車内で活動してゐた。我々は直通線でモスコウと連絡をもち、そこにある私の代理スクリヤンスキーは、軍隊にとつて——或る場合には單に一分隊に、又は一聯隊にすら——差迫つて必要な給與を求める私の要求を受けつけた。それらの給與物は、私の關與なしでは絶対に不可能な事になつてゐた通報で、配布された。もちろんこれは正確には、仕事をする上での妥當な遣り方ではない——と街學者は我々に云ふでもあらう、一般に軍部の場合のやうな、給與勤務においては、最も重要なものは體系的組織であると。それは絶対に本當だ。私自身どちらかと言へば、街學性に寛大である傾きがあるのだ。だが、問題は、我々はすら／＼と運轉する組織をつくり上げることの出来る前に、潰滅してしまいたくないといふことだ。特にその早期に、我々が一つの體系的組織の代りに速成的な

方法を執らざるを得なかつたのは、そのためだ——さうした上で、後になつて、その基礎の上に一つの體系的組織を發展させようがためだつたのだ。

私は旅行にはどんな場合でも、陸軍の一切の主要な部門、分けても給與勤務と關係のある部門での重なる勤務者を伴つて行つた。我々は舊陸軍から供給勤務士官を承けついでゐたが、彼等は、實際に悪化してゐる條件に對して、舊い仕方か、又はそれより一層悪い流儀ですら、仕事をしようとした。それらの旅行の間に、舊い専門家の多くのものは新しい方法を學ばざるを得なかつたし、新しい専門家は生きた經驗のうちに教養を受けた。私は、一つの師團を巡視し、その場でその師團の必要物を確定した後で、下級の指揮官及び兵卒の代表者、ならびに地方の黨組織、ソヴィエツト行政部、及び労働組合の代表者もふくめて、出来るだけ多數の代表者を招致し、幕僚車か又は食堂車のなかで會議を開くのを常とした。かういふ仕方では、虚偽でもなければ、立派に飾り立て、もない情勢の眞相を得たのだ。その會議はいつも即時に實際的な結果をあらはした。地方の行政機關がいかに貧弱であらうとも、それに拘らず、彼等はいつも少々ひどく搾り出さうとつとめ、軍隊に何ものかを寄與するために、彼等自身の必要物の或る部分を割いた。

最も重要な犠牲は、諸官衙がこれを拂つた。コミュニニストの新たなグループが、いつも諸官衙から引き抜かれ、直ちに、信頼の出来ない聯隊のなかへ組み入れられた。シャツや、脚に巻きつけるも

の、材料、新しい靴底にする毛皮、餘分の百斤の脂肉が、いつも見出された。だがもちろん地方の資源では間に合はなかつた。その會議が終つて後、私は、中央の貯藏量にしたがつて我々の必要物を評量して、直通線でモスコウに支給命令を送るのが常であつた。その結果、その師團は死ぬほど必要としてゐたものを、それも適當な時に與へられたものだ。戦線の指揮官達や人民委員達は、その列車のうへでの經驗によつて、上から、即ち幕僚の尖塔の立場からでなく、下から、即ち中隊又は小隊の立場、若い、經驗のない、新しい入隊者の立場から、彼等自身の仕事——その仕事は、指揮にあると、教育にあると、給與にあると、乃至は裁判にあるとに拘らず——に近づくことを學んだのだ。

次第次第に、戦線及び軍隊への給與勤務を統一する爲の、多かれ尠かれ有效な機關が設置された。だが、たゞそれだけでは、一切の必要を満足させはしなかつたし、またそんなことは出来もしなかつた。最も理想的な組織ですら、時としては、一つの戦争中に、特に全然移動を基礎とした策略の戦争中に——往々、悲しいことに！——全く豫見しない方向に、火をあますであらう。且つ忘れられてならぬのは、我々が給與なしで戦つたといふことだ。早くすでに一九一九年に、中央貯藏所には何ものも残つてゐなかつた。シャツは製造所から、かに戦線へ送られた。だが、あらゆるものうちで供給の最も困難だつたのは、小銃と彈藥筒であつた。チュラ軍需品工場はその日その日の需要のために作業した。一車の彈藥筒と雖も、總司令官の特別の權能をもつてしないでは、何處へもこれを送ることが

出来なかつた。軍需品の供給はいつも絲のやうに張り切つてゐた。時々その絲が切れた。すると我々は人間と領地とを失つた。

不斷の變更とその場の工夫がなかつたら、戦争は我々にとつて全く不可能であつたらう。その列車はそれらを發案し、同時にそれらを規整した。我々は、戦線とその直ぐ背後の部隊へ發案の衝動を與へる場合には、それを指導して、一般體系の通路へ導くやうに留意した。私は、我々がつねにこれに成功したとは、言ひ度くない。だが、内亂戦が明示してゐるやうに、我々は主要なこと——勝利を戦ひとつたのだ。

戦線のうちで、司令の役目にある士官の隠謀が屢々破局をつくり出してゐた部分への旅行は、特に重要であつた。一九一八年八月二十三日、カザンを前にしての最も重要な時期に、私はレーニンとスヴェルドロフから一本の暗號電報を受取つた。『スウイヤーツースク、トロツキイ。サラトフ戦線の隠謀は、いゝ時に發見されたが、まだ非常に危険な動搖を産んでゐる。我々は君が直ちにそこへ赴くことを絶対に必要だと考へる、といふのはその戦線に君が姿を現すことは、兵卒及び全軍隊にいゝ效果をもつからだ。他の諸戦線への君の訪問については、我々一緒に手筈をとらう。君の出發の日附を知らせよ。凡て暗號で、一九一八年八月二十三日、レーニン。スヴェルドロフ。』

私は、スウイヤーツースクを去ることは全く不可能だと考へた。といふのは、カザン戦線は、これまで通り困難な形勢にあり、列車がそこを去ることは、その戦線を動搖させることになると思つたからだ。カザンはあらゆる點で、サラトフよりも重要であつた。レーニンとスヴェルドロフは間もなくこの點で私に同意した。私はカザンを奪取した後始めてサラトフへ赴いた。しかしかういふ電報は、その旅行のあらゆる段階に列車へとよいた。キエフとウエードカ、シベリアとクリミヤは、各々形勢の困難を訴へて、彼等を救ひに取急いで列車にやつて来て欲しいと、よく代りばんこに又は同時に要求して來たものだ。

戦争は國土の僻陬で、しばしば、八千キロメートルに亘つて擴がつた戦線のうちの最も遠隔の部分で、展開した。諸聯隊や師團は一時に數箇月も、爾餘の世界から切り離された。彼方は彼等の間の相互交通に使ふにすら足りる電話設備をもつてゐないことが、極くしばしばあつて、そんなときには絶體絶命に陥つた。列車は、彼等にとつて、他の世界からの使者であつた。我々はいつも電話機械及び電線を蓄へもつてゐた。我々の列車の特別車の上に無電受信装置が設けられてあつたので、我々は、もちろんモスコウを第一として、エツフェル塔、ナウエン、及びその他の無電局、全部で十三箇所から通信を受けることが出來た。列車は爾餘の世界で行はれてゐたことの報道をいつも受取つてゐた。電報々道のうちの一層重要なものは、列車新聞で公表され、論文や、リーフレットや、命令のなかで、それについての當座の評註が與へられた。カツプ叛亂、國內の隠謀、イギリスの總選舉、穀物徵集の

進度、及びイタリーのフラスシモの饗宴は、出來事の足跡がまだ温い間に、解釋され、アストラハン又はアルハンゲルの戦線の運命と結びつけて、考察された。

それらの論文は同時に直通線でモスコウに通達され、そこから全國の新聞へラヂオで放送された。列車の到着は最も孤立した軍隊をして全軍隊との接觸を保たせ、ひとり國家の生活ばかりでなく、全世界の生活に融合させた。疑心暗鬼の風説や疑惑は追ひ散らされ、人間の精神が、強固となつた。精神世界のこの變化は、數週間の間、時としては列車が次に訪問するときまで、持續するのが常であつた。その合ひ間には、戦線又は軍隊にあつた革命軍事會議委員は、性質は同じであるが、規模の小さい旅行をやつた。

文學上その他の列車の中での私の述作の一切は、私の助手の速記者グレーズマンとセルムクス、及びわかい助手ネチャエフがなかつたら、不可能だつたであらう。彼等は、動く列車の中で夜となく晝となく働いたが、その列車は、戦争の熱病のなかで安全の法則といふものを一切無視して、よく一時間七十キロメートル乃至それ以上の速度で、がた／＼になつた連結線の上を迅走したので、列車の天井から吊下つてゐた地圖がぶらんこのやうに揺れたものだ。私は、止め度もなく躍り上つたり、震動するにも拘らず、いかにも明瞭に立派に形をなした表象を書くことの出來る手の運動を、驚異をもつた感謝の眼で、いつも見守つた。半時間の後、タイプライターで打つた原稿を受取つた時、校正の必

要がなかつた。これはありふれた仕事ではなく、英雄的犠牲の性質を帯びてゐた。その後、グレーズマンとセルムクスとは、革命の用務への彼等の犠牲にたいして、高價なものを支拂つた。グレーズマンはスターリン一派のために自殺に驅り立てられ、セルムクスはシベリアの荒野に閉ぢこめられてしまつたのだ。

その列車の一部は、數臺の自動車とガソリン槽を納れた巨きなギャレーヂであつた。これがあるために我々は、鐵道線路から數百露里離れたところへ旅行することが出來たのだ。二十人乃至三十人から成る選り抜きの狙撃手及び機關砲手の小隊が、トラックと輕便車を占めた。また一對の輕機關銃が私の自動車に配備してあつた。移動の戦線は不意の出來事で一杯なものだ。草土帯では我々はいつてもコサツクの徒黨のなかへ走り込む危険を冒してゐた。機關砲を備へつけた自動車は、この危険から我を保證した。尠くとも草土帯が泥の海に變型してゐなかつた場合には、さうであつた。一度一九一九年の秋の間のこと、ヴォロネツの地方で、我々は一時間に三キロメートルの速力でしか動くことが出來ないことがあつた。自動車は、黒い、雨のしみ込んだ大地に深くめいり込んだ。三十人の人達が車體を押し出すために、車から飛び出してゐなければならなかつた。また或るとき、河を涉つてゐる最中に、我々は河のまん中でとまつてしまつた。私は怒つて、背を低くつくつてある車體の上の凡てのものを非難した。この自動車は、私の優れた運轉手、プヴィと呼ぶエストニア人が世界で第一流の